

矢疵ある兜も出たり土用干振立てた角怖氣なし蝸牛蟻掃て母休ませる茂りかな

我子とも思へぬ程の盡ね願明日にゆひ折添へて菊惹

花の夢さめて火に來る夏の蝶包まれぬ身のいたつらや菟刀鍋

病む母へ遊める餅の加減かな山に鯛湯忘れし沖産物

竹の子か出たと叫ぶ小供かな落付ふ富士の影香む清水哉

此暑き留守の居處や涼み船風さ口をくりて出たり雲の峯

老の身も養ふ程の清水かな
 恵明て富士の山見る青田哉
 ゑん天や足をなけたす様の端
 ゆめうつ、動く團扇や親の恩
 夕立の晴てくりたす涼み船
 乳貫ひの替りてはつじ田植哉
 むさかはや植た覺のなほ庭に
 腹たて、角をかかすや蠅牛
 早乙女の歌も神樂の拍子哉
 涼しさや鴨も月の浮御堂
 雲一重月は涼しう潜りけり
 月のさす方を枕や蚊帳の中
 團扇や釣瓶から香水の味
 七景を渡してはかなし夏の月
 夏羽織着れし何所へと問はれけり
 宵はれに居 天氣やはと、さす
 酔て植へては竹をなかのけり
 一筋の道とうたかふ茂りかな
 見る人も行儀崩さぬ牡丹哉
 手をもれて竹に火のほたる哉
 窓に咲く牡丹で見へぬ富士の山
 芥子切や使自慢は花の無事
 田植等のこぼすあせまを米の粒
 郭公今一聲の秋に明け
 慰つれにはぐれてさとの螢狩

愛學の窓に香高き螢かな
 蚊遣焚く宿や寐る人起る人
 綻をひるは忘れし蚊帳かな
 朝顔から縁に自慢の土用干
 をしならて涙に涼しき宮古不二
 寄通た足引で見ると牡丹かな
 涼いと跡の人呼ぶ時かな
 草の戸や蓋も水鶏に叩かれて
 ひかうにも月まつ河岸や團扇音
 帷子や着心よりも脱きこゝろ
 草の葉の敷く小庭や風薫る
 畫顔や草鞋を通す砂の燒
 湖や涼しきたまを磨くなみ
 年忌訪ふ佛に放なす螢哉
 雨一夜その夜は明ん時鳥
 水屋で忘れて旅の團扇哉
 子に逢ふて道からやめる納涼哉
 一降は月に譲りて時鳥
 子をしたたい親もつかれて螢狩
 かしましと蓋寐をやぶる蠅の聲
 母の影音羽涼しき夏木立
 打解た咄しの跡や胸涼し
 さし傘の夕立晴れて日傘哉
 讀め解る文字を押へて蓋寐哉
 袴着て膝で封切扇かな
 靜さや床の牡丹の花平

後澤の月と見まがふ螢哉
 雨雲は上その夜さか夜の曇
 畫の苦を忘れて橋の夕涼
 朝寐して人の蚤にも喚はれけり
 菖蒲太刀さし草臥てかつきけり
 月鉾や涼し月にして戻る
 早乙女の子送瀬らして戻りけり
 聲に基は勝れけり時鳥
 暑さおも忘れて湖の戻り酒
 酒の鏡膳へ並らへて蓋寐哉
 風も其中から出るか夏の月
 曙に先たつ蟬の高音かな
 後れてもす、む手並みの田植哉
 行々子真似く来ても日は高し
 牡丹花に十日の雨や御代静
 ありくと見へて涼しや夜の富士
 閑足らぬ程であかれを戀し鳥
 取り落す扇に覺る眠りかな
 蟬啼くや脊中の子ねろす水の音
 夕立や傘と日傘の行遅ひ
 五月雨や軒に思案の溜乙鳥
 青梅となつて又畑ふまれけり
 是も皆親の恵みや土用干
 梅雨空や薄曇にじむ旅日記
 人情のか、れはゆるむ蟬織哉
 苗代や年齢に巧者な水加減

乘輿や思ひにひかぬ出商ひ
 賈い人もくれてもうれしあまき苗
 取次きの留守取消すや夕納涼
 雨たれの音の中から夏の月
 五月雨の中へ降り込む通り雨
 氣をもむや鯛解されし初松魚
 段日より木戸明て置く牡丹哉
 降もよう漣のくらみや時鳥
 ひけるはと汗を拭きけり下女の顔
 あと先はいつくぞ月に時鳥
 涼しさや人の替わつて次く咄し
 飛ぶことばしらぬ聲なり行々子
 涼しさや出船まつまの假枕
 風涼し沼もか、やく月の影
 うたへ共手はた、かれぬ田植哉
 落そうな岩の影さす清水哉
 憂き旅も忘る、蚊屋の月夜哉
 餘る乳の洩れて程しる田植哉
 青田吹く風は別かと思ひけり
 卵の花や客へ馳走の破れ垣
 す、しさを流れて通る川邊かな
 水の味知りたる今日の暑さ哉
 建替へし座敷ひらさや風薫る
 客去て聞詮薄し不如歸
 もの音も聞ぬ蟬や大樹立
 涼しさや涙のもて来る實なし貝

夕月の傾く方や鴨水鶏
 夜あかりの雨間日和や鴨水雞
 提やうもかしへてくれる牡丹哉
 見てもよし見ざる宜し時鳥
 月ありとねしむく澤の螢哉
 岩清水風も湧くかと思ひけり
 若に食て蚊の跡痒くなりけり
 祇園會や明ぬに出たる人の聲
 酒の座を抜けて水打つ主哉
 學ぶ窓螢も光り添ひにけり
 寐た親に心を置て蚊やりかな
 美しく親の恩着る裕かな
 浴け易き日が水屋の儲け哉
 明け捨の座敷におまる暑さかな
 親に聞歴の加減や一夜螢
 基の果ぬ親に持出す蚊遣哉
 三ヶ月を暇さ出したる落葉哉
 見る方へ向て皆さく牡丹かな
 伸ぬ葉もはや暇さけり今年竹
 蜘蛛一つ水から上る若葉かな
 手元から風の生る、田植哉
 馬の尾の汚れ勝なる五月かな
 雪の日にふんた麥喰てむきの秋
 笛の音のふけて涼しき祭り哉
 風からて梢にひやく蟬の聲
 出通ぬは人も奥あり新茶哉

養應の水で事足る暑さ哉
 麥秋や無法云ふ子のにさき箸
 塗益も及はぬ飽よ初茄子
 ねむる子の手から這ひ出る螢哉
 心から静々見るや芥子の花
 湖へ影さす雲や春あらし
 氣草臥するや田植の留主居まで
 來し人の立端忘る、牡丹哉
 朝顔は日和くせなり雲の聲
 蚊帳つる樂寐の里や時鳥
 夕立や卯辰廻りの外に降る
 松風を真向にた、む扇かな
 雨乞の神酒に酔けり茶のあるじ
 みなれたる月のめたらし五月晴
 うり買に苦のなひ事上初螢
 螢火や學ぶ子供の見ゆる月
 沖涼し淡路の鼻の見ゆる月
 あけのこる月はあれとも木下園
 好い中の後る合せや涼み螢
 蚊帳釣りて寝のうへまで月夜かな
 地も濡れぬ雨や牡丹の花の艶
 植込の庭も氣色や夏の雨
 汐さして一瀬となるや春嵐
 水添へば又別ねそうな松魚かな
 竹の根や溶り根の來て桐畑
 竹植て殊に月夜は猶清し

眼先から生る、やふぞ入梅雲
行雲に更けめの早し夏の月
出して有茶碗の足らぬ新茶哉
翔ふ手に風の盈る、清水哉
茶とわれどほど、きすとの庵哉
寐た親をおこして咄す時鳥
たどり来てはつと咽吸つく清水哉
またれても待つ身になるな郭公
蟬鳴くや脂の吹出る松の幹
月涼し我が神の戸は夏知らず
河骨や泥に馴染まぬ花の色
空はまた花散りなり初松魚
籠のある邊りゆかしや若葉山
家の向き容れは風の薫りけり
鑑の首を茂りの包む山路かな
涼風や笈をふるし九松の下
雨は今晴れ計りや氷りうり
涼風をうしの手突てうけにけり
子をもちて親の思しる轍り鯉
白魚や綴かの品に市の立
草の葉もしほる、程のあつさ哉
草分けて通る小道の暑かな
行先の軒で着るなり夏羽織
夕立やあまの白なみの涼
これはこそ寐酒と成しほど、さす
竹の子や親にまざるも親の思

葉もや人もゆるして驚く駒
忘れなよ老ての後は飯扇
空氣呼々扇や風の無盡哉
月二ツ荷ひ戻るや汲ひ清水
叱られた牛も見て居る田植かな
雨の後一際夏の月夜哉
客受にさしてをさけり杜若
出来逢ふた橋の手摺りや夏の月
ひめ百合や母の氣に合ふうへ處
はめられてお、さくみゆる牡丹哉
一棹の花見盡せぬ牡丹哉
通りきた昏さ忘る、木陰哉
卯の花や月は頼ます谷の路
榮そうないびきは誰ぞ蚊屋の月
一口は味を忘れし西瓜哉
五器賣りのよし野出て来る若葉哉
蚤に寐ぬ夜から煙草へ馴にけり
花を見た草臥の出る四月哉
對の書を書いて羽の轍かな
麥秋や晝寐して居る子も加勢
葉櫻や昔になりたる花の塵
月に寐て花の夢見や新涼臺
花嫁も屋津麗姿やひ露のあき
草踏み母をす、めて藥の日
傘の鹿相御免よ杜若

来て見ればはらの八ッ橋と杜若
提灯か須磨なら消そほど、さす
涼しさや勇める門の水うり
水打て待ては来にけり月と風
二ツ来てどちらも取れぬ螢かな
出歩行やこ、ろ軽さのはつ拾
一代に長者となりて牡丹哉
涼しさを賣り廣めけり扇子店
闇は葉の陰にかくれて白牡丹
涼しさに寐兼る夜なり水と月
見て仕舞ふ花に新茶の任哉
其罪は淵より深き鶴匠哉
谷の戸は春もよそなり遅櫻
乙島より身軽ささまや夏衣
親よりも早ひをわびて初拾
脊中の兒にまわして見せる日傘哉
旅人に親切はす岩清水
松こしの月を釣込蚊帳かな
月涼し草の中にも水の音
夕立の洗ふて行や京の町
旅人のつどう木陰や西瓜うり
寐ぬうちには叩かすに啼く水鶏かな
湯の沸んだものから先へ涼納臺
茶は椀に置て冷たる牡丹哉
舞一ツ下りて重き若葉かな
君が手に民草靡く扇かな

我袖もぬらすや虎の涙雨
薄遣ひの瀬に遣はる、手足かな
客振りを崩せは風の薫りけり
涼しさの余りは老の忘れ枕
窓照す迄に咲けり花卯木
安くと夜明るけしの一と重哉
梅が香も通ひし窓や風薫る
煙らして咄し契應蚊道りかな
卯の花の雪や萌黄の蚊屋平
夕立の先へ吹くる草の風
笈やこわれし岸を縫ふて出る
夕涼み羽織に紋をはられけり
青梅や母にかくせし帯の間
笈や虎の威らしき御山番
晝も灯のあらば焦すや夏の虫
露畑はかりに降るは夜の雨
唄に實の入れへ實入らぬ田植かな
御代涼し夜も戸さ、ぬ里の家
名高きも流れは細き清水哉
月影は夜毎にくらし郭公
起された不足は云わす初鯉
月の出で親子と知るや夕涼み
縁先に月を晒して氷りもち
花炭斗のついたま、なり初胡瓜
はつかしい方へかたむく日傘哉
やわらかにつみみて飛はす螢かな

宮守も晝寢して入る肚哉
ま、じさや月に枕のおき所
寝て見たさ笹の上や夏の月
蚊柱や何所にも風は見へぬ宵
起されて生洲見に行午睡哉
留守の門扇子を遣ふて歩行けり
僧の手にとつてひらきぬ蓮の花
打綱に結はかしこし石の間
起々の兒も機嫌よき轍かな
白蓮や已か心の耻かしき
蓮の香や私ならぬ乾こ、る
夜もすがら橋のほとりや夏の月
行道の間をも照らす螢哉
山丸うなるや卯月の雨上り
涼しさや月に穿へる渡し錢
立寄れば花にはあらで新芽哉
松かけや箸先へのる心天
踏こんで下駄とらる、や杜若
徳利と寝て戻りけり涼み船
吹越して来る風もなし雲の峯
見る眼にも涼しさ竹の庵哉
我影を手に結ひたる清水哉
こ、ろまてうつりかはりぬ初拾
昔しから今に待たしてほど、さす
手に軽く心に重し芥子の花
流上し月上し橋の涼みかな

陣鞋賣る店にはおしき牡丹哉
都から戻りは聞らし螢賣
新聞も讀かけてある晝寢かな
兒を寐せてそつとふせけり枕蚊帳
帆にはらひ風も馳走上夏坐敷
繩逐ふて拜ひや神の備へもの
丸い眼に角たて、蚤押へけり
水鏡扇遣うてうつしけり
夜も闇も淺き位や白牡丹
落さうな咄し涼しき二階かな
春暮て霞の残る青葉かな
老もまた若葉となりて出脱哉
添寐した兒を扱て行涼みかな
簾を越して風の香るや奥座敷
門の戸を明れば晴な、夕立かな
長居仕て物凄ふなる清水かな
雨乞や平に足らぬ御陰障
一正の螢にせまれ小舟かな
時めきし庭も古びて五月雨
寝た親は汗蚊をおもひやる團扇
雨に猶を重みまましたる牡丹哉
て寝たこ、ろ染しや一ト夜昨
砂糖水に下戸も上戸も無りけり
吹込た螢に明し窓のやみ
上い月に涼しき家の真向かな
蚊の鳥蚊遣はなれて戻りけり

素の蚊やた、さもならぬ兒の寝顔
持替る手も儘ならぬ牡丹かな
風雅にも洒落にもあらで月涼し
夏瘦は無か鹿の子の友狂ひ
五月雨や今日も若の客酒の客
朝顔に朝々軽き枕かな
短夜や明けても煙る蚊遣り哉
一手際見せる料理やはつ松魚
親擦する後ろに妹の蚊遣哉
大勢の咄し消しけり火取虫
見定めのならぬ夜空や五月雨
庵に富士見へて氣安し詣留主
ふみ散みし車風たすけし蓋かな
摩先にも月は曇りて郭公
荷をもたぬ拍子にもなる日傘哉
筆端の墨の甘みや臨生會
體いやは笑むる、なり柏もち
嫁一人起て衣縫ふ午睡かな
五月雨や陣の中より渡し船
夏瘦の筆とは見へぬ手紙かな
幾度も兒の出這や初蚊帳
此里の名の置る昔の清水かな
ついで鳴しては江越や時鳥
雨の後一際色の若葉哉
海山を右左り也夏座敷
時鳥沖へ落込む聲のはて

招く手の風か追し哉初蓋
梢より雨こぼる、や夏の月
晝寝した顔には欲もなかりけり
やれ打な腕は手を摺り拜むもの
狩犬の吠て人なし閑古鳥
日の光りたさへてねむる團扇かな
夏の月用なき橋を渡り幾
乞ひ過ぎて寒心のよし雨の音
阿りたる親も朝寝や不嫌
驚も羽を籠へに來た歎西川
鉢植や手のひらはたらしむ清水哉
醉醒のはらはたらしむ清水哉
春はと重き荷はなし旅衣
來た人を通す間になし土用干
松からも雲の手やはと、さす
見るたびに筆の香のする夏書かな
月涼し風又涼し橋の上
月の出る方へ向きけり涼み蓋
ぬれ色に夜の明にけり夏木立
過去つた母思ふ日や土用干
給かど云われて寒し二ヶ月
寝をしみて又出る夏の月夜かな
日の本の御代の貫やはつ田植
四疊半冷茶の結ぶ玉の汗
涼しさや富士を動かす田子の浦

身を賣るときめて母衣癖のどき覺
結ふ手に冷通しけり山清水
盡る程汲みても盡ぬ清水哉
雲陰も添ふて流る、清水哉
何よりも風の馳走よ夏座敷
花と見る露や青田の朝はらけ
はや夏の人がけさして加茂の水
晝寐したかはとは見へす夕化粧
菰鹿畑で涼しき夕化粧
添乳した親も其儘晝寐哉
餅に屑を休むる間なし親つばめ
木犀の落て啼たか夜のせみ
露を餌に浮世渡るか蝸牛
あした咲く牡丹に二度の使ひ哉
涼しさや月影踏む掛ひ襟
寐心もなしむまてなり竹夫人
見つ、來し木犀にた、む日傘哉
一輪に退屈ぬなき牡丹かな
初聲の一夜句ふや時鳥
皇か世は皆か富しき田植かな
風筋も見わて涼しき青田哉
憚りな揚りをも見せず田植哉
寐た牛を起して通ふる白雨哉
麥秋や隣は常の呉服店
徳なる卯月の空やはと、さす
蝶と入かはりく見廻る牡丹哉

人かけに蝶の放る、牡丹かな
月の夜や益敷ふる袖の團
子も罪の棹さし習う鶴船かな
香に酔ふて去り得ぬ蝶や白牡丹
花に身を崩したはてや松魚賣
筆添へて立ちけり風の薫りけり
蚊か貫ふ孝の肌へや焚蚊遣り
垣越しに折てやられぬ牡丹哉
風元へ老を直して涼みかな
寐仕度をして夜の更し夏の月
上ひを見る世界に鳴や時鳥
額に汗ながして歩行氷うり
借れられて袖に顔ひく扇かな
已か身をあつかへかねる暑かな
鳴て行く先は何地らや時鳥
照り合ふて都は廣し蓋かな
川狩や淺瀬案内を乳兄弟
是にさへ都のあるや蚊帳に月
極楽はこ、上富士見てする晝寝
髪剃てよい兒となれる午睡かな
川船や蓋おもひに暮て乗
底のなき座敷明れば青田かな
見渡せばた、一色の青田哉
若竹や今朝も雀にかこさる、
此頃の足らぬ跡めを入梅松
能い人に育て上げたし初蚊帳

織一ッ居ぬ温色や昔の花
日に向へて膝折り直す鹿子かな
松梅の中を延出て今年竹
皆に手を曳かれし老の納涼蓋
一日の事を忘る、納涼かな
教育の躰ひく后に牡丹かな
乳を貫ふ子も諸共に晝寝かな
先きいそぐ道も忘れて藤の花
子の手から力の余まる蓋かな
一とふりは氣味よき夏の夜雨哉
其日く殖へて築しや錢葵
辛抱は身の賣なりほど、さす
氷り持使に汗を流しけり
京紅の皿に焼るや蟬のこへ
観音の塔に當るな郭公
日の甘み月の華や兵桑瓜
沖の帆に隨う磯町の幟かな
一ッ来て暮際の立ッ蓋かな
蚊の居らてよい泊なり水の音
散事のなない喉やうか百日紅
行人の戻るも頼田の涼み哉
紐をどく迄にもてなす暑かな
小家でもゆたかそなる牡丹かな
廣くせば客來てせまし涼み蓋
帳見の人も正氣は酒の酔
庵の戸は未だ明もせず行が子

寄り合ふて都を照らし蓋かな
すくに解く物に念入るらまき哉
撫子や妻か望みの植
一輪に風動すや白牡丹
暮の客や此短夜を長案し
飛蚤に立後れして角力取
寐て待とうたは是上癖に月
新茶には馳走のあとの馳走かな
晝かはの外に物なし海士か庭
夕立やあらひ上たる竹の色
青梅や粒の揃ふも日の恵み
塵の世を去て涼しき山家哉
親へ壽の詞も添へる粽かな
麥かりの油断に暮を惜みけり
我が老の寝顔を撫て蚊遣哉
客の來て静に這入る燕かな
草の香の吹込む窓や青嵐
笠とる子を連れて行蓋かな
門先の暑さ掃き取る日暮哉
廻釣りて今年も木曾の咄しかな
今日咲て今日を盛りや芥子の花
道問へば筆をく音や青すたれ
盛りても聲は晴けり田植哉
組を遊ささうなり初松魚
鳥井からかひるい運ふ日傘
月踏た拾ひもの也はと、さす

陣の窓来て慰める蓋かな
行戻り涼し月夜の船便ひ
水論の沙汰も止みけり夏の雨
雨乞や隣村から憎まる
置替て亦腰かける涼み蓋
水打て風新らしくしたりけり
なでしこや亂れて咲も仕付かた
早苗取道追へ日の待れけり
かをもりや夢にかゝる月性そし
親の寝は風上に置く蚊遣哉
世の無事を飾て見せる宵哉
下りたれば元の夏なり富士詣
親しみの月にもありぬ門涼み
我爲の目に孝積む田植哉
夕立やそれくそれと云ふ内に
道き、に寄れば留守なり麥の秋
夏、の月砧の里はまた静
寐覚から笑顔する兒や蚊帳の涙
もふ寝よと母の迎へや蓋狩
涼しきや心の届く水の月
旅したきこゝろを忍ぶ給かな
塵みたる日傘を杖や船あかり
驚や子寶持つて老を鳴
龍音のやせて聞ゆる暑さ哉
子の歩む方へ差出す日傘哉
田植女のそつと覗くや兒の赤顔

石蕨の戦き見て出す枕かな
笹の葉も盆の上なら初松魚
涼しさを忘れて歩む涼みかな
能く勉め能く蓋寐して快し
賞ひ人か切惜みたる牡丹哉
夜に入て斗り宿つく暑かな
寝心を求めしすめや時鳥
君か代を唱ふて宇治の茶摘哉
村雨に出しぬかれたる夏野かな
笑ふ子は抱手も多し門す、み
忠孝を盡して眞の涼かな
開けたる人の知識や夏水
尻の蚤噛みてくるく廻る菊
手と扇子はかり見ゆるやかきの内
月の出た山から鳴いてはと、さす
暮れ鐘の中へ折けり舞の敷
見る人も行義正しき牡丹哉
谷竹は谷竹丈ケの戦きかな
涼しきや帆か帆追來る港口
とまる蚊をそつと逃すや子の寝顔
腹か男の貢をばけむ田植哉
心此處にありぬ高根や不二詣
寝ころふや涼しき月を標の先
氣遣ふて竿さす蓮の花間かな
眞直な心持たし蓮の花
了見の曲りは見へぬ蓋寐哉

若は跡に先にして出る花見かな
親切に水鶏叩く哉草の庵
どれも皆今朝の花なり杜若
清らかな風薫りけり公園地
切る心止て牡丹のから剪
かんせなき兒や炎天の庭遊ひ
片手には團扇片手は子のまくら
胸板の上へて漬しや夜の蚤
高水に柱斗りの坐敷哉
市は未だ夜の明さらぬ初松魚
草臥る雨正月や麥の秋
ものも云ひさうや牡丹の開ふり
涼しきや折鶴の舞ふ夏屋敷
涼風や眸も近きこけむしる
泥顔てたちて飯喰ふ田植哉
竹の子や兼足らぬ夜には似ぬ育ち
寝心も又新になり蚊帳の内
海軍の汗を捨けり沖なま
鉢植に水くれて見ん夕涼
吉野見て彌花はさくらかな
五月雨のたるみを降るや小糠雨
覺ぬ眼を養ふ庭の牡丹哉
蓮の香や見なれぬ人の朝参り
抱た子の乳房はなすや郭公
盃洗は西田川なり夏の月
はめらねて鉄のなまる牡丹かな

懸香や唐と大儀を一つ袋る
今種た竹ぬる風の生れけり
結や見ぬ日は早き宵ちふり
時鳥啼や闇夜の舞れもの
あの人に行けとはいはぬ毛虫哉
人遣ふ身はつかはる、田植かな
來る人も咄は同じ暑かな
有無の日やあるなしの氣の配り
とち向て出ても涼しき田舎哉
遙に行人も來て居て夕納涼
江の上や月は曇りて飛蓋
飛ふ迄は光らぬものははつ蓋
青梅や寐た子の手からそつと取り
寺参りする親過て日傘哉
さみだれや雲さり開く月の鎌
之演説者職を廢して輪しける
はめて居雨から出たり夏の月
水の邊に咲へて明るしかりつはた
山を這ふ雲に聲あり雨古鳥
咲てこそ其名も高き牡丹かな
切る迄に幾度行しそ初茄子
田の出來の匂ふ夕へや雲の峯
招く手に駒ひさ返す扇かな
寒付れぬ夜なり牡丹にあたる風
よし切のたまつて通す後哉
雨の日は籠もつれてか開古鳥

取送す波に見出すや落し針
中は川岸はけはしき若葉哉
花明りから輝せついで明け安し
豐作哉蚊帳の中ても寝の起つ
寝おくれぬ果報はと、さす
美味といふ色は水瓜を馳走かな
晝寝した親をあへて團扇かな
斗られぬ夜の照り降りや時鳥
人柄の見ゆる扇の遣ひ振り
降る雨の笠に音ある田植哉
行や人來るや人なり岩清水
蓮百合の風には散らぬ花の形り
虫干や昔を笑ふ具足櫃
行けは足る用に筆取る暑哉
初茄子後どの花まで教へけり
かたけれは傘重し時鳥
身は夜るの隙も寝られぬ星かな
益もなき會談に更す納涼哉
月も日も積る此身の暑さ哉
子の寐顔のそつと笑みつひるね哉
かりる手も貸す手も涼し扇かな
香すとも暑さをさくる水り賣
草風の直はる雨降る若葉哉
山か圃を都と思ふ雨古鳥
田植女や身に透る笠籠
ぬむけてへと透見せる牡丹かな

明鏡るいはらに戻る蓋かな
有葉や幹に似合ぬ花の咲
春負たるふこの姿や雲の峯
夏菊に還るや化粧の余り水
負ふた子に傾けてさすや日傘
不如歸まつ子に母も待れけり
女ては越せの栗りや雨古鳥
花に染衣もかへて夏こゝろ
先て蒸は投た笑いや白扇
植る田や親の差圖も一人まわ
谷々は滿て卵の花月夜哉
柳ども清水も名有る夕涼み
涼みくと思わす行くや橋の上
封切れば箱の開る、扇子かな
祖父さんも孫の土産に蓋狩り
道き、て行くや蚕の夕涼み
影は只夢なり空に時鳥
客の坐へ出しも馳走や蚊遣草
花に來た寺に又來る納涼哉
松風に別れて元の暑かな
涼しきや蛙の水へかへる音
蠶の音も納たやうなり五月雨
人の氣をゆたかにしたる牡丹哉
朝市や福錢揉あやみ賣
一枝を暮にすねたき牡丹かな
取越しの皆はめて行清水哉

湧香にしのよのめれる清水かな
蕨の花や馬で越さる、野の渡
人の来て門にイひ蚊やり哉
清水の上から出たり夏の月
釣りたれば風の生る、粽かな
よき分別も出さうなり蜩の中
暑さを乗て忘る、人力車
一聲を雲井に捨て、時鳥
突かへて又一盛り、杜若
風冷も助かぬ今日の暑かな
宿引の付かぬ泊りや五月雨
帯解いて扇呼ぶ日や客も来す
客立は鯛も立退く坐敷哉
蚊の啼かぬ斗り我家の馳走かな
襦の下へ掛けも暑き日なりけり
初給あたまたてんくする兒哉
涼風や手を當て見る煙草益
薄みどりさだ深からぬ若葉かな
川骨や泥も思ひの雨あかり
雲顔や朽た寄木に鹽の浮
我身をも母へ任せて衣替
脚木さへ知らぬ風持團扇かな
夏の夜の先きも明るじ益かな
富士か、し程に廣る敷道かな
夕暮の涼風添ふる團扇かな
二疊り晴れてあやめの咲き心

輕く共重き徳ある扇子かな
五月雨の雲にからみし竹の丈々
折足すも母の手向や杜若
松風を疊み込んだる日傘哉
牛の脊に啼て行きけり原の蟬
涼しきや野は一と色の草の風
花紅葉皆一時の若葉哉
短夜の明けすてなりや有磯海
五月雨や何時こそ見ゆる月日影
湯あかりや二階の襟の青あらし
折目立育ちも見へて薄羽織
寝た親を起すもいか、時鳥
風斗り入る穴はしき蚊帳かな
最ふ起さそ云ひつ、はつす蚊帳哉
寝た人を寝よと起すや納涼蓋
小板橋かたけて戻る田植かな
夏の夜の眠りもまさる蛙かな
清水汲む桶から出るや夏の月
兄弟のあまた出来けり旅の蚊や
ほころひてうかれし色やけし烟
宿借りし情を蚤に喰れたり
水見へぬ上に波立青田哉
能き事の翌日は嬉し短き夜
止まる蚊を呼吸て去なして木魚哉
見た禮に来てまた祝く牡丹かな
竹の子や親は曲りて居るものを

日の脚に顔撫くれな晝寐好
薄月に山たけ見へて郭公
時鳥山のうらての夜明かな
夕顔や月日は峯の西東
摘んだとは思ぬぬ柔の茂りかな
着重ねて猶す、しけや薄羽織
最一つとちいな添へて初茄子
紫い来て川原もせまし納涼客
腐れたる垣根浮雲し蝸牛
御盛屋は豈も小暗し夏木立
松茸を並へたよふな田植かな
姥いふす蚊遣りは嫁の目にしみて
根風の波にも立す夏の海
口説ともなしに口説ける暑さ哉
高野にも脚なればこそ美人草
納涼まれを行く哉す、むか納涼船
身から出た鏝を冠て筑摩鍋
顔のせて嫁の居眠る團扇哉
天の戸の明さまで叩く水鶏哉
月よりもうへを通るかほど、さす
水に眼のと、さししめや杜若
一ッ来た益に橋の騒さかな
とれ見ても鴨とはみへぬ田螺哉
寝所から其日案しる暑かな
月に雲早行燈へひどりむし
間に来た客は去にけり時鳥

實を結ふ時には丸るし栗の花
川狩や網の中にも月のふね
祖母の出て音嘶しや土用干
水論に酒より雨よ仲なをり
鉢植に呉れる手水や音涼し
一あをき直打も高き團扇かな
苦學す身には益も良師哉
借着して長座にすわる暑さ哉
作り木の行儀崩る若葉かな
蟬帯や煙草火借りに来る隣り
濡れた髪と濡れぬ樹のあり夏の雨
二度迄は無事でありし火取虫
舟の灯の涼しく見ゆる片間哉
木青に團む日陰や昔清水
日に匂ふ昔は清水の栗かな
柳にも風なき蟬の啼はしめ
冷し麥ぬるひと云ふて進めけり
夕立や人も脚木も蘇生る
遠やにこりにしまぬ花の色
玉なして落ちる谷間や群れ螢
笠脱は眉を摺り行燕かな
客をまつ間毎に團扇配りけり
風一荷撥うて暑や團扇賣
雨晴れを畫さし團扇のふちはに
青田から越して見ゆるや鷹の首
鷹の脊も日に増し低き青田かな

親の恩被て廣かまし初給
来る人は皆睡ましき涼蓋
乳を見せて姉に戻す團扇かな
此一ッ吐出す朝の蜂巢かな
不二よりは低うて高し雲の峯
親扇く子の手の軽さうちは哉
妻や子に朝寝許して遠見哉
苦ふめは足跡しつむ清水哉
潮の裏抜けて涼しさ覺へけり
出る月のぬれ光りして五月晴
月春て母す、めるや門す、み
杖となる一ふし持て今年竹
雨晴れてはのくと聞くと田歌哉
耳摺て牛の尾動く燕かな
谷間から雲の湧出る五月かな
骨折らぬ人か上手上扇店
晝に書けは高さふしさへ扇かな
抱た兒に抱させる菖蒲かな
行きか、る醉や凄し閑古鳥
深々に呼れて運ふ益かな
寝覺よき風や若葉の戦より
眠る師を靜に團扇扇哉
日にゐるし月に巻けり青簾
短夜や下女のつふやく長嘶し
義理のある子に睡いそく拾哉
雨乞の火に啼草の蛙かな

素裸体の詮方もなき暑哉
晝顔に我影かして手折けり
四五寸に夜道明たり蠲牛
持出して夫から客や涼蓋
立間に借しや片耳はど、さす
自からさがる氣になる小鳥哉
風先や母と居替る涼み蓋
母次蟬や兒を持て知る親の恩
留守居して成る程四月中十日
望まれて嬉しやくれる餘り苗
無事にたつ月日ははやし初給
佐保姫の姿かくれて更衣
聞後れたりな扇のはど、さす
一ト年て死すとは見へす登り鮎
寐た家の門には借し、夏の月
炎天や岩に煎つゝ鶴の雪
草の戸を根ごとた、く水鶏哉
眼を憩ふ木もなき原の暑かな
雲に月貸して樂しむ益狩り
散る牡丹山も崩る、思ひ哉
短か夜を伸して寐たる手足哉
雨晴てをもそふに咲く牡丹哉
一ト田植仕舞ふて呉れる娘哉
誰となくつれの待る、夏木立
颯とるや親の樂麻の枕元
親の影心にふまぬ田植哉

竹植て静な雨を聞夜かな
見習と兒を呼門の田植かな
都にはこんな夜もなしはと、さす
掃出して行衛見て居る毛虫哉
見心の移れは眠し遠の花
涼しさや月と鳥居は海の上
なし崩し開く煙や時鳥
とうするか見たし葉末の蝸牛
花筒に四五本朝のうららかな
虫干や亡き父母の思はる、
曳て出る馬も蝶体や夏の月
露露の採れ恥しし筑摩鐵
書團扇の風和らかし辻か花
三番夫の案に落付乙鳥哉
五月雨や草にとりつく草のつる
じはらくは草の上なり夏の月
敷上頼む想た母より我させ
はみ返す子鳥見たり夏木立
明發る月はしらけて時鳥
雨乞や吼まけて寐る門の犬
蓮池や硯洗ひは鯉の浮く
脱敷は蟻にひかれて蟬の聲
白雨や座敷に残る扇かな
夏夜もせぬと母への端書哉
戀しさに人か吟ふ並哉
母の寐たかたへ敷道をあふさけり

虫干や茶の羽織見て出る涙
手を通す時はやかるさ拾かな
三角な田や一株の植仕舞
二夜程しんばしてみて初蚊帳
癖に夜を寝して涼し朝の旅
青梅や姑は嫁をたいしかる
いつ見てもちり一ッなき清水哉
炎天や植木に水も届さかね
大日本是れも浮巢の一ッかな
忠孝の道を五月の闇もなし
誰か門戸た、くと見れば水鶏かな
雨雲の見て暑の募りけり
拜領の御紋匂ふや土用干
来た人に柱ゆつりて納涼哉
飛遊ふ蓋に闇の深さかな
木かくれに鳥の音はし蟬の聲
人込の中から出たる蓋かな
夕立や雨られてしる親の思
君か代は枕も高き蓋寝かな
動くかど柳見て居る暑な
寝入られぬやうにして寝時鳥
水に影運ふ車哉夏の月
鬼百合や其處吹風のあらく見ゆ
葉かくれの月にも似たりかしは餅
短夜も母に親度附燈草
不自由に柳を道ふや夏月

松蔭も添て動くや青藤
うれしさや蚊遣した夜の高脚
卵の花の後ろになりぬ朝の露
若竹やさからふ風もなき宵ち
蚊遣火や見のうた、寝をいとふ親
蝙蝠のそれ込影や横小路
よしあしの昔語りや土用干
貴ふよりくれて嬉しや初茄子
母に來る蚊を詔云ふて打子哉
豊かさも花の王なり白牡丹
はつちりと隣り座敷の扇哉
子に傘をかたけて親の暑かな
外に出て月を見よとや火取虫
居なからし船見る椋んや風涼し
夕立の間に昇りしか山に月
蚊はしらの中から出たり馬の顔
夏夜を互にかくす親子哉
孫に手を引れて來るや祖國會
一たんは裁より高し今年竹
夏期や無心して呑水の味
忘れたる扇て主を招きけり
涼しさや流車より下りて舟の中
路に風はるりと落ちるいらかな
老松に名高き路矢の清水かな
桐の葉を廻らば暮ん蝸牛
霞か家もふとさ廻りや夏の雨の

水かけて火をともしや蒸気
別れ路や又逢ふまでの時鳥
古池に月おさし込鴨かわす
涼しさを人にかさはや峯の雲
添乳して寝る手の動く扇かな
蟬鳴や結へは長き帯のはし
寐た親にそつとはいふう扇かな
袂し手に雲の動や杜若
取た跡見ながら休む田草かな
水鳥箱庭の島めぐりけり
白雨の洗へ出しけり月の影
うしろから茶を出し椽や夏の月
さらし井や足りて事かく貴水
夢覺て亡き親思ふ郭公
樂しみも暗夜の宇治や螢狩
眠る子に母もついでひる寐哉
遺問は一度に止むや田植かた
鐘の音は説の音か五月雨
常に見ぬ道のつきけり野の清水
蓋とれは硯と梅雨のにはひかな
木の間から聲もこぼれて時鳥
夕立の隣で涼しき庭木哉
撫子や庭の手入を花の色
牡丹見て思わぬ宿に一夜哉
明夜の、別れになくや時のとり
土用干や壘の上の廻り道

妻折の足は田植の姿かな
忘られぬ男ひてりのあつさかな
折ゆれののして香の強き花袖哉
寝た親の側に子のたぐ蚊遣り哉
鳴やみし蟬蟬の來て鳴せけり
畫も蚊にさ、れつ神の棚蔭
日記書く矢立乾きぬ夏の旅
半分は川の中なり涼み畫
尻までも眼配りのある田植かな
竹計り道でそよぐ扇さかな
江に影けの薄る葉裏や蝸牛
短か夜や朝に親へはぞつと起さ
水無月や流る、ものは汗はかり
たつね行魚の名しる、句う梅
湯上りや別て涼しき浴衣かけ
月花の友をつくるや青ふくへ
日据た斗りや芥子の花盛り
五月雨の暗夜をてらす螢かな
親やか手鳥を手持初のぼり
客はまた寝たらぬ顔や冷し瓜
さてあつし暑し何國も稻の色
神樂女の化粧も薄きあつさ哉
行掛て遣るや乳を呑兒の顔
蠅と蚊を防げは蚤にさ、れけり
す、しさを子の寝たあとの風車
船繋く柳もありぬ夏の月

涼しさや藤越れば鈴の音
松風や木の間にた、む日傘
世のうさをへたつ山家も蚊やり哉
伐るどして伐へき牡丹なかりけり
比類なき花の吉野や昨のふ今ふ
夕立や向ふの村は入白さす
親の手に映せて見せて辻か花
草々のあやめを照す蓋かな
馬の脊に表表附く白鳥かな
時鳥中道行は京山
夕立や常に不沙汰の家ながら
白雨や川を隔て、傘と笠
朝顔や花に毎朝起き後れ
夜中にも米とく香や蚤時
行は立くけり野の小蝶
もの學ぶ慈のくうさや五月雨
膝に手を組んで尉さぬ遠見哉
涼しさや富士を斜に下り舟
虫干や今年も殖し單子敷
夜燈まで追ふて蓋に別れたる
花と花やかてすれあふ牡丹かな
短しか夜の酒の枕かゆめの内
水賣る聲の暑さや午睡時
白立も知らぬ清水の流れかな
はたか火で雨風いとはぬ鼓かな
稻妻や孝子は親の影なり

五月雨に直し朝戸の引心
不二の風扇子に載て江戸土産
歎に手を止めて竹の子詠めけり
一ツつ、火灯して賣るさりこかな
しかられし益飛出やとんぼ釣
日を負ふて歸る山路の暑さかな
夕立や濡れまつ親を迎ひ傘
橋納涼席るを吉にして戻りけり
鶯の二度餌すまして午睡哉
寝た親の後ろへ廻す蚊遣哉
孫に手を曳きて老の日傘哉
龍と飛ひ虎とかけ出す鶴馬哉
長閑や團なき身の神詣ふて
螢見や笑を受し薄羽織
はどなくも明てや白き夏の月
冠吟を頼と睡魔にとりさられ
振袖に簪着たもある田植かな
親の汗子の身に招くうちはかな
拜領の硯取出す牡丹かな
かす燈を友と見て来る螢かな
清水にて後れた人を待にけり
まつたかひなき朝顔の盛りかな
むつまじき夫婦端居の涼みかな
日曇みて猶遅しき男かな
雲の峯いかるや坂に水の味
蟬鳴や日除けに植し庭の松

乗合の出来て殖へけり船の蚤
竹の子もよのうさふしの初かな
大君も取り初めたまふ早苗哉
葉櫻哉よしの常の山と成り
子の汗に親の病まる、暑さ哉
夜來れば膝つき合て納涼かな
啼けはこそ待たる、もの上時鳥
笹の雨吹来る、或や夏の月
關深き夜をわやどりつ飛螢
脊に汗の流れに廻ふ哉踏車
鳴呼く、と響る涼や湊川
家々は戸さして田植日和かな
時鳥なくや油も夜も少し
着心は春を忘る、拾哉
渡り見ても家尻の低し夏の月
盛り益に月光りけり一夜酒
蠅ひ打て寝た子の顔を覗きけり
手に闇を掴ませて飛ふ螢哉
時々は扇も動く、蓋寝かな
暗かりに人の聲あり、蓋持り
親退ひて寝た兒覆ふや枕敷厨
涼しさや湯あみせし子の顔に紅
螢火で照むやまらせひかし
雨池の底まで見へて雲の峯
返事にも汗に、じめる字ありけり
燈を添へて二と露目出つ牡丹哉

涼しさや月と我との敷越
薄衣着て鳴く蟬のあつさかな
是も又國の寶や紙轆
くさかりのうまやにひかる螢かな
卵の花の雪から白ひ道根かな
華や身受の後には丸探
重そふになるまで開く牡丹かな
三味の音の潮を流るや涼み舟
一疋の蚤に帯とく貞女かな
もふ花は谷の蔭なり若葉山
二つ三つ潮に流れて飛ふ螢
遊園扇顔におそふて蓋寝哉
和らかに舞敷ふ牡丹かな
皿の輪も動くやうなり太心
雨ふれや、田植のぬれ序
よく寐たる兒に覗きけり枕敷
乞い逃げた雨や小金の降る心地
賣る人の顔まで見せて螢かな
なき人の思ひ出されて土用干
みさび江に染まぬ色なり杜若
鳥羽玉の闇半分て白はたに
鳴蟬の衣はしめる夕立かな
手をひろげ愁もなないめの蓋寝哉
いちちはさてひきさの谷や時鳥
けしちるや浮世の人の露の上
酒吞て居てもはななき團扇哉

蚤飛ふや未だ香も去らぬ青塵
團居まで拭ひて掛るや青塵
親くはと日傘をかきす娘かな
涼しさの家や山から落る水
夕立にぬれても肌の暑さ哉
灯を虫にとられて暑めつ夏の月
愛さる、蓋や蓋は只の虫
手届になれはそれ行く蓋かな
蚤につ、き出されて見るや更た月
月の上漕ぎ行く船の涼かな
無事な身を無事に御飯の祈りかな
短夜の腹に聞くや貰ひ乳
谷川の 水音惜し時鳥
身洗ぎして心も清きなとし祭
水打つや巳がこ、ろも濡る、程
暑さひや木陰にさろりひとねむり
繪にかければ不二も納まる扇子哉
涼しさや井戸の屋根道ふ垂柳
着て馴れぬ肌を素軽し初袷
手のたはぬ處か盛りや牡若
母に初手新茶吸けり上手録
木の間四る風音真き四月哉
けこの花咲きしその日も露の中
古庭に砂新らしき牡丹哉
帷子の片袖絨わや朧まくら
五月雨に軒を離れぬ煙り哉

ふらりつと笹にさがるや蟬牛
炎天やさす潮先に泡の湧く
縁の孝母に依る蚊を煽きけり
置き處親に尋ねて蚊遣り哉
露多き草に移るや月涼し
五月雨や折く、雲の時明り
養老の昔語りや瀬の音
さつはりととして心よき夏洗ひ
打かけし若誓持込ひ蚊帳哉
若竹や蓋にもこぼす露
馬の脊を動かす蠅の力哉
走りても蚊の付て来る夜舟かな
さし出せば人目そ、くや舞扇
門先に似わぬ竹や初轆
一と寐入して釣初る蚊帳哉
負ふた子に手持添る日傘哉
白雨をのせた帆も来る矢はせ哉
抜けは入る入るれば出るや腰の汗
寐た親の顔見度く来る啼く蚊かな
曳あけて船の裏焼く暑さかな
鶴に乗るおもいも出たり富士詣
隅田川の水は流れて時鳥
颯た、き又もねてる兒起しけり
水掛る程猶もゆる蓋かな
寝飽させぬ夜を寝惜ひや夏の月
笹の露に這付く清水かな

双親を蚊にかませじとどる團扇
思くい蠅た、かれもせき兒の寝顔
おしそうに開く牡丹の景色かな
裏側は半分梅の青さ哉
蚤一ツおさへて開や明の鏡
内でもさへ淋き入梅の旅枕
涼み舟動く柳につなきけり
寐せ起す風の主や扇かな
獨りねてさびしき蚊屋の廣さかな
火ともしていやしくしたり涼み船
潜り人のこ、ろもまるき茅の輪哉
兩國も左右に船の納涼かな
涼しさや月のせて出す氷り水
月を坐に置いて去にけり火取虫
月の能き方を上坐や夏座敷
居並ふや遣ふ扇子の貰ひ風
蟬鳴くや足濡らさるに渡る川
蟬鳴くやこはれ兼ては戻る雨
行先の行てさだまる涼かな
蚊遣火の軒端に抜く田舎哉
破れ日傘さす子に影や親の思
新麥や干て俵のへつた蚊
吹ばらるけしの後の柘哉
町中に來て高ふ飛ぶ螢かな
真心を割て見せけり西瓜賣り
十五夜の月されくや軒すたれ

最一人はねればねらる、朝かよ
杖笠も若せて宵寝や富士詣
朝露に雫も染けり紅の花
京を出た日計り白き扇かな
親よりも上になりけり今年竹
涼しさや灯も流れてる京の川
一としり松匂ひ来るるかな
飛込た儘に春を出すかな
湯上りや團扇片手に庭歩行
涼しさや添衣離る、屋の涼
並松に恐れ無きなまの聲
東聲も生きて飛びけり初露
雨の夜は寒うらにすかかな
あまませる子に陰翳る日傘
離の燈も揺りもせせ火取ひし
湖の隈に五世鳴く五月
袖が斧のがりた木な 柳の
東雲の静にわけて花子の花
ついに見ぬ人の上にな 夕涼み
探り向けば月の
蟬鳴の片もへする火取虫
秋かとも思ふや須磨の夏月
添乳して子にあふがる、團扇
湖の底へ登るや富士詣
戸口から土塵見通す牡丹かな
蓮に風の見へて牡丹の静なり

假寐の親を象遣ふ團扇かな
團取も蚤にはまけて寝の夜哉
ふたつさてもちらも透す螢かな
風の香や振り向かたに三保の松
白るされて手折枝なき牡丹かな
定めなき世や浮草の流れ咲き
しどやかな風之運ひや白扇
上下に打つ浪静し舟の蚊帳
赤草を返る程静なる田哉
障子の鏡さわりてゆるやけしの花
屏のまに水の安まるや杜若
苦暑て眠見ゆる船や時鳥
留主の日は蝶のもみする牡丹哉
思のある門て片ひく日傘哉
早乙女や子の胸く方に植て行
涼しさを山よりわけて庭の水
去静して家は別なり蟬牛
月涼し友は己れか影法師
枯木や葉も青くと葛の思ん
涼しさや竹四五本に月ひとつ
我門て歩行たらぬや夕涼み
濡れる氣て門まで出たり夏の雨
早乙女や子の胸く方に植
柳から吹く風れけり飛ぶ螢
國のくの色香競べる新茶哉
青柳や風も無心に吹まわし

若は葉の種を詰めて田植哉
源平の昔を競ふ牡丹哉
紫陽花や今年も變る庵の主
朝風に露の香りを杜若
眼覺けりうつ、に打し顔の鯛
三方野も墨畫と成りて時鳥
夏剛や人は見へねと鎌の音
小家にも此大りんの牡丹かな
居かりて影を寫せし清水哉
釣草やさせる片手に掛直し
葉柳や押分け渡る丸木橋
雨の日は親にすかりて今年竹
傾けた心の見たき日傘かな
花紙や牡丹の中の白牡丹
灯は虫に振られて鏡よ月明り
我影のひくうなるはと暑哉
朝間から水打て待つ暑さかな
雨乞や盛れは晴る、胸の内
身に輕き松陰のせて晝寝かな
海の香の水にかよふやこゝろ太
しからみの水音す、し夕木影
蓮咲や音も聞たし月の影
添へてあるさ、の青みや初露
短夜やまたねぬ家に起る家
神代より國は破れぬ田植哉
香て後旅つかれ見る清水かな

大石浮れても油断なき身よ芥子の蝶

笑ふ門へは人の来る納涼かな
これかはんは世のたから也汗の玉
みじか夜や峯の松風谷の水
涼風や立しはもなき松の陰
昨ふまで春てありしに時鳥
豊なり牛も揃ひし田植かな
昔灰にならぬたばこや五月雨
ひとりでに舟を落して涼みかな
夕立や松に美名を千代迄も
葉柳やとふ迄しれぬ青かわも
夕立や笑てかゑる水げんか
若竹に最も馴染たる雀かな
北陸岬やさくらの上を郭公
乗り送けて神恵に報ふ鶴鳥哉
なげられてつ、かたむきし牡丹哉
一とすみは子に残しけり朝の蚊屋
蚊屋起しに無事見る親の寐顔哉
中端川 包込つ の若葉哉
富士詣笠の裏てる朝日かな
涼しさや豊原に薫る風
明安し鶏の音聞ぬ里もかな
はちふりや蚊になる迄の浮沈
入船をながむるゑんや夏の月
夕立やはつけかけこむみだ堂

夏菊や葉裏に雨のた、さ砂
宮す、しされと晝寝は出来ぬ札
差覗く井戸の深さや雲の峯
酒やりて客のこしけり新茶哉
手に戻る實の種ぞあせの玉
名の響き聲より高し時鳥
川船や余所の暑さを渡行
一塵は空耳もがなはと、さす
針仕事目からささきぬ夏夜業
蚊に喰れのみたてられ涼み哉
蚊屋無てはだかで親の側寝哉
ふとはめてねざられもせせ初茄子
灯を提て心は闇の螢
轉寝の親の蚊を追ふ團扇かな
大平の世を笠にして田植かな
竹の子や夜のみしかさを疑われ
川船にしい歌を積や夏の月
夕立や小川の車つきはじめ
葉柳哉さのふの雨の朝平
眞ひ人の供連れて来る牡丹哉
顔に日のさして驚く晝寝哉
はと、さすなくや手煽をそでの内
水捨る草にこぼる、盛かな
千町の細手動す田植うた
糖母を仰ぐ娘の團扇哉
短夜や涼みながらに鶏の聲

五月雨に曇り鏡や田子の月
五月雨や在所は何所か麥のわら
淨瑠璃の下手にはすぎしよし雛
夕立や届けば晴る迎ひ傘
郭公道二筋はなかりけり
大寺も終には包む茂り哉
蝶どもに黄ふて来たる美人草
蚤と蚊を言譯にして晝寝かな
短夜や島は物かわ郭公
手枕の夜はふけにけり夏の月
蚊を追て親をねせるや夏の月
謎わけををるして孫の更衣
物言はぬ身は名も立を竹婦人
未だ遊ふ島の聲あり木下閣
獨りさて聞とはをしやはと、さす
雲脱ひだ富士見る湖や五月晴
夏の野や代は万年の朝けしき
冷カシテ價も高き氷賣
曇さをば忘る、橋の夕涼み
錠下りた鏡にも寐こひ入梅の暗
人の汲む間も待兼て清水哉
夏じけどかくやと知れる乳の黒み
あれと云う間は見所や夕花火
松風のさのふにかわる清水哉
夕貞の咲や野路から戻る主
もちかへる手に崩れけり芥子の花

益かどつかりば草の光り哉
雲の影青田の波に流れけり
千金の價や坂に汲む清水
富士八歩九歩迄青し五月晴
人は皆黒みて晒らす布海苔哉
涼しさや水の音踏む橋の上
せんたくのそ、ざわせまし杜若
はこ立ちに杉も茂りて神の山
青鷲やはりに影浮く松の枝
眞民の心合しし九單物
一くちで唇さ忘る、清水かな
よき風も荷へばあつさうわかな
から釣瓶揚げて笑ふや時鳥
虫干や昔しをかたる土用干
瘦につきていかにもと出る器かな
ついで来るやうに思ふや郭公
垣越に見ゆる葵の盛りかな
寝た親にそると釣りし蚊帳かな
驚はなを白ろし青田の青むはと
雨乞や願はぬ里も一としめか
受け賣の咄も賣れる店涼み
葉さくらととなりては常の夜明哉
夏菊哉短き夢の拾處
帝かぬ蚊の燈行廻る夜明哉
父にをくる今日の暑やしうちわ
是れ見など耻ぢに乙女や汗手拭

松風も我物にして輝の塵
若竹や親にも増る笹の色
郭公さては消へしか雲もなし
餘所眼にも頼母し親にさせぬ汗
涼しさに聞更したる笈かな
かしくかく尋りに成りて火取虫
一輪に花枝はしき牡丹かな
若し寐たら夜に聞かせよ時鳥
橙の花やゆたかに家がまへ
望まれ、牡丹に重き鉄哉
闇の底動かして飛ぶ益かな
蝮か夜の枕に残る別れかな
水るかと思ふ牡丹の卒哉
骨に成る途親あふと團扇かな
門前は廣き馬場なり桐の花
砂川や埋れつ癒れつ五月雨
外に眼をはづせは眠き若葉哉
ふれとあはさざあつとをな團扇賣
吃りたる子に委ねけり火取虫
白蓮の花からしらむ夜明哉
別馬もいとわを纏のとまりけり
乗直す馬足軽き清水かな
蚊に鏡を映はれた様な泊り哉
川風や夏の夜響る人の行
斷りて行儀崩すや夏座敷
富士のかげ受けても軽るき日傘哉

短夜や朝々母に起さる、
高過ぎて風情のみへを桐の花
青梅に紫の心の通ひけり
身繕ひしてから浴るちのわか
垣間もる牡丹ゆかしき主かな
風繼で聞き直しけり時鳥
親の氣を汲んで吞じ茶や日の盛り
涼しさを暑ふ押合ふ涼みかな
瀧に音ゆづりて晴る五月哉
夕立や親の言葉のせなのかさ
虫干しや我物ながら珍しく
散るはづよ跡に儲なけし房頭
うつじて芥子も咲く日を待れ幾
又ひとつ離れて涼しや波の鳥
箱入りの娘も門や夏の月
葉櫻や蝶も見に来る花のあと
若の勝負笑ひにしたり火取虫
吹く水に引立つ籠の益かな
綿入の重荷おろして初拾
風の畫を望まれてかへ扇かな
若竹の茂りに盛る小窓かな
雁れ越し見る水湖や風薫
にくい蚊をそつと撫るや兒の寝顔
灯を消してからの明りや夏の月
静かさも机の先や迷の花
五月雨や井筒とり巻く立断

子にせがれ親にうるさい夏のはい
寐た母へ孝の見へ透くもじの蚊屋
寐て足らぬ夜の店照らす鶴舟哉
さし足でそつと着せけり枕蚊帳
結ぶ手に鳥居のうつる清水かな
勝口の若につかい出す團扇かな
首草にすつる益の夜明かな
一人づ、子をあかき込む蚊帳かな
梅雨晴やもて来たよふな富士の山
花よりも嬉し青田の夕詠め
雨と霞の聲聞く山や疎鼓鳥
雨に日に替る青田の景色かな
鐵撞は兄に出る芥子の主哉
玉の汗かひて賣の山路かな
牡丹見て居れば打出す時計哉
千萬里ないて飛びけりはと、さす
時鳥覺めてあどなし春のゆめ
持情む扇は虫に喰れけり
縁く世の人になる子や玉の汗
まだ母の肥滿嬉しき納涼哉
世はもの、流行かはれど牡丹哉
常盤木の落葉に育つ新芽かな
一ト聲の跡に夜はなし時鳥
ゆかりある燈火光る益かな
涼しさや水物店の灯の戦ぎ
石竹やはなれ坐敷の一けしき

苦も樂の秋ぞまたる、田植哉
草の種や一聲時鳥
今咲な花に風あり杜若
夏夜に母は心をけづりけり
跡戻りして越す橋や行々子
五月雨る儘にくれけり麥の秋
引出しに力の入るや五月雨
有難き雨乞受て朝寝かな
貴ひ子に人の眼の附く拾かな
二々夜目にと、のふ婿の釣手哉
泣も得て濁りこがる、益哉
一人づ、活きてのさけり岩清水
何氣なく自由に騒し飛益
開くれば富士もひと眼の扇子哉
周莊の夢は覺けり蜀魂鳥
陣貝に、鯉の太鼓や土用干
舌打ですり火さがすや火とり虫
枕蚊屋月さすかたへ廻しけり
引汐に暑さのつものる磯家哉
水替て魚も涼しき磯家哉
撞拾た鐘の鳴込む夜り哉
涼しさや假寐枕に扇箱
梅雨晴や書師に見せたき不二の山
魚た子に髪なふる、あつさかな
一聲を響に響くや時鳥
蚊を逐て後の親度の夏の月

打は火のいつる岩に清水哉
鶴は留主して諷ふ田植哉
走る腕の見ゆる時や風薫る
夏の夜の月や戸口にはいからず
長かれと思ふ渡ししや夏の月
枝のま、はしき柳の益かな
客ふりの小庭にならす扇哉
夕暮や牡丹にふるす鏡の音
口あらば光る度鳴飛益
降りなれて水も澄けり五月雨
夕立や化物走る山の裾
合客や蚊屋或ひして笑聲
打水や扇の向ふの柳まで
折れ込だ竹に瀬の付く清水哉
其の風のどこまで薫る團扇哉
桑茂る老の住家や五畝の宅
かけてから風の見ゆる哉青藤
川に添ふ樹々も眠りて蟬の聲
橘の香も添ふ風や時鳥
龍と化し虎と變りて雲の峯
くたびれた膝も放たせ時鳥
二ツ三ツ手本に母の襟かな
短夜の月山の端に残りけり
日に笑ふさまや牡丹の花工み
時鳥鳴や吹切る按摩笛
はら吹て遣々激車の鼓遣哉

涼しきや月夜調す水車
 我影を川で流して橋涼み
 益狩や隠居も孫に誘われ
 花造はなりけり瓜の翻れ種
 うしろからよい月出たり納涼
 拜領の頭巾もあるや土用干
 早戻る積は余所に夏の月
 是非もなき人に折らる、牡丹哉
 振向ば我足や五月團
 子のおもい親にかぶせたる夏とん
 ずとした事辨になる雲霧哉
 孝行の咄しや婿の内と外ト
 今啼た方が故郷か郭公
 山の田に月細いこんで戻りけり
 風の有る柳は遠し田脚取
 初音から危くもなし時鳥
 休む間も照りつけられて田脚取
 朝氣色けふ散りさうな芥子もなし
 時鳥月に啼たり笑ふたり
 乳貫いの折りこそよけれ門涼み
 夕立や一とはけ引ひた雲ながら
 蚊屋抜た子を抱入る、親心
 破近ふ出てよく笛や夏の月
 旅笠の下から濡れし蟬時雨
 夕立と云ふ間に晴れて松の月
 巳が身の闇とも知らせ火取虫

言ふまゝと思ても言ふ身さかな
 炎天や池の池も草のつる
 其處此處は夕顔と結ふ藤哉
 一刻萬金の價あり夏の月
 葉の裏の螢光るや水の底
 大家の留主やとんと、蠅のむれ
 明け急ぐ夜さへ待たれて蓮の花
 時鳥鳴や切らる、かこい船
 水に名を賣るや小店の心太
 時鳥啼や弓張る月のうら
 欠ひして雲見る船や五月雨
 立て琴の糸ひく蘭の葉風哉
 三井寺の鐘の音涼し瀬田の舟
 雲の聲奥のかし夏木立
 夕顔の軒は色なり朝のうら
 清水沙先へ移るや顔のしわ
 若竹や風には堪へよ冬の雪
 日の廻る方へかた向く日傘かな
 夕立の根のなき空や夏の月
 暗やめは又暗かほはる蛙かな
 燈灯を借て戻るや益賣
 清水たけ別れて濁る五月哉
 いさあつて岩の脈うの清水哉
 萬水や風のこぼる、珍座敷
 空まれた夢に汗かくばたんかな
 葉櫻や机を濡らす窓の雨

夕立や兼送に蓮ふ渡し守
 門、柳の葉をこそ捨て鳥の糞ち
 孝行の縁は蚊遣の團扇かな
 日最中の暑さ語りて夕涼み
 をしやとは戀の窓目か戸の水鶏
 月満て坐中も匂る牡丹哉
 一匹の蚤に一座の騒ぎ哉
 双親を脊に負つ、も養老哉
 月影はひかしなからの須摩の夏
 留守守のさだちにぬらす日追かな
 咲く日敷散るに日敷や百日紅
 白けしのあたりを拂ふ夜明哉
 火に入らて雨に燃飛蜚哉
 一景色もつて暮けり雲の峯
 短夜を寝ぬも風雅の榮りかな
 笑やソソ付けて遣る氣もつかせ
 子に居へる灸に母の暑さ哉
 合乘りの顔見に来るや飛蜚
 植た下女畑けもどりや初茄子
 鳥羽玉の闇に玉散る螢哉
 友の來て話相手に團扇かな
 柳にもさわる風無し蟬のこへ
 追ふあとを追かけ來る麥雀
 腹隠しき隣同士の蚊遣り哉

五月雨やまた吸みぬく新釣親
 はかどらぬ牛の脊た、く若葉かな
 暑き日は親を留主居に田草取り
 みの笠は蘭のたからや田植唄
 夏の夜や山も寐まきの帯のなり
 算ふれば暮の鐘なり五月雨
 涼しさや月にささをさす隅田川
 盤櫻白湯に咲すや雲の峯
 着る方も着せて嬉しやはつ裕
 露口を叩き出さる、蜚蚊哉
 堪忍はちよふと扇の要かな
 身に余る陰に休ろう我子かな
 はと、ぎす聞て覺めにけりかじ枕
 蛙かな口ゆへ蛇にのまれけり
 主や誰ふけ行橋のぬれ團扇
 露草の足に香深し開古鳥
 言の葉に陸じ見ゆる團扇哉
 粟津野に帯や枝蘇路の郭公
 王公の世は向ゆかし更衣
 つ、いつ、ふたつ連たる蠅牛
 城跡や今は魯桑の生ひ茂り
 夕立や田畑潤はし蔵に入る
 狭くとも退ける子はなし涼み
 涼しさの合鏡や月と水
 掬手を蝕さへをしき清水哉
 麥秋に取巻れけり京の町

清水にかさねすれけり湖の下
 孝行の積や葉の曳残し
 買も買賣るも賣たぞ初松魚
 若い氣の昔し笑ふて土用干
 刺針の綿哀れや蚊屋のうち
 乳飲子のさけびつ泣つ蚊の音かな
 膳に箸したくやはや手に持團扇
 やみの夜に足もとあかる益哉
 風一荷擔ふ暑さや團扇賣
 初なりを親へ馳走の水瓜哉
 二ヶ國へ分る、聲やはと、ぎす
 夏もりや机によれば氣のしまる
 たうち女の誠と、ぎすて更衣
 すり進ふ人の見返す日傘かな
 此處彼處木蔭賑ふ暑さ哉
 筆染たやうぞ替のかきつばた
 其聲の雨にも隠れすはと、ぎす
 早乙女の人を村手子敷へけり
 身の丈の伸たよふなる寢寐かな
 蠅一トツ氣にする疲や夏さらひ
 はと、ぎす一屏耳に初松魚
 押せは明く戸と答ゆれば水鶏哉
 勘當の子にも端午の蔭の膳
 腰折る際まで勉む團扇かな
 一寸の虫も五分の魂ある
 吹て行く風を見送る青田かな

子を抱て隣り遊ひや夏の月
 厚ひのは親の恵みさへひとへの
 軒に不二見て海近し夏座敷
 菊水の其名も朽ぬ若葉影
 虫干や袂から散るさくら哉
 夏の旅はつと、ぎすする氷水
 見かけにははらぬ風あり遊園
 白蓮や浮世の塵に染まらぬ
 二の鳥居までは不立や團扇
 蟬鳴や置揚願ふ相
 實ての附て悦ぶ余
 山住の徳や起ふしはと、ぎす
 大坂の昔し語りや桐
 夕立の跡や涼しき星の影
 挨拶に有な町かゝる、裸客
 又しても子に、はる、益哉
 うた、寐の枕に近し鳴水鶏
 玉の汗ぞつと身にひく龍の香
 蟬鳴や砂に消込む通りのめ
 子寶は家の花なり初のはり
 提灯に別れてちるや五月雨
 若か代や飾はかりの太刀兜
 結とて置し柄杓や門清水
 松風の音耳なれて蜚蚊かな
 孝行や蚊を追いながら親のそば

はど、ぎすねながら聞くと時の運
臥風も来そふや桐の花盛り
芥子の花居直る蝶の見はて散る
乳のたらぬ子に泣かれけり不如歸
讀かけた本を枕に夏夜かな
居直れば颯も居直る座敷哉
月涼し戸さ、ぬ御代の片在所
ソソフても敵のぬ書物を螢の火
たのしみは其中にあり姿はこり
よき秋の見ゆるか如し田植歌
馬士も乳母も田植の頭敷
くひついたよふに啼けり風の蟬
月かくれ、蠶學の供潔
夕立やあひく、笠に又ひとり
虫干や何を出しても親の思
皿の給の富士も透けり心太
川原から頭痛おさへてせみの聲
青々と風が生る、若葉かな
野は草の上れ葉民らん夏の月
親の敷を追ふ孝行のつとめかな
再出する宇治の茶の芽や時鳥
工夫して草を飛ひ立登かな
はど、ぎすねながら聞くと時の運
時鳥鳴や寝て、る起、心
手を打ては魚にゆられけり杜若
子は親の心にならば大孝行

産湯から南無阿彌陀佛佛哉
打水やまはらく町も物御か
山さばを離れぬ内や夏の月
入る月を惜む聲なり時鳥
夜は二度に明るや海と若葉山
旅なれた身にも聞けとや鳴水鶏
夕月の入る間真白さ帳かな
草の香は草の香にして風薫る
鳥はみな母に付てはど、ぎす
はど、ぎすねながら聞くと時の運
梢もる日に座の替る涼みかな
船までにはけふも届かて若葉吹く
我ものになりし木茂り哉
煩悩を離れて白し蓮の花
玄關に親を迎へて杖を取り
一人りつ、綿んで替る清水かな
若葉見て行けば花ある谷間哉
寝た親の體可愛らし孫子哉
松風も草にはくられて夏の月
木かくれに音の涼しき清水かな
舟人も尋ねて来たり岩清水
順の能き船の出入や土用照
御膳を漏る雨にや濡れん山田植
眠は花に古ひて耳に不如歸
朝影の庭にあまるや夏木立
思ひやる牛の助や日の盛り

涼しさや簾の内の水の音
蟬鳴やかり干麥の乾く音
乳飲へに哀れを添へてはど、ぎす
睡られぬはつ上煎茶の口はど、ぎ
美しさ色はど、ぎすねながら聞くと時の運
かす辭儀や「シャッポ」の曲り直哉
蚊に起さて親の無顔をのぞきけり
月に鳴て姿も見せよはど、ぎす
親も氣のつかぬに蚊帳の釣手哉
見功者の葉まで替めけり白牡丹
唄ふても手にゆるみなき田植かな
あひさつもたす掛なり麥の秋
國語り岩に書き置く清水哉
乳貫ひの来ては手傳ふ蚊帳かな
梅一木「木」も茂りかな
白船や日の翻れ行淡路島
角ふるや風やりこして蝸牛
曇り日や葉裏の見へる屋根の竹
勝われて出るまで姿を裕かな
人からに提し松魚の光り哉
心まで軽うなりけり衣更
大火事の後の建家や間に合せ
帷子に「つ」、み兼たり坊が膝
五月雨や庭木に目立つ蜘蛛の糸
其罪も繩に曳かる、鵜船哉
不じ高し三保には雨のはど、ぎす

白きにも白きくまあり白牡丹
ないている子供の方へ田植哉
親に席譲りて門の涼かな
運盛にのれは小寒さ裕かな
初牡丹咲ても不二は冬の色
涼しさの余ゆを竹の戦さけり
床の不二はめ、く鳴す扇かな
た、むにも風は離れせ薄羽織
嫌なくや雨氣遠ふて早泊り
遊ひ具を見ても亡き孫思ひ出し
大空を飛ても見せて時鳥
みんな今咲た花なり芥子畑け
干た帆を日除けに船の蜃寐哉
今朝植た竹に風あり門涼み
子に行義教むて渡す扇かな
蝶だけに許してたさぬ牡丹哉
涼みして冷たき水の話かな
花を見し眼にも驚く牡丹かな
御車の内に尋し白牡丹
寝せた子を起せし蠅の憎さ哉
朝起は眼にも薬の青田かな
初陣の手柄咄しや土用于
湯あかりのいと心地よし夏の月
卵の花の明りに透入る戸口哉
蠶速や重なる罪も親の爲
しらぬ振日傘かたけてしたりけり

母の暖案じて覗く蚊帳哉
澤瀉や水に映いても曇り姿
寐た親の後ろへ廻す蚊遣り哉
一ト鞭に人手の揚る競馬かな
蕩沙焼く海士か烟や雲の峯
田舎迄夏を賣出す團扇かな
百薬の長に加味する清水哉
犬か舌だして居る日の暮かな
てふく、の白き牡丹にかくれけり
青空を離れて不二の峯白し
旅によき休み處を岩清水
世を忍ぶ雪の渡船や夏芝居
手を洩れて顔てらし行く蠶哉
御衣の袖ぬる、初めは田植かな
名は草は寝る都の水鶏哉
棒さして月影くたく納涼哉
涼さや月にか、りし竹の影
蝙蝠や馬士にまかす宿撰み
親に扱ひ水に手柄や夏の月
片手には碁石捻りて扇子かな
卵の花の軒や佛に旭の當る
御佛のかくれ給ふや蓮の花
出しぬけに辛子利けり心太
不二よりも高しと思ふ初輪
見上くれば高き祭れや夏の不二
笠脱て行ぬはならぬ茂りかな

轉寝のをりく、動く團扇かな
近くより遠見涼しき青簾
叩かる、柳に燈む日傘哉
茶に酔ふた耳の果報や時鳥
短夜やあじたに寝る舟こ、る
心根を敷に見られつ鍋祭
子子や鎌研く丈けの溜り水
煙草火もちいさくなりて杜宇
學校を戻れば涼し母の聲
其口で、露習らへ行々子
蚊柱の崩さすかわる處かな
日暮には重み覺ゆる日傘かな
酒買に出し戻りや初松魚
夏獲へ力添けり母の杖
蒸やうな夜と寝て還る團扇哉
置所て松に月あり納涼哉
手の内に心も見へて田植かな
休らへは枝に群あり夏木立
夕立や眞砂の色の變る迄
水音を、雲の包みて關古島
縫針の運ふ手重し五月雨
嫁巻て母と誰やら門納涼
鳴き止んで人見送るか田の蛙
五月雨やされども月の有るあかり
今買ふた物もならへて土用于
起されぬ子の寢入端や初蠶

京の關晴して行やはたる賣
親元の手紙へ新茶添にけり
麥茹や土手の下には牛糞塵
御代樂し神風蕩る桐の下
涼風や暑い咄しを捨に寄る
頂たいて着るや裕も親の針
五月雨の晴て二階の掃除かな
旅人を涼しからせて水見せ
和らかに吹や若葉の根なし風
月涼し青ひ奥に蚊屋の涙
浮草や風形り寄せて根の締り
志し道に迷ふな夏の野邊
雨雲の中を植行く山田哉
心まで水の養ふ青田かな
女手に育て、つらし紙帳
昇る旭に夜の雨吐く運かな
子や蚊になる迄の浮きしつみ
葉櫻や陵らしき山の形
暑き日や只寝て居ても草臥る
旅の夜は拾ひものなり杜鵑
思はずも袖ぬらしけり土用干
火に透し見るや蚊帳の子の寢負
虫干に捲れて捲れし親の指
蚊やを出て急に尋る團扇哉
棟上や大工かしらの更次
乘りもの、空にもたてや日から傘

とりはつす蓋大きく廻にけり
郭公啼や夜明の走り雲
呵られた子は迷或や火取虫
蚊となりてとまる出敷も名残かな
來た人を連れて遣入るや門納涼
取逃す蚤に願くやひと座敷
子を捲く片手や親の蚊を拂ふ
二階から遠指し招く扇かな
時鳥欄現堂の夜明哉
流れねは水の上にもあつさ哉
神棚の火を借りて釣る蚊帳哉
待まつた甲斐有明や時鳥
太阪のひかしをのみも扇かな
日は山に入しと起す晝寢哉
子共らの近處あるさや夜かへ
本堂の屋根はこけなり花見堂
いかんたる親をかすや今年竹
漁火は夜るの花也涼み船
村雨の跡晴切て蟬の聲
ひと位高し牡丹のうへ所
追ふて往く跡に又来て飛蓋
釣る中に松風はしき紙帳かな
扇さつ、親をさつかん蚊帳かな
子の伸て親も暑れや今年竹
蚊帳はさす旭の起す朝寢哉
子の時に親を定めて今年竹

不二見ゆる朝日晴れや初裕
燒筆に羽帚利かぬ傘月哉
杜若咲てなつかし城の跡
涼み蓋す、まぬ人か仕舞けり
蟬となる虫もはなれて、衣かへ
とはしらて子を干す守の日傘哉
塵にもかひの出てあり五月雨
夕露の置所なし五月雨
暑き日のうらと成けり夕涼み
宿とるや蓋ひとつに子のなしむ
縮た手をゆるめて逃す蓋かな
入樹暗や細釣りかしの作松
車挽く人も小兒に風車
野も山も靜に暮れて夏の月
見ぬ朝のありて葉になる家内喜哉
好吟の便りを待に不如歸
見留たり梢にひとつ蟬のから
吹拂ふ心の雲や富士詣
受持て留主の植置く門田哉
つさ遠す聲なり宵の時鳥
關の夜にはんの子ゆへを益狩
夕立やあどやかまましき蟬の聲
物影に鳥も口はる暑さ哉
親の蚊を追ふて我蚊に喰れけり
蓋をうけつ、汗を拭ひけり
雨洩りにあわて、起す晝寢かな

蟬鳴や聲を揚けて拜む月
萬民の命も植込む田植かな
鏡聲に女もまじる初松魚
草の葉の日よれもとしてなつ月
初松魚聲は戸口や小牛下
出來處咄して煎出す新茶かな
ゆかしさの曙にあり杜若
月かけも添ふてゆらる、浮巢かな
蟬鳴の響り行橋や二日月
顔知らぬ人には見せぬ牡丹かな
雨間見てかけるはし子や菫蒲屋根
事足ぬ草の庵や風涼し
日をのせ九重みは見ぬ日傘哉
あしらいに遣ふ扇や朝座敷
夜の花と見ゆる柳の蓋かな
蟬牛や家引すへて休影
川はねやよすく水のわく所
寄せて来る度にたのもし稻の涙
月程の牡丹雨ふ花屋哉
氷賣るころは團扇の世界哉
自から門に位の付く牡丹哉
余所を降る雨の匂ひや夏の月
見る影や五月鏡は親の思
見ゆる限り職きて廣き青田かな
海と成るもとや清水の流より
目暮るも見ゆるも通し五月雨

夏山や雨の中から日の當る
湯かけんを見し手の匂ふ菫蒲風呂
加茂川や水もつかさの夕涼み
提て行傘重し夕立晴
夏陣哉踏分行ば鹿の角
亂杭に繫小船や行々子
起さる、寄て暫しの晝寢哉
子供同士踊りならすや夏の月
月と日の入かわる間を時鳥
水吹て風を冷すや蓋團扇
葉柳や呼出したる渡し船
六月や水も料理の、一、趣向
蚊は塵埃は賞れや金銀花
二見海船に見る山近し雲の峯
夕顔や留主とこたゆる一重垣
若竹のかけおとなしき月夜哉
短夜や庭樹に残る宵の雨
たは苗や配りし鏡も夕けしき
いさましき聲の走りやかつを賣
忍ぶ身に小田の蛙の鳴音かな
麻通して出るしほのなき紙帳哉
蓋に倦て蟬は養ふ心哉
約束の調ふ明日や日の水さ
出さるも今日は出けり五月時
よつて来て濡るも嬉し夏の雨
船の蚊の柳へ戻る夜明かな

山に山幾つ見越えて雲の峯
また朕に御座の目退かす晝寢膝
頃斗り籠からもある、田植かな
持寄の咄しのせまき涼み蓋
五月雨に家を移すや蟬牛
氷賣る聲も濁りて暑さかな
瓜ひむて居ればふへけり酒の連
二階から海見る家や夏の月
入梅時や穂の出るやうな草ばかり
睡るけに月も光りて時鳥
なき母を思ひ出すや衣更
松風に晝寢した顔吹れけり
東雲や牡丹の色の麗しき
咲たれば鉢の隠る、牡丹かな
畫にまでも涼しさ見ぬて扇かな
降りたらぬ雲間の虹や夏の雨
青簾前には小田の戦さかな
蚊逃て座頭の撫た柱かな
未だ花も見ぬに賞ふや地掛瓜
見に行きて草履濡しぬ燕子花
湯上りの心持なる四月かな
塗箸に扶み兼たる扇かな
寝るさへ閉ぬ二階や風蕩る
末の兒は一番先や更次
瓜もみや椀を并べし晝の膳
晝飯の勝手すみて暑かな

京の闇晴して行やはたる賣
親元の手紙へ新茶添にけり
麥茹や土手の下には牛並
御代樂し神風蕩る桐の下
涼風や暑い咄しを捨に寄る
頂たいて着るや裕も親の針
五月雨の晴て二階の掃除かな
旅人を涼しからせて水見せ
和らかに吹や若葉の根なし風
月涼し青ひ奥に蚊屋の浪
浮草や風形り寄せて根の締り
志し道に迷ふな夏の野邊
雨雲の中を植行く山田哉
心まで水の養ふ青田かな
女手に育て、つらし紙帳
昇る旭に夜の雨吐く遠かな
子や蚊になる迄の浮きしつみ
葉櫻や陵らしき山の形
暑き日や只接て居ても草臥る
旅の夜は拾ひものなり杜鵑
思はずも袖ぬらしけり土用干
火に透し見るや蚊帳の子の寝貞
虫干に潜れて嬉れし親の流
蚊やを出て急に尋る團扇哉
棟上や大工かしらの更衣
染りもの、空にもたてや日から傘

とりはつす蓋大きく廻にけり
郭公啼や夜明の走り雲
阿られた子は迷或や火取虫
蚊となりてとまる出敷も名残かな
来た人を連れて遣入るや門納涼
取透す蚤に願くやひと座敷
子を抱く片手や親の蚊を拂ふ
二階から遠指し招く扇かな
時鳥權現堂の夜明哉
流れねは水の上にもあつさ哉
神棚の火を借りて釣る蚊帳哉
待まつた甲斐有明や時鳥
大匠のむかしをおもふ懐かな
日は山に入しと起す晝寢哉
子共らの近處あるさや衣かへ
本堂の屋根はこけなり花見堂
いかんたる親をかすや今年竹
漁火は夜るの花也涼み船
村雨の防晴切て蟬の聲
ひと位高し牡丹のうへ所
追ふて往く跡に又来て飛蓋
釣る中に松風はしき紙帳かな
扇きつ、親をさつかふ蚊遣かな
子の伸て親も譽れや今年竹
蚊帳はさす旭の起す朝寢哉
子の時に親を定めて今年竹

不二見ゆる朔日晴れや初給
燒筆に羽帚利かぬ早月哉
杜若咲てなつかし城の跡
涼み盡す、まぬ人か仕舞けり
輝となる虫もはいて、衣かへ
とはしらて子を干す守の日傘哉
疊にもかひの出てあり五月雨
夕籠の置所なし五月雨
暑き日のうらと成けり夕涼み
宿とるや蓋ひとつに子のなしむ
縮た手をゆるめて逃す蓋かな
入樹晴や細釣りかいの作松
車挽く人も小兒に風車
野も山も静に暮れて夏の月
見ぬ朝のありて葉になる家内喜哉
好吟の便りを待に不如歸
見留たり梢にひとつ蟬のから
吹拂ふ心の雲や富士詣
受持て留主の植置く門田哉
つと遠す聲なり宵の時鳥
闇の夜にはんの子ゆへそ蓋狩
夕立やあどやかまましき蟬の聲
物影に鳥も口はる暑さ哉
親の蚊を追ふて我蚊に喰れけり
盃をうけつ、汗を拭ひけり
雨洩りにあわて、起す晝寢かな

蟬鳴や聲を揚けて拜む月
萬民の命を植込む田植かな
曉聲に女もましましる初松魚
草の葉の日よれもしてなつ月
初松魚群は戸口や小牛下
出来處咄して煎出す新茶かな
ゆかしさの曙にあり杜若
月かけも添ふてゆるる、浮巢かな
編幅の指り行橋や二日月
願知らぬ人には見せぬ牡丹かな
雨間見てかけるはし子や菖蒲屋根
事足ぬ草の庵や風涼し
日をのせた重みは見ぬ日傘哉
あしらいに遣ふ扇や朝座敷
夜の花と見ゆる柳の蓋かな
蟬牛や家引すへて休影
川はねやふすく水のわく所
寄せて来る度にたのもし船の浪
月程の牡丹商ふ花屋哉
水賣るころは團扇の世界哉
自から門に位の付く牡丹哉
余所を降る雨の匂ひや夏の月
見る影や五月、鏡は親の思
見ゆる限り戦きて廣き青田かな
海と成るもとや清水の流より
目暮るもと見ゆる、暁し五月雨

夏山や雨の中から日の當る
湯かけんを見し手の匂ふ菖蒲風呂
加茂川や水もつかさの夕涼み
提て行傘重し夕立晴
夏陣哉踏分行は鷹の角
亂杭の繫小船や行々子
起さる、替て暫しの晝寢哉
子供同士踊りならずや夏の月
月と日の入かゝる間を時鳥
水吹て風を冷すや蓋團扇
葉柳や呼出したる渡し船
六月や水も料理の一、趣向
蚊は塵埃は賞れや金銀花
二見海船しに見る山近し雲の峯
夕顔や留主とこたゆる一重垣
若竹のかけおとなしき月夜哉
短夜や底樹に残る宵の雨
たは苗や配りし儘も夕けしき
いさましき聲の走りやかつを賣
忍ぶ身に水田の蛙の鳴音かな
寐過して出るしはのなき紙帳哉
蓋に倦て蟬は養ふ心哉
約束の調ふ明日や日の水き
出さるいも今日は出けり五月晴
よつて来て濡るも嬉し夏の雨
船の蚊の柳へ戻る夜明かな

山に山幾つ見越えて雲の峯
また臉に御座の目退かす晝寢陣
暁斗り響からる、田植かな
持寄の咄しのせまき涼み盃
五月雨に家を移すや蟬牛
水賣る聲も濁りて暑さかな
瓜むむて居ればふへけり酒の連
二階から海見る家や夏の月
入梅晴や穂の出るやうな草はかり
暁ろけに月も光りて時鳥
なま母を思ひ出すや衣更
松風に晝寢した顔吹れけり
東雲や牡丹の色の麗しき
咲たれば鉢の隠る、牡丹かな
書にまでも涼しさ見ぬて扇かな
降りたらぬ雲間の虹や夏の雨
青簾前には小田の戦さかな
蚊遣て座頭の撫た柱かな
未だ花も見ぬに菖ふや樹掛瓜
見に行きて草履濡しぬ燕子花
湯上りの心持なる四月かな
塗箸に挟み兼たる厚かな
寝るよへ閑ぬ二階や風薫る
末の兒は一番先や更衣
瓜もみや椀を并へし晝の膳
晝飯の勝手すみて暑かな

風驚る遊客に出ず枕かな
夕立の勝やひよこの飛蛙
釜火のするやはかりと草の中
筒や親に勝れた物はかり
透込めは夕立晴て仕舞ひけり
しめりにもたらて晴けりなつ雨
二度目には遠く捨けり火取虫
野段寝や草の枕につなく馬
半分は子に寝しけり朝の蚊帳
吹らかな風を布きけり草若葉
白蓮や未だ薄くらし池の端
鴨河を鵜から覗くやどりかな
刈獲す麥や雲雀は貸した丈
み芳野の空おきかへてはと、さす
芝居見のしをりなるらし衣更
入梅哉茶を煮る丈は黄ひ水
雨乞や漸は跨かれつ大井川
醉醒の客の好みや心太
涼しさを月懐に向ふ風
草に手の届けは送けて盛かな
日傘にも三つ四つ雨の小紋かな
月のなき宵や卵の木の花明り
夕暮や山根の白き茨のはな
雨乞を出して雲見る留主居哉
川風や掛し葦渡に細園とん
花の香に布かれ乍らや遠見船

草むきた日の匂して夏の月
益龍月のうしろへ廻しけり
蚤の痕敷へなからに添乳かな
鎌倉や潮の花哉はつ松魚
船て見た柳傳船も見て涼し
聲は須摩婆明石にはと、さす
初段一針つ、の手柄哉
寐よと鐘寐せしと夏の月夜哉
肥過た娘のよろこぶや單もの
行つめて竹の機みや鯛牛
口あいて来る日盛の鴉かな
隣鴨や傘傾けて行野中
川一つ隔て、見るや飛蚤
體教言ふまでは疊て扇哉
みしか夜や今朝も月に月の陰
短か夜や誰れをうらみの明からす
八重に咲力もありてけしの花
琴の音の月に合せて笛涼し
涼しさを耳に松風眼に白帆
織す、し編の帯する松の枝
敷遣にも交るあやめの匂ひかな
夕顔の下やて、らの上戸同士
た、む手に風のつ、まる紙帳かな
おもたかや一日つ、に水のへる
旭の透て渡る、雨や昔の花
柱にもいきた木のあり夏座敷

月見れば倭懸しや郭公
蚊の中へ寐ても我家は我家かな
遠に手の届けは漏る草履哉
ふく丈を負けて行けり菖蒲實
雨の夜や軒端にいくつ飛蚊
聞なれぬ鐘も聞へて五月雨
咲き落て水はう蛛やかさつはた
中よしの來て遣入けり蚊屋の中
けし提て人に近道おしへけり
大君のめくみをかさには植哉
葉となりし花の上野や郭公
水の音ある宿とりて夏の月
岩藤や響く山家の草履打
春おしむ心も余所に更衣
船にまで釣草見へて煮る風
涼風や世の雪箱もしらぬ肌
孝行は自然積るや初盤
醉醒の水潜らすや扇の種
捨てられて拾ふ命や火取虫
門口で客もてなしや夏の月
草の根に月の出て居る清かな
味はひは其日に有や心太
十分の外を風子に清水かな
飯を増す年や豊に富貴草
飯の機嫌も取りにくき暑哉
降足らぬ雨に匂ふや遠の華

葉根やこれか花なら花ならば
笑しき花に驚く毛虫哉
掛る手の冷たさうなり青藤
一日の曇さはとくや笠の紐
行く蚤あちらの水か甘ひかは
藻の花を覗けば船の傾きけり
虫干や反古にもならぬ反古はかり
孫に手を引れて出たり益狩
不足なき住居や庭に呼清水
山根から呼漣水や燕子花
母撫に起て聞けり時鳥
親の恩情ぬ鐘や土用干
庭涼し水て書へたる不二の山
姫百合や鏡にうつる置き處
川船て見揚けて行や夏座敷
傾かれる程の身て無き暑哉
可愛子は跡に残して初裕
絳止んだ雨に氣味よき若葉哉
傾けて愛敬翻す日傘哉
吹丈は皆神風や御板川
寝てもくねひし四月の旅つかれ
神の徳流れて清し五十鈴川
魚心わゆる水とみし嫁姑
編履に手元もくらし油賣
是とさす蓋は名もなし火取虫
秋を降る雨や蛙の老を啼

牛にしらおくれれてあるく夏野哉
五月雨や雨にのまれて富士の山
卵の花にしはし臨眼のかすみけり
生ふ聲も一際高し初盤り
一と聲に聞は崩れてはと、さす
根ちからの付て青田の暇さふり
船呼は月に聲ありはと、さす
涼しさを竹にゆらる、夕心
繩を打つ時はちいさき心かな
不行儀を客にす、める暑哉
兼返しもせぬ短夜の枕哉
蚊遣り火にしはし登るや門の月
泉水や幾千金の造り庭
築しさは聞かぬ内なり不如歸
余所へ氣の散る耳捨て夏書哉
改良作り海程と麥の出穂
よき風の生れて來るや夕青田
すき立の髪にとまるや夏の虫
蟲干や見ぬ世の人も眼のあたり
當り稻民は花咲く心かな
寐た親の汗ふいて居る暑かな
一筋に千代をつらぬく今年竹
懐も袂も夏の月夜かな
悪香や言葉すくなにも申す
五月雨や湖に沈める鐘の聲
蘇の葉に香た跡ある清水哉

輕う着た給の重し母の思
寐馴染めは寐やすくなり旅の癖
汗かきの額や雨に透たはと
夕立や我は濡ても親に傘
二ツ三ツはなして辻の益賣
葉櫻や錠のふりたる下屋敷
餘さしと月を植込む門田哉
旅人の晝寝や富士を枕元
香に立や隅田の堤の青あらし
五月雨や代田にぬれしひれ鳥
産月の腹をか、へて田植哉
轉寐のかりく、動く四扇哉
能い町へ出て遠くなるさぬた哉
來て涼めく、と橋の柳かな
月涼し居替るひさに竹の影
目出度さや齒もなき人の出植唄
一トつ來てはんどろ覗く雲かな
うしろからそつと扇に打た、り
咲たれば鴛鴦もはなれし杜若
さくらさへ一重は清し鏡了鏡
燃上る蚊遣りに消る咄し哉
住の江の松の黒みや夏の月
ともしたり消したり雨に飛蚊
音子の動かして見つ、輪等
扇もつ心になるや神の前
見渡しの青田の果や地世の海

岸上する雲井は高し時鳥
余處の雨なかもて遠く團扇哉
夕立や團扇の残る涼み盡
團中や青田にうつる雲の影
涼み船見て涼みけり涼み船
拾ふにも人からのよき稻穂哉
比くからの風の吹なり遊園扇
叩かれて香た蚊を吐く木魚哉
扇の居るや牡丹の庭のかく
尻込の流れもあるやかたつはた
溢色の茶瓶の札や瀬の主
井車の音にそれゆき螢かな
青空へ消込む色や杜若
水賣る聲の冷たし夏の月
更衣何やら心いそしくし
買ふた地の芍薬母に見せにけり
菖敷の來る迄といふ菖敷哉
駕籠の戸を明て吹すや青あらし
古への語り草なり虎か雨
留主守の手柄咄しや不如歸
那那の枕からはやたかむしろ
なて、見る尾上の鐘や蟬の聲
葉の丈にたらの粽の使ひかな
汗なから親にさけんを閉ふ日哉
此松か太夫といふか雲の峯

宿引を呼んで見せけり蚊屋の穴
父母の機嫌嬉しき新茶かな
遠吠て納め手拭よこれけり
短夜を長き嘶しや旅の宿
五月雨やついで隣へも無沙汰勝
蚤一つはねて座並を崩しけり
寐た親の方へ靡かす蚊遣り哉
竹の子の伸に驚く朝寐かな
力丈け闇を押し行く螢哉
夕立や庭へ刻ね出す池の魚
勉めよや汗一粒も樂の種
笠にさす日よりもあつし親の恩
眞盛りは針も隠して花茨
風に散る雅の種や櫻の實
いつの間には添ひしか卵の花木
月涼し難波雄波のうねくと
ひや麥や客に問はれて井の深
盃頭や咲たると斗り見て通る
瀧見へる庵りも夏の住居かな
涼蓋縁は跡から眞盆
二羽來れば雀も重し今年竹
雷に念佛申す我もかな
奢らぬは今日の爲なりはつ鯉
入月に聲をかけしや時鳥
漸に待夜の積んで時鳥
柴の戸に走る鏡や岩清水

雨乞やそれも硯の一寸
炎天や白眠つめた鬼かわら
主人相繼らぬ人なり納涼蓋
手荷物を枕にかへて晝寐哉
父母を両手であふく團扇哉
みの笠の乾くひまなき五月雨
九重の雲を隔て、音簾
一十世界離れて樂し船遊ひ
蚊柱の晝立けり蚊の中
田植唄上へ見ぬ笠の揃ひけり
子にちへのまして短き袴哉
蚊屋釣て親に茶を汲む月夜かな
上下を脱いて涼しきわか家哉
虫干も後ろは見せず武者人形
是て又根は葉なり白牡丹
短夜と言つ、長き咄し哉
日の岡を聞さへ暑し旅泊
涼しさや分ても清き湊川
それと眼に見へねと耳に時鳥
一と年のおもひを込る青田哉
それくは樹々に名のつく若葉哉
五月雨や灰のかたまる籠り堂
脊負はれた子の持たかる日傘哉
ゆき見れば暑さ忘るや富士の山
牛追のわすれし杖や時鳥
黍越しに夕日の届く花野哉

水打て籠に色よき茄子かな
轉寐の母の蚊を追ふ團扇かな
時鳥鳴や黙て起す人
萬通ひや物の哀れは知りなから
吸付て来た火のふへる涼み蓋
蚊にまけてまける氣になる將葉哉
洗たくの盥の中に毛虫かな
よき事は夢も短かし竹婦人
暮合ふて細み殺すな初菫
暮は勝と見てから團扇かな
乙島に顔まもられつ雨やどり
龍の住池と名付しかんて鳥
賤か家と思ひもよらぬ牡丹哉
打水や籠の鳥にも一柄杓
松風も價のうちにそ心太
通り雨涼しき月を發しけり
寐勝手を替へて又聞く水鶏哉
捨てるなよ澤山をよそ蓮花草
俟初し日より茨の殊勝哉
涼しさや脊負て行たひ富士の山
夕雨のさつはり暗て月涼
白ひ帆も見ゆれ座敷も夏の月
晝顔や露の甘味も知らぬ花
母衣蚊帳や乳房に替へし窓の月
用もしつ籠口せ、る暑かな
輪日傘や母の見送る橋の上

此風の價は如何に夏座敷
短夜の蚊引残る芳圓かな
さし添て老を供のふ日傘かな
寐せ九子にそつと風やる團扇哉
海士か子の船はて祝ふ帳かな
世の濁り染まぬへたてや青龍
花嫁の恥る美事や顔の汗
うた、ねの親の蚊を追ふ子供哉
衣桁から風の響るや辻か花
冷しや晝の暑さを何處へやら
二ノ親へ仕へは孝や蚤の世話
一寸角み借て一ふく冷み蓋
こそくらる夢に笑ふか顔の蠅
月になくはつはなけれと時鳥
出来秋を今日より祈る田植哉
脚帯や足の勞れを注ぐ水
有なしの日やとりわけて物靜
神古し蓋木の森や開古鳥
よる人の咄し上手や夏の月
雨乞や盛れば晴る、人こ、ろ
汗ふひて價はあとの氷りみぞ
礎に光りあやなす蓋かな
うた、寐の老を團扇の蚊遣りかな
羨にたらぬ夜露や夏の菊
美しと撫ればくもる茄子かな
我庵は晝も蓋の日かけかな

灯もして見るや牡丹の笑ひふり
戻りにも聲かけ呉や郭公
風鈴のりんとも云はぬ暑さ哉
這ふて行跡や光りの蠅牛
陸奥に残る思ひや釣り忍
打水に立止りけり旅の人
突れたる夢は是なり蚤の跡
川狩や親にはかくす水の丈
蚤に寐ぬ見に寐ぬ親の思ひ哉
一年も今や一度に五月雨
高水や枕も添へて持て來る
伐るまでの木陰を袖の晝寐かな
母衣唄や親子の中のしのひ足
蚊帳一ト重中見せられぬ暑さかな
短夜も來る沙は來て戻りけり
花嫁の禮儀正しきはつ拾
はなされて闇へ戻るや火取虫
明安き夜を足らぬ乳にまたれけり
晝立し親の情の初拾
柴船や蓋か、りて戻るやみ
藤に目をばなは暗らさ谷間哉
啼て往く歸る夜はなし時鳥
さなふりや一座て服す田植唄
赤そふに陰詩合ふや西瓜賣
蟻鳥の雨寒氣なり若葉露
散る牡丹留守居の心いためけり

産湯からそもく甘き佛哉
心かられて寐る氣になるや夏の月
最一聲待ては夜明ん郭公
月涼し幾度橋の行戻り
寐て足らぬ夜を更しけり夏の月
蟬鳴や木蔭せましと敷羅
老の押す力ら別そ氷みせ
一夜かゝる宿に折よしはと、さす
見る度の樂み深き青田かな
雨晴てやみの花なり飛はたる
晝夜には大きいすきる軒かな
短夜を屏風て包む旅戻り
松風も結ひこめす香の粽かな
松見ても柳を見ても暑かな
鐘の聲もぬれて響くや五月雨
富士詣上見ぬ笠のしるしかな
降りそふな夜の明ふりや藤の花
晝顔や笠にかゝる、人の影
一日の賣ものなり白扇
此花にして此日あり散る牡丹
寝て足らぬ夜を寐借みて夏の月
踏れても消へぬ螢の光り哉
海千里飛行蚤や地圖の上
白紙の濡る、思ひや雨の芥子
閑安ふ聞いて寝られす時鳥
居並へは上手の眼立編匠かな

扇かす手元へもどる暑さかな
手に肥す用も流る、暑さかな
涼しさや月に棹さす下り船
みしか夜のまつにはさまる海の月
夕立や生れ替りし人心
茶摘み歌はやりけの子か歌ひけり
こつそりと夏の色あり花ややめ
玉簾の内にもとふれ田植歌
長待や間に短かきはと、さす
白蓮や有無の二ツをかねし色
月うすく鏡の音近し鴨水鷄
けしは花扇塵て跡めけり
關取を動かす蚤の力かな
笛の音に心澄して夏の月
子子のふりくもらすや水鏡
閉に出た後の戸叩く水鷄哉
花譽た家は戸さして夏の月
水賣や故郷の親へ爲替金
銅付たやうに付添ふ鹿の子哉
笑ふ子は抱人の多し門涼み
粽ひく子の暑らる、行儀かな
泥の手て月を拂ふや由草取
汗は實となる様なり田草取
なき行ん方は都を時鳥
鶯を鳴せし末の竹掃人
鶯た子をふりかへりつ、田植かな

新宅を魁けしたるつはめ哉
熊の住む處と聞くや岩清水
花無も嬉しつきはや初若葉
客まして土蔵から出す蚊帳哉
飯の味しらぬ替りや初松魚
寝るまでにしてから門の涼み哉
夏の夜や冷りとすれは明しらす
連の香や浮世はなれし都かな
罪深き業としらかの鶴かな
眼の覺た夜半の友にそ盛か
有の伸る子の丈短し初粉
涼しさや熱田の森は名のみにて
片町を傾けて行く日傘かな
覗きしは親の慈悲なり枕敷帳
手かけんに握り出しけり鮮の味
立ちさわの下駄片足や時鳥
早乙女の花の姿の風情かな
鯛に倦き鯉にあきて初茄子
郭公ななくや昨日は花の山
またてさく人も有うに時鳥
琴をひく手の見へしや背簾
はたる賣り草の竿を手握り
物洗ふよりも手元へはたる哉
家作りの理くつ過たる暑さ哉
ひろけすは風も替よあら扇
涼しいよす、むてもなく出た門

短夜の明け残りたるまふた哉
月夜には見直す垣の花うつ木
ころくと落ちて音なし芋の露
叩かすも明くればよいに水鷄哉
世の中を豊にしたり夏の雨
蚊帳なくて孝の目立や世の鏡
呼んで居る螢はそれて火取虫
寝た親の枕扇ひて蚊遣り哉
やどかれはとりの蚊帳の廣さ哉
鳴聲は月のあたりか時鳥
客ありて隣りほさふ蚊遣り哉
草の根に光り残して飛螢
花に客取られて馬子の煙草哉
身輕そう、そろ歩行や衣更
短か夜や親思はる、旅の空
敷島の錦もみちも青葉かな
ふんとしのどけてふるなり五月雨
打それた蠅や寝た子の貞に行
夕立や傘のちいさき角力取
暑き日や砂持上げし蟻の穴
子を寝せて螢は草へ返しけり
不作法に客を扱ふ精涼かな
汗入れてもふ一盃と清水哉
涼しさや風鈴動く襟の先
松影に粧ひ繕ふ日傘哉
眠る子をそつと覗きし暑さ哉

月の顔見ぬ氣になりて蚊遣哉
世話やいた伯父も仕舞の田植唄
呼にやる人もまた來ぬ螢かな
打水や椽の先まで玉の來る
さけられて寐て居る人や涼み臺
葉櫻や花のゆかりに立上られ
受みちて其身にあまる牡丹哉
ひつそりと月を抱きし牡丹哉
見へて居て水茶屋遠き暑かな
常盤なる松の若葉や千代經さ
隣田へ録引合す田植哉
一人子を寐せて團扇のあいまこま
降りつくとす實や虎か雨一日
雨もはや晴たに重し今年竹
二人して持傘重し相合の花
京へ出て香りの高し紅の花
媒人や扇遣ふも裏表
橋まては母のゆるしや夕納涼
送し還る情けを消さす火取虫
露拂ふ風や螢のたち力
夕立やあの人までもうてまくり
とりかわる笠も其ま、田植哉
書く文に邪魔に來たのか火取虫
そつと追ふ蠅や寐て居る親の顔
花よりも眼に涙よし若楓
竹の子の實よりも皮を子供かな

涼風の來る座や鯉の玉料理
あかしく手に蒸るや孝の蚊遣り早
落る日をしつかに包む牡丹哉
學はねば山時鳥山に啼
時鳥一と棹船を流しけり
晝顔や露にはかりの力
十分に寝たり起たり蚊遣
冷こひと云ふて汗ふく水り賣
宇治はいさ知らず山家の新茶哉
夕立や濡た口説の日に乾く
木の蔭の清水や楸か益所
風音は空にこそあれ窓の月
旅人のやみ夜にひとつ飛螢
夏富士を見越して涼し青すたれ
誰か見ても涼しく見へる背簾
日傘さしなから座頭の足駄哉
關がよいとは螢見のしはし哉
散そふてもあまされし芥子の花
浮島へ橋も掛たし夏の月
慾に眼は山さへ見へすねらひ狩り
聞く人の心を鳴くか時鳥
夕立や元は硯の、一ト學
船からも見ゆや坐敷の掛け扇
千秋の初をうたふ田植かな
顔に火や焚ん筑摩の鯛の敷
十分に寝たり起たり納涼臺

宿取つて町見歩行や夏の月
竹の子や雪にみかさし鉄の錆
涼しさや冬はいかなる磯の家
世の中も住は都や深山里
手枕や雨遠除いて時鳥
むすひたる園の春れや粽かな
花ならて若葉も色のなかの哉
一ッ来て段々ふある鼓かな
葉柳の蔭にのびなくや涼み船
踏は鳴る齒ゆるさ下駄や合の照
いねむりの油断を來るやく取虫
沙漏で坐敷の低きみみ
照り續く日をはめて見る青田哉
雷に時刻とられて飛はたる
鶯や老ても春を唄に啼
時鳥啼くや古城に月一つ
植の神になりたる清水かな
世は無事に養き庭の白牡丹
曇り日や別れを惜しむ木かけ下
三味線の稽古さらなる日傘哉
暑い苦の冷たひ鏡となりけり
子のいびき聞て休める團扇かな
瑠取た耳にあたらし子規
文字さして思ひの雨や傘の瑠
川狩に似合ぬ振や阿彌陀笠
余の鳥の降なき處や阿彌陀笠

夏の月そつくり汲ひや船釣願
初瀬やまつ雨親と子供らか
打かねる鯛や寝た子の枕元
夏更や人は苦樂の器もの
蚊遣り焚き蚊に手をいたく整れ免
藤までに牡丹切る氣にならざりし
老ひとり唄につ、まる田植哉
暮てまで暑さはなれぬ日傘哉
濡れ色を見せて照らすや夏の月
青梅やあたたま叩くも親の慈悲
どの里も短りはひくし五月雨
世の蚊や若盤の下に人をまつ
裾羽織の裾に包ひやはつ益
汗ふくや冷りと覺し夢のあと
七谷に一聲かけてはと、さす
花ちるも實に一入の櫻かな
涼しさを夜更けて人の捨にけり
船はみな漑を出たり五月晴
常に見ぬ坐敷を見たり土用干
ふしもなくうふな育ちや杜若
第三花はみな散りたあとなり時鳥
湖川や紙に毛虫のうつろ船
踊る夜や汗をしはりの染浴衣
夕立やすむとにこりの出合川
早寝した人はゆめなりはと、さす
其中に浮名をたてり虎か雨

夏の月夜明る迄も宵心
卯の花に蝶の機嫌を見る日哉
松の音も風みのうちや野の清水
大平に光る刃や土用干
松の琴波の鼓や盆の月
忠は世につら抜桶の若葉哉
引き切れて眺みは高し藤の花
打水や心に出来し一あらし
時鳥啼くや一聲ないた跡
生娘も押し分けてさす田植かな
短夜も明るに長し産の御
夕立に敷半分の雫かな
鉄の柄に蝶も眠るや正午時
かたけたる棹や納涼の舟支度
帷子の膝に氷りの平かな
提るのは人に耻ぢねと重ね綱
旅人の名残りを残す清水哉
在所は豆腐さらしてところてん
さし掛る日傘や下女の勤ふり
亡き母の小袖に泣くや土用干
芽々と櫛の花の匂ひけり
短夜やまた川越さぬ新枕
柳さへかけのうさかぬ暑さかな
ふつくくとあわの浮けり蓮の花
脱かするも馳走心や舞羽織
海月や糸引く程に飛はたる

夕靄涼晝の暑さの暗かな
井の中に魚釣りさける暑さ哉
月の外見る隈もなし郭公
妻も出て祝ふ田植の露り客
寐た親に廻りて見たる蚊帳哉
色も香もなくとも懸し竹婦人
蝶々や二つに成て高ふ飛
月は雲に隠れて遠し時鳥
炎天や何よりうまさき水水
神楽の水香へらす暑さ
唐崎の松もかくして五月雨
羽振よき客となりたる暑さ哉
苗代や今日からうつる空の色
富士つ、ひ雨の曇りや時鳥
寝返れば夢も抜けり籠枕
五月雨や名もなき山に潮の音
末廣ふ蒸らす道の的扇
盡寐した母に氣つこふ機音
虫干や元へ這入らぬ本のかさ
時鳥啼て窺ふ父の寝間
冬捨た團扇奪ぬる暑さかな
夏更のこ、ろに高し母の垣
井車の綱かひ音や時鳥
足らぬ乳に絞る日蔭も親こ、ろ
湯上りの儘の人あり登狩
涼しさにそ、ろあるさや門つたい

卯の花や硯の水も雪の儘
失へた富士の出にけり五月晴
稚子氣に孝行つくす團扇哉
夏の月けの勞れを忘れけり
涼しさを盃に散る青松葉
折れしを力にむすふ浮世哉
雨に似た平持けり今年竹
一輪に幹迄挽む牡丹かな
谷川の音をつらぬく田植歌
はつ蟬や町家はなれて一里松
さらされても見たく我兒の轍かな
老の身も子にひかされて益かひ
産とれば夏の月なり手水鉢
螢火や何とたよりに海うらへ
露に人殖て廣かる青田哉
時鳥啼やあふのも橋の上
去年恐た家は留守なり燕鳥
峯寺に小雨降る夜や閑古鳥
覗き見や益に顔を照らさる、
下りか、る坂やしきりに時鳥
且那より涼しき僕の住居かな
涼しさの塵落しけり宵の月
涼しさや孝行な子を右左り
吹て行風見て居るや青柳
露はるふ缺の音やかきつはた
向ふから來る人もよる清水哉

汚れても支度は曠な御田植
石山や秋をととなり夏月
物思ふ身にはつれなし時鳥
忍ふ夜の蚊に攻めらる、つらさ哉
時鳥打ちそこないし文字の点
眺めぬも更かす種なり夏の月
月走る雲たなひくや青田面
手入した其巧見ゆる夏の菊
子に重ふ言て着せけり薄羽織
封を切て風も新し扇哉
龍寺やあつさ咄しもよそにさく
能き風の添ふて流る、清水かな
身代の奥底包む牡丹哉
扇さよき奈良團扇かと問れけり
一トふるひさせせし雨の今年竹
來る人も行人も皆日傘哉
す、風に夢遊はしてたかむしる
短夜やねはりの竹の子の上はと
其所此所と居直つて見る暑さ哉
又も来て座をさわかすや火取虫
飛込て月を動かす蛙かな
涼しさや月にこそあり流舟
涼かな日を夕立の隠しけり
涼さの變る心地や柳の根
涼雨の寐脱に戻る糊着物かな
人目をは隠して暑しいわた帯

親あはは心美し白扇
 角力取る下女に笠をとりまゝ
 一聲は幾夜の義理か時鳥
 蝶抱た懐るひろし牡丹哉
 川狩やしらぞと磨く足のうら
 橋よりも淺瀬越したき暑さ哉
 留守の戸や田植に行し口上札
 馴染なき人の入込む夕立かな
 かくれても我火にとらる笠かな
 叱られた父のなつかし魂祭り
 献上の氷室を運ぶ裸かな
 大空に月やなくらんはと、さす
 五月雨や訪人もなき草の庵
 堪忍の袋破けり初鰻
 今朝迄は柄ばかり見へし團扇哉
 眞日和を無事と答か茶藪の花
 天文の星争いや門涼み
 寝られぬも輪の往そ子規
 朝夕を見合す旅の拾かな
 魚市の是も華なり初鰻
 船見ればゆる、やうなり夏座敷
 人の着る笠縫て賢る暑かな
 床の間に置て氣高き牡丹哉
 せつ生やこのまぬ身にも鰻叩き
 御車の音と、めけり時鳥
 日盛りや羽虫に動く枝の時鳥

草臥る程涼みけり若さかり
 葉にねる種とこらねて夕蚊遣
 儉約を余所にしつてけり初鰻
 雲もなき空に雷聞く暑さ哉
 起て見つ寝て見つはれて暑の月
 孫思ふこ、ろや老の笠かり
 もの言わぬ寝覺の仰や竹婦人
 足先の物さへ見へぬ暑さ哉
 皆上は華の塵なり初清水
 蠅入らすも子故の闇か笠籠
 傘干すや時雨る、蟬の聲の下
 卵の花や春をへたてし垣一重
 花嫁の支度眼に立つ田植哉
 はしり出て鳴や水鶏の水かけん
 こはれたつ露を委やかさつはた
 日も月も雨に埋もる五月哉
 にこる身も寫してさよき清水哉
 わすれ字に筆先かわく暑さ哉
 白雨に追かけらる、細手かな
 螢火や綿に付ても氣遣はす
 溢柿も甘さも花の盛り哉
 風の來る方を上座や夏座敷
 牛馬を動かす蠅の力かな
 眠る子に障らぬ團扇遣ひ哉
 螢火や風の吹きこむ草の中
 五月雨や笠の下行く根なし雲

土産にも仕度思ひや岩清水
 短夜と知るや灯燈の油にも
 上を見す世はうつむいて田植哉
 二の聲は山の向うか時鳥
 木の下をこのこもなき暑さ哉
 耳に珠數持せて切るや杜若
 寐せたりをせ、くる蠅のにくさ哉
 惠まれし風も幾日そ子の團扇
 聞てたつ膝のつかれや時鳥
 五月雨に湖の曇りや朝明
 入日さし歸る浮巢や別世界
 破麩や人も這入れて蚊も這入る
 海こして蝸牛來たり薪船
 涼しさの身になる門や夕月夜
 眠りたる親の蚊を追ふ子供哉
 追はるればおどつて迷る螢かな
 涼しさや廊下の風と窓の月
 暫くは世事を連れて蟬の月
 夏の日の有る際り見て百日紅
 逆打の杭に芽の出る梅雨哉
 入梅に汲む音の重たき釣瓶かな
 動かねは柳もあつし眞夏かな
 湖の水も動かぬ暑さかな
 子供らにせかれて宇治の笠かり
 顔に墨引かれて起きる晝寐哉
 竹の子やよい場所あるに道のはた

大木を我物にして蟬の聲
 君か代と共に静や夏木立
 淺き夜を暗深めたる水鶏かな
 ひとつ來た螢柳をみせにけり
 田植そよ男のこをかをへうた
 雨乞や手近に湖は持ちながら
 朝つやに切まよはせぬかさつはた
 行過てわさく、戻る清水哉
 顔に日のさして驚く晝寝哉
 朝夕に通りの多き夏野哉
 去りなから油断もならず蝸牛
 夕立や人に恨まれ喜はれ
 龍程の戸に戻りけり笠賣
 見歸れば古郷は白し雲の峯
 君か代や武者も飾りの菖蒲酒
 にさやかに編の付けり送り膳
 子を抱て寝る賤家のあつさ哉
 蝶は目に残りて耳に蟬の聲
 人の花いろく、に咲く祭り哉
 虫干や世にじき人を思ひだし
 はひ詫て笠飛なり籠の中
 割て見て赤く飛かく西瓜賣
 桶に月はかくれてはと、さす
 こほれたる露も玉なり飛螢
 汲ましと思ふ日はなき清水哉
 涼しさの種拾ふたる扇かな

晝寝した親に風遣る工夫かな
 青簾奥はゆかしき人の聲
 宵の間や翌日の田植の人配り
 断つて出した子想ふ暑さ哉
 腰掛の冷へる間はなし清水茶屋
 口々に告げるや今朝の初鰻
 汲つくす井戸の底する暑さ哉
 母の背にふく露紙る鹿の子哉
 早乙女やよこれのなきは唄計り
 散らぬ間に種振りおかんけしの花
 晝寝せし親にいたわる團扇哉
 草取の脊くらへをすする青田哉
 晝寝して顔にホロツト團扇かな
 一人寝をなふりに來てか啼水鶏
 暑き日の暮れても暑さはなし哉
 月澄みにけりな端山を杜鵑
 迷ひ子の泣顔てらす笠かな
 水鶏なく月にも雨の溜り水
 心地よき一ツくしやめや夕はらひ
 苦は樂の種と思へや麥の秋
 年を経て翠簾ともなれや今年竹
 言わてこそ手柄斬るや競馬
 みたらしは昔に埋もれて閉古鳥
 晝も聞く住居氣易し郭公
 寝不足を蚊屋半分にまどめけり
 明残る月をか、へて遠の花

味合ふや宇治の新茶に京の水
 鼻尻もかくす納涼のうちは哉
 羅追ふて氣遣ふ親の晝寐哉
 寐せてから母の見廻る蚊帳哉
 懐の暑さに空を仰きけり
 もらひ水又もらひする涼み哉
 暑き日も心地よきかな求賣
 人の世の辛苦も花よ田草取り
 蔓草の延て邪魔する清水哉
 孝行の徳や清水も酒の味
 橋姫の手もかれ宇治の茶摘時
 戻りには月も乗たり鵜飼船
 貧しくも親の拾は仕立けり
 一の字に笠の揃ふた田植かな
 冷水は樋で取る店や心太
 辻うらを聞へて戻りや杜鵑
 子を寐せてそるりと逃す晝哉
 聞てさる涼しや浦の瀧の音
 玉垣の苔も露もつ茂りかな
 はかどらぬ足のはこひや蟬の聲
 水過て遊ぶ五月の渡し哉
 さのふをも峠とい、しあつさ哉
 鳥の糞地ひ、さ凄し木下關
 池の月あるしとなりて納涼哉
 短夜に眠りかねたる新茶哉
 子にまけて一トひらはかす牡丹哉

たのしげに青田を廻る主かな
夏夜や子こゝろよりも親心
綿貫や水に心の寄安き
汗は昔米となるなり田草取
たか宿の夏をとわまし衣更
夏の月友にし船の淨寐哉
力らたけ朝露のせて蓮の花
添乳した母に娘の蚊遣り哉
忘れ来て一入暑き扇哉
翠簾まいて小庭の様や夕涼み
待てしはし姿能く見ん時鳥
身のやせたよふな心地や衣かへ
孝や遠き道や裸に蚊遣
卵の花や風のにはひの雨となる
角持たもの、やさしや蠟牛
若竹も月にやしのふけしき哉
耳洗ふ瀧の眞上や時鳥
引立たぬ牛も繩には追れけり
見る人に勢ひうつる競馬かな
松古し青し清水にあるゆかり
水に咲く花を相手や夏座敷
走せ出て、聲見送るや郭公
雨降らす雲の裏見つ富士詣
冷やりと夜の明渡る若葉かな
田は月かの所かなかどの杜若
湯上りに出て吹る、や夏の月

一ツ家の夏また早し閑古鳥
一聲はよそにも啼けよ時鳥
海山を左右に見るや夏座敷
夏の月傾きながら出にけり
草に月流れて眠る益かな
五六間根の外にあけ藤の花
夕立や走る白帆のおどや先き
卵の花や眞上に星の眞白し
橋あるに渡る人あり夏の行
入梅の晴れや月待つ橋の上
茂とせも親のかたみの團扇かな
珍らしきはなし持寄る夕涼
鮮馴る、間とて出したる枕哉
海山を雁一と重や夏座敷
烟物や斯かる暑を朝の露
蜘蛛の園の片邊は重し五月雨
雨はれを相圖か茨の揃ひ咲き
米年の人も交りて田植唄
宇治川や笠は團の花吹雪
寝た親をしつと煽る團扇哉
夕立をかけたけりて賣る團扇哉
燈火のうすう見へけり白牡丹
水涓々流る、音や飛はたる
ちへをかる心に顔のあつさ哉
寐た親に陰からつかふ團扇哉
追度に見返てやさし鹿の子哉

卵の花や流る、水も花の色
封箱よりさきに渡すや芥子の花
蚤飛んで見失ひけり盈れ針
田の草を取て押込ひこやし哉
居並んだ聲美しや田植唄
上手程鹿相に見ゆる田植哉
今日は誰か夢の袋を宿の蚊屋
母親の暖は寢覺か時鳥
子を寝せて静かに門の涼かな
寐し親を静かにあふく團扇かな
常に似ぬ曇みさはりや初裕
夏の月小船の竿に碎けけり
月ゆする迄になりけり今年竹
火をどりに来た虫先へ取れけり
このあどは人にも聞かせ時鳥
短夜とい、つ、更す月夜かな
朝寐した子のせな撫でる蚤の跡
短夜や世を遠ふさけた我ながら
鳴くくものそきてつかひ蚤かな
今一聲誠から鳴け時鳥
濡れた手のま、て子を抱く田植哉
夏夜を我と知りけり時鳥の丈
這ふて来た蜘蛛捨に立つ扇かな
片手には泣く兒か、へて蚊遣哉
畫寐した子を見て思ふ親の恩
我儘に掉はさ、れす遠見船

佳我は木影もあるに田草取り
蜘蛛の巣の白う夜明け秋近し
水音は遙かに低し夏の月
枕紙耳についたる暑さかな
青鷺の聲に明け行く野川哉
貧に讀文や菫もかす光り
そつと来て庵の庭ふむ鹿の子哉
まつ風の門田に落ちて薫りけり
そつと拭く汗や老母の足さわり
みしか夜やかみふ限りの夢も見す
君が代の其うれしさを時鳥
逆もちるけしなら戦け朝のうち
井の底を子供の覗く冷し瓜
立断日傘さりと廻しけり
水のなか出て水香ひや田草取
老の世話少しのひまのひるね哉
露から来てつれづれの晝寝かな
唇さ日や仰けは富士も素ッ裸か
飛登娘はたしにしたりけり
低ふ出し月や夜をまで蚊屋の中
追はれ来て家抜けてゆく益哉
世に高き清水や孝に汲し瀧
雲井まで道ある御代や富士詣
月と日の外は忘れて夏書哉
やつと日を暮らして嬉し雲の峯
遠くなる水鶏に近き夜明哉

帷子やのいた處に月のさし
笑はれてまた結直す綜哉
麗しき青田も空なし惠哉
ゑんささの鶴せわしき時鳥
涼風や白帆も見ゆるい千里
月かくす月の間ひや時鳥
今に俄る木影を袖の晝寐哉
雨乞や衆の眞を一トこはし
早月雨鐘か誠の日暮かな
香てから其名問たる清水かな
更る夜や聞も涼し、瀧の音
一ツ家は小さく見ゆる青田かな
風添うて菫庭の上道ふ蚊遣かな
降續く中や一と朝とらか雨
三日月のある間を嫁の納涼哉
客招く團扇上宿のみやけもの
送る家遠し牡丹に霞ひ水
一ト聲に一ト夜あかすや時鳥
蟬啼や日毎に瘦る水り
地に落ぬよふに降るなり梅の雨
君か代を笠にかむりて田植哉
親の信汲程深き夏の井戸
笠ぬけは願冷たき若葉かな
勉む子の名を照しけり布笠
茶の水のもらひ處や杜若
涼風や行舟の跡眞白し

炎天や釣瓶から呑む水の味
建直す家の工風や夏の月
目線に風見失ふ青田哉
豚打て出る岩間の清水哉
入柱馳走にはつす牡丹哉
日にやけた顔のみ寫る清水哉
子子や人の浮世もあの通り
果報とは待にこそあれ不如歸
雨の日や牡丹にも貸す庵の傘
身の果をしらぬ哀や火取虫
降り足らぬ雨のはなしや夕涼み
手傳て親の前打田打かな
子や睡る蚊帳から暇を遣る益
未だ笛にならぬ若竹戦さふり
人心 揃ふて丸き踊かな
迷す手をく、りく、て火取虫
花もまた見ぬる藤の若葉哉
また夏は若し益の二ツ三ツ
新麥 御代にかわり毛早相協
笛の音を流して船の納涼哉
息つめて舟進りく、るや段階子
蟬鳴くや沖は白帆にか、る雨
夏の月ひかる濱邊のますな哉
初蛙や月雪花の友呼ん
人にまてす、しからせて飛益
待つ人の氣は空にあり時鳥

川嵐に手の草臥れる日傘哉
 口まめは生れ付なり行々子
 立寄れば暑さも夢も清水哉
 仇な蚊を我身に受けて喰せけり
 哀れなる雀の置場や竹婦人
 花なくも越し接穂の初若葉
 業櫻の下にしやれたる魚のはね
 蚊の爲めに親へ廻りをかけにけり
 夏瘦を苦にしてまわす指輪哉
 泣し子に負て盡る中益狩
 雨晴や我勝に出て立飛蟻
 此瀧のあつてこそよ藤の花
 明て暮くれて明るやほと、さす
 眞砂さへ洗ふ間もなし初懸
 夜のふけてはしの光りや時鳥
 此の鯉の風に瘦たりふとつたり
 花見した所にも出るや橋納涼
 ひしさくや水にも露の置どころ
 寢心や蚊屋を一重の月と海
 笠どりの山から晴る、五月哉
 よき風や遊團扇ても遣ひ柄
 蝶とめて鉄をもとす牡丹哉
 遠れた子の日傘となりし母の影
 湖響めて懸ひ日傘や松の下
 此奥も未だ荒れ畑やかんこどり
 白妙の衣はすてふ花卵の木

更るはと思ひ増す夜や郭公
 草や木に命配るや夏の雨
 枝村は新樹の中になりけり
 降りなかし名は曇りなし虎か雨
 水海と色並へたる青田哉
 なく子をは取るも土手田植哉
 親は子をは取るも土手田植の穴
 千金にかへぬ味あり岩清水
 起さぬ子に一角殘す蚊帳哉
 水性の草に火性のほたる哉
 寝た親を蚊にも喰わさぬ團扇哉
 幾八千代雲井にかはれ松の花
 弓張りの月や矢に行く時鳥
 あふくへし家内も丸き絹團扇
 夏瘦や嬉しき息を月に突く
 居眠りし親の蚊を追ふ姉妹
 借りた子に日傘をかさす余所の親
 山の端に月も残りて時鳥
 奥そこは馳走にならぬ夏座敷
 負ふた荷を其處へをろして清水哉
 口の端にかゝる嫁子や初粽
 袖ふる、汗と涙の魂まつり
 目を閉て聞けは雨なり鳴水鶏
 操遣しして味と香の煎茶哉
 まつの影亂れて涼し水の上
 日の空へ持越す月や郭公

夕月や打水光る石のうへ
 益狩や子ゆへの園に草をわけ
 隙人に猶いそかしき團扇かな
 一筋は孝にも仕ふ鵜飼かな
 虫干や座敷のうちの花盛り
 娑婆の役譲りて涼し別座敷
 呼ぶまては田植もするや渡し守
 忙しい里から出るや田植歌
 猫にものかひせられた田植かな
 眠み終へて扇に替へつ新聞紙
 なき親の手柄あふくや土用干
 さぬくの欠伸かゝるや燕子花
 軒に來て去年の禮のふ團扇賣
 蚤に夢喰い破らる、旅寐かな
 父母の恩厚もど仰く扇子哉
 濡なから露はあしませす時鳥
 豊かさの見ゆるや最上の流れ留
 其の板を越せば松あり清水あり
 短夜と自らもるす宵寐寐哉
 瀧の音耳に落込ひひ涼み哉
 暗闇をたつて縫ひゆく益哉
 夏菊や日よけなからにはした傘
 水無月や漲る富士の麓川
 寐易さにしはし煙たき蚊遣哉
 女なきはかきも涼し山の寺
 短夜を瓜てさかすや麻仕事

振りひくは泣く子の母か田植笠
 入梅の汐元の潮に戻りけり
 夕暮や蚊遣煙りの通ふ小雨
 面に垂る髪一筋の暑さかな
 葉櫻や硯は春の置はすれ
 忍戸に出る咳のめは蚊遣かな
 山かけの流れ涼しき岩清水
 捕た蚤捨て、拾はす命かな
 親に孝盡した耳やはと、さす
 山奥も届くうたなり田植かな
 庭に水打て机に直りけり
 朝々の我身忘れて夕す、み
 今雲を生る、月や郭公
 松風をあて、晝寐の雨かな
 過ぎ去れば時代の花も庭の塵
 たちかねる煙りをたつる蚊遣哉
 船人もいそかね涼上涼み船
 明安き空に團扇はなかりけり
 雨乞に出るや岡見に着たる簾
 月に雲釋迦に提婆や時鳥
 己か身を蚊やにして夜を明し幾
 笠落す風仇ならぬ夏の旅
 寐不足の附いて廻るや麥の秋
 蚊帳の目を風かこくる木賃宿
 扇子にも胸の穿る、峠かな
 咲たより散て散あり芥子の花

燈臺の在りて氣味よし納涼哉
 親かよて青田を見せに出たりけり
 鵜飼ひの鵜に遣かはる、夜明哉
 旭出て一重に受る牡丹かな
 煙りたつ操の露や虎か雨
 ニッ来てとちらも迷す益かな
 はなす手に迷ひ離れよ火取虫
 牛に遣とられて暑さ峠かな
 蟬なくや只眠からせ暑からせ
 雲あいにつさ入る涼や時鳥
 夏瘦と答へて跡はなみた哉
 旅の垢捨て賣りにして衣更
 眼には入る汗や田草のともはけみ
 寐た親の蚊を拂へけり遊團扇
 正直な徳は富貴な牡丹哉
 首より尻を所望を冷し瓜
 喚て見る親の手垢や土用干
 正直に取れば涼しや舛権衡
 大勢のす、みや松のふもくし
 俥からぬ御所の上こそ時鳥
 蚊屋釣て小さふ寝て居る角力哉
 草も木も洗ふた色や夏の月
 明急く家から暮れて夏の月
 見果さぬ夢た、み込ひ蚊帳哉
 夕立にふわとはじれつかけ扇
 暑さ夜や土焚く家の火の匂ひ

わすれたる子も思ひ出す土用干
 祇園會や神興せり合ふ人の浪
 竹の影追ふて更すや夏の月
 此風の主は誰やら賣り扇
 水見へて又山見へて宿涼し
 盃と椀と替へるや納涼舟
 冷し汗男科理を母の前
 兒を寐かす蚊屋にあまるや母の足
 べに皿へもるふ牡丹、の筆哉
 後先に人聲たかしふじまへり
 團扇し釣舟の火は海の花
 規鳥鳴や長者の屋敷跡
 初聲は都の空かほと、さす
 風の來て落たてもなし竹の皮
 涼しきや音のして喚く涙の花
 炎天や魚の吹き水す水坊主
 いさきよき水の配りや青田面
 世をにけし構へや蓮の別座敷
 夕立や下戸も迷込ひ杉酒屋
 追掛て親に持たせた日傘哉
 月影のゆるる、蚊帳のうこそ哉
 世のうさは流して行くや納涼舟
 初物は先づ佛から嘉定喰
 斧の刃の弱りも見へぬ茂りかな
 呼ひ込まぬ斗りを茶屋の杜若
 木曾は未だ花の薫りや時鳥

一輪て閣よせつけぬ牡丹哉
草に風見せて流る、清水かな
朝顔やまた地に闇ひわりながら
親ひとり持て夜終蚊遣り哉
湖の廣さ夜に見る、螢哉
獨り居て廣しともせず涼み盡
寐轉んで船呼ふ家や夏さしき
蚊遣火や寐入し親の枕元
引あみに洩てや涼し夏の月
花よりもたのし青田の夕なかめ
懐の朝洗濯やはと、さす
持つ手から風の生る、田植かな
襟元をつくりうて見る牡丹哉
鳴いた空見れば影なしはと、さす
五月雨や濡れて眉さし相續狀
行く人を見てさへ暑し九折
客うけて帯しめなをす暑さ哉
手に握る計もす、し水の音
今朝市て見たと咄すや初茄子
返一重花をむかしし青藤
名を開へた斗りも涼し嵐山
水上は田うへさかりか笹濁り
竹の子や此短夜に似せぬ仲ひ
よし切や晝は静かな三谷堀
棟からも乗らる、船や夏座敷
ひるからは汚る、やうな暑さかな

客とめて十ト夜は鯉の馳走哉
蚤の跡乳をふくませてかそへ鬼
宿取て母の足もむ日永哉
暑いのかつへ唇にか、りけり
木末よりしくれて暑し蟬の聲
昨日から池になりけり杜若
ひら雲に月の光りやはと、さす
去年の月をもへはさむし夏水
賣人の邊ふて見せる團扇かな
水見ねて足の勢かる、暑かな
雲の味するかと思ふ清水哉
帷子や母のさしつゝの着置梅
孝の蚊は幾千代も昔の團扇
重ね着をすつはり脱て拾哉
寐た親を打てと孝なるさし蚊かな
骨折も腰合のよき田植かな
帷子の膝をこるや象牙撥
野に餘る聲や磯路のはと、さす
名を開へた所もかしき新茶哉
涼風や悪病除けの薬の香
寝顔やとりつく憂も同じつる
雨に暮れ雨に明けり果の花
廣き世へ出しし心や螢狩
笹垣に露より光る螢かな
水より茶を召あかれ瀧の茶屋
魚の寄る水底暗らさ茂り哉

青梅や漸しにして胸の空く
花と見るまでそ青田のそたちふり
身に馴しむ親のゆつりの薄羽織
葉櫻や花見る折の拾ひしる
風薫る御幸の筋、日のな、め
このあじを我が庭にぬれ清水かな
よき松を持たぬわり納涼茶屋
時めきて氷見舞や水無月
月花を見し戀ふさく若葉哉
不足なき家の光や初つ續
蛇を追ふ馬の尾世話し雲の峯
蚤飛ふや押へ合ふたる手と手と手
身ひとつを持て余したる暑さ哉
河邊から歸へればもとの暑さ哉
ゆう立の後先見もふ青田哉
おどろきや一聲たかき時鳥
口軽ふ若葉の隣や鳥食求る
涼しさや風計りかは月もあり
身の無事仰く誓ひや御坂川
母の無事仰く誓ひや御坂川
みしらすに筆先盗む灯取虫
晝顔やゆこれぬ程の日和雨
水端を親に譲りてす、みかな
朝の間に道のはか遠る暑哉
寐た子をはふと起しけり纏た、さ
具直に立て休むを田植人

雨化社して出る娘の田植哉
魚牛の水音かきや入梅の床
涼しさは表なきすたれ哉
手は馴て寝に眠るや田植時
卯の花の咲きけり垣に入らぬ月
孝徳をひ、かす瀧や夏木立
わ、掛の荷物枕ひる寝かな
二の膳は隣り村なりはと、さす
雨の灯の細ればた、く水鶏哉
握る手に水も匂ふや田草とり
夫とまへ夜のあしきなや時鳥
辞宜深ふ親に云子や更衣
親の意をそむかぬ編の袷哉
越し兼て見送る川のはたるかな
夕立の半分仕たり矢矧はし
客待の團扇をなへや夏座敷
行先は先の初音や郭公
呵られた子は泣なから晝寐哉
入梅雨や湖に戻る、つはの盥
負ふた子のあせるに迷ふ蓋狩
思はへや傘の用意も親の慈悲
日月の御旗に風の薫りけり
雨乞や葉さへ降る日もあるに
手枕に白帆眺めて夏座敷
朝なく露目さましき青田哉

夕立やむかひの傘の行違ひ
た、一とつ袂に光るは夕蓋
折掛て鎌借りにけり藤の枝
夕立に無沙汰の宿や留守の軒
連れあまた待せて洗ふ清水哉
扇持つ客は行儀はすわりけり
最うけうか暑い時や雲の客
影見へて降かすかなり郭公
着せ氣の曇つし涼しや辻が花
氣の逢うた道連はしき蝸牛
何國迄よき名を得たる新茶哉
一寸寄る木影出おしむ茶搦哉
入梅晴や笑ふたよな夕日影
雨降て月も青けや若葉山
幸ひに呑むや清水の忘傘
一ト火のしあて、着をひる格かな
飛鳥も木かけへ廻る暑かな
夜ならひの燈をなむり盃籠
手にすくふ清水にうつる夏の月
身の力ら光りに見せて舞蓋
庭に水打てはし居や夏の暮
盃にうけて涼しや夏の月
可愛さににくう阿るや川狩兒
岩梨子や風雅に育つはげの松
吹さます素顔の不二や秋隣り

打水に生る、風の庭木哉
水音のゆかし旅路の暑さ哉
月の出を戻りしは也蓋狩
一輪も葉かくれば無き牡丹哉
陸言の覺めておかしや竹婦人
一ト来てなげはさ、よし庭のせみ
讀なから出すや荷物の土用平
ま、ならぬ浮世は長し涼み盡
水音を枕に夏の月夜哉
残る月、残らぬ聲や時鳥
葉櫻や知れぬ先きから戻る傘
蚊遣りして親に進る枕哉
涼しさを作りて昔の香哉
寝た顔のはい追立て、枕蚊帳
五月雨や問れつとひつ渡し小屋
蝸牛や深車自由をしらぬふり
朝起は常からに有り薬の日
植木見て樂しむ庭や夏の月
戸さしたる主待客や涼み盡
虹の橋瀧にか、りて五月晴
身の程を守つて安し衣かへ
入る月の影追ふ聲や郭公
井のうちやあふなく明けし蝸牛
降はつにして降もぬ五月雨
水やれば風も添ふなり釣しのふ
月涼し掛る床几に松の影

一輪て閣よせつけぬ牡丹哉
草に風見せて流る、清水かな
朝顔やまた地に闇ひわりなから
親ひとり持て夜終蚊遣り哉
湖の廣さ夜に見る、益哉
獨り居て廣しともせず涼み盡
寐轉んて船呼ふ家や夏さしき
蚊遣火や寐入し親の枕元
引あみに洩てや涼し夏の月
花よりもたのし青田の夕なかも
懐の朝洗濯やはと、さす
持つ手から風の生る、田植かな
襟元をつくろうて見る牡丹哉
鳴いた空見れば影なしはと、さす
五月雨や濡れて届さし相搦状
行く人を見てさへ暑し九折
客うけて帯しめなをす暑さ哉
手に握る計もす、し水の音
今朝市て見たと咄すや初茄子
返一重花をむかしし青藤
名を聞へた斗りも涼し嵐山
水上は田うへさかりか笹濁り
竹の子や此短夜に似せの仲ひ
よし切や蜚は静かな三谷壺
標からも乗らる、船や夏座敷
ひるからけ汚る、やうな暑さかな

客とめて十、夜は餅の馳走哉
蚤の跡乳をふくませてかそへ鬼
宿取て母の足もむ日永哉
暑いのかつへ唇にか、りけり
木末よりしくれて暑し蟬の聲
昨日から池になりけり杜若
ひら雲に月の光りやはと、さす
去年の月をもへはさむし夏水
賣人の遠ふて見せる團扇かな
水見ねて足の弊かる、暑かな
雲の味するかと思ふ清水哉
帷子や母のさしつゝの着鹽梅
孝の蚊は幾千代も昔の聞ぬ
重ね着をすつのはり脱て袴哉
兼た親を打てと孝なるさし蚊かな
骨折も張合のよき田植かな
帷子の膝をこるや象牙撥
野に餘る藤や磯路のはと、さす
名を聞へた所もかしき新茶哉
涼風や悪病除けの薬の香
寝顔やとりつく憂も同じつる
雨に暮れ雨に明けり栗の花
廣さ世へ出し心や蜚狩
笹垣に露より光る蜚かな
水より茶を召あかれ湖の茶屋
魚の寄る水底暗らさ茂り哉

青梅や漸しにして胸の空く
花と見るまでそ青田のそたちふり
身に馴しむ親のゆつりの薄羽織
葉櫻や花見る折の拾ひしる
風薫る御幸の筋や日のな、め
このあじを我か庭にぬれ清水かな
よき松を持た鶴あり納涼茶屋
時めきて氷見舞や水無月
月花を見し戀ふさく若葉哉
不足なき家の光や初つ蟻
蛇を追ふ馬の尾世話し雲の峯
蚤飛ふや押へ合ふたる手と手と
身ひとつを持て余したる暑さ哉
河邊から歸へればはと、暑さ哉
ゆう立の後先見もふ青田哉
おどろきや一輝たかさ時鳥
口軽ふ若葉の陰や鳥食求る
涼しさや風計りかは月もあり
身の望み神にねかふて種をろし
母の無事仰く誓ひや御坂川
みしらすに筆先盗む灯取虫
晝顔やゆこれぬ程の日和雨
水端を親に譲りてす、みかな
朝の間に道のはか遠る暑哉
寐た子をばふと起しけり腫た、さ
眞直に立て休むを田植人

薄化粧して出る慈の田植哉
鹿牛の水活かくや入梅の床
露曇る夜は露高し郭公
涼しさは裏表なきすたれ哉
子は馴て袋に眠るや田植時
卯の花の咲きけり垣に入らぬ月
翠徳をひ、かす淵や夏木立
わ、掛の荷物枕にひる寝かな
二の時は隣り村なりほど、さす
筒の灯の細れはた、く水鶏哉
握る手に水も匂ふや田草とり
夫とまへ夜のあしきなや時鳥
辞宜深ふ親に云子や更衣
親の意をそむかぬ編の袷哉
越し兼て見送る川のはたるかな
夕立の半分仕たり矢矧はし
客待の團扇そなへや夏座敷
行先は先の初音や郭公
呵られた子は泣なから晝寐哉
入梅雨や潮に戻るつはの盥
負ふた子のあせるに迷ふ蜚狩
思はへや傘の用意も親の慈悲
日月の御旗に風の薫りけり
雨乞や葉さへ降る日もあるに
手枕に白帆眺めて夏座敷
朝なく、露日さましき青田哉

夕立やむかひの傘の行違ひ
た、一とつ袂に光るは、さ
折掛て鐘借りにけり藤の枝
夕立に無沙汰の宿や留守の軒
連れあまた待せて洗ふ清水哉
扇持の客は行儀にすわりけり
最うけうか暑い時や雲の翠
影見へて聲かすかなが郭公
着せ氣の暑つし涼しや辻か花
氣の逢うた道連はしき蜻牛
何國迄よき名を得たる新茶哉
一寸寄る木影出おしむ茶搦哉
入梅時や笑ふたよな夕日影
雨降て月も青けや若葉山
幸ひに呑むや清水の忘傘
一ト火のしあて、着そむる袴かな
飛鳥も木かけへ廻る暑かな
夜ならひの燈となりぬ盃籠
手にすくふ清水にうつる夏の月
身の力ら光りに見せて舞盃
庭に水打てはし居や夏の暮
盃にうけて涼しや夏の月
可愛さににくう阿るや川狩兒
岩梨子や風雅に宵つはげの松
吹さます素顔の不二や秋隣り

打水に生る、風の庭木哉
水音のゆかし旅路の暑さ哉
月の出を戻りしは也蜚狩
一輪も葉かくれば無き牡丹哉
陸言の覺めておかしや竹婦人
一ツ来てなけはさ、よし庭のせみ
ま、ならぬ浮世は長し涼み盡
水音を枕に夏の月夜哉
寝る月寝らぬ聲や時鳥
葉櫻や知れぬ先きから戻る傘
蚊遣りして親に進る枕哉
涼しさを作りて昔の香哉
寝た顔のはい追立て枕蚊帳
五月雨や問れつとひつ渡し小屋
蝸牛や深車の自由をしらぬふり
朝起は常からに有り薬の日
植木見て楽しむ庭や夏の月
戸さしたる主待客や涼み盡
虹の橋瀬にか、りて五月晴
身の程を守つて安し衣かへ
入る月の影追ふ聲や郭公
井のうちやあふなく明けし蝸牛
降はつにして降もの哉五月雨
水やれば風も添ふなり釣しのふ
月涼し掛る床几に松の影

家からを見上る程の牡丹哉
 先ける手の濡れて氣味よし杜若
 涼しさや欲には梅の香もほしき
 卿の戸や盛吹込夕あらし
 足も手の替りて仕度田植哉
 卯の花や我籬根のみ臘月
 夏秋を衰と表に 茅の論哉
 寝不足のこゝろに足りし郭公
 千とせふる松の根らしや昔の花
 庭にさす扇は風のつほみかな
 芥の 器にならへ 小殿原
 川あるに非水汲せてひやし瓜
 親に似ぬ姿なりけり 蛙の子
 白百合や露より外に塵もなし
 蝦釣て置て寝惜む月夜哉
 蚊一ツの聲に覺るや宵の夢
 帆の役に残りて島の頼かな
 卿の戸や蝶も交りて火取虫
 團扇はまつ勝と手に取る團扇哉
 振ふたら夢も出そふな紙帳哉
 祝の籠すきまを出たる今年竹
 葉の 輝涼しき聲や暑き聲
 月出ていよく白し蓮の露
 こかれてやみつに姿を軒しのふ
 古池や水あたらしきかさつはた
 二聲は月か鳴いたか郭公

懸茶屋へ 聲上て這る心太
 来て見れば人家もありて夏木立
 其親の力ともなれ今年竹
 小家にも似ぬ香なり初松哉
 瀧の音聞て脱けり汗の衣
 直を付ける人のうつるや初盤
 夏瘦や親に隠して見る鏡
 人聲の朝からたへぬ清水哉
 吹て来た様ふに座敷團扇哉
 夕立や山を持ち越す雨の脚
 やさしくもた、なくのみの初敷哉
 曙や宿忘れたか飛ぶ 雀
 夕立や一町こへて土はこり
 池垣の藤のなかさや水のかけ
 裏の戸をほとく 敷く水鶏かな
 柳に船預けて船頭 寝寝かな
 天地に明り一ツやはつ 蓋
 涼しさや物にさわらぬ松の聲
 一しつく 落るかほりやふくわやめ
 征の葉の匂ひも高し 粽かな
 ころひ寝の暑さ 養ふ作り 瀧
 落葉せしやつれも見せず 團の松
 吉野見た花の 汚か 田植笠
 近過ぎて思掛なし 時鳥
 飲んで来た酒よりうまい 清水哉
 垣をして家鴨は入すかさつはた

玉程に持て難しけり初茄子
 世帯まで見へすく様な水賣
 蚊を outcome 一度涼し暑さ哉
 夕立も晴れて涼しき月夜哉
 かくれより 顯れ出づる 岩清水
 うの花や 闇も月夜と見へにけり
 蚊の聲 涼しき所も熱くなり
 朝顔の思案に くれて 際期哉
 さくらさへ 伐たくなり ぬ入梅の庭
 汗拭ふ 度に 思ふや 親の恩
 日につれて 玉をちらすや 蓮のつゆ
 日の入て 勢ひかわす 青田哉
 蟻牛の 角片むけし 木の 平
 居眠りも 初蚊相手や 子の 添乳
 國々の 言葉詠りや 茶津美歌
 吹すとも 自然に 涼し夏の月
 待心直にと、いて 杜宇
 又ともす 火に 又来たたり 火取虫
 魚の 飛ぶ音も 涼しき 流れ哉
 血吸ひ 蚊や 憎み 叩けぬ 白襖
 卯の花や 枝蘇の 山路を 埋む雪
 奈良う ちわもとの 都の風を よく
 親の 恩あふくにあまる 暑さ哉
 うつくと 午睡の 夢に 雪邊摩
 夏さしきとこの花にも 蝶かきた
 夕立や 蓮の 熱さは 何處へやら

卿の 膝半睡の 夢を 醒しけり
 かち割に 晝寝の 夢を 欠かれけり
 愛嬌は 母の 譲りや 紅團扇
 編笠や 蔭か 助ける 不仕合
 雨風は 世の 浮草の 苦にも せず
 若下に 置間も また ぬ 團扇哉
 短夜や 親の 恩知る 初子持
 青梅や 見るより 早し口は 水
 東は 敷て 上手を知るや 早苗取
 雲 窓を 月も 覗て 時鳥
 老も 杖忘れて を かし 初給
 美しき 手を 送りけり 眞桑瓜
 囉れて 行子に させる 裕かな
 扇子の 詩 獨り 寐轉ひ 吟しけり
 牛馬を 動かす 圃の ちから かな
 阿の 夜も 何の 修行や 郭公
 金魚屋の 聲を うつ、に びる 寐哉
 寐防助も 朝未明より 蓮見かな
 蝶ふせる やうに 着せる やまぐら 扇
 旭の 恵み 笠に 頂く 田植かな
 君かため 身をつくして や 遊うちわ
 采りて 世間 咄しや 夕涼み
 傘に 音せぬ 雨や 鳴水 鶏
 冷したる 水に 名もあり 心太
 廣々と 何處まで 續く 青田哉
 不斷には 淋しき 宮や 夏祭

月をちて地にありそよな夕立脚
 新らしき蚊帳や寐て見て客こゝろ
 親の 荷を 暑さに 助ける 子の 香
 星ひとつ 見へて 驚しや 入梅旅
 一本に 危き 橋や 行々 子
 眼さましに 花活 替る 晝寝哉
 寐たる 子に ふつて させる や 枕蚊帳
 みしか 夜も 暑さに 長し 蚊帳の うち
 飲むより は 見て 葉なり 野邊の 芥子
 拾日傘や また かたまたま 足運ひ
 水に 眼をは なせは 高し 雲の 峯
 夕立の 時行 あとや 蟬の 聲
 來る 道に なみ 風の あり 夏木立
 ゆる されて 供も 見に ゆく 牡丹哉
 山里の 袖か 住居や 閑古鳥
 折々は 時あかり なり 五月雨
 盗み寝の 蚊に 盗み 喰しられけり
 朝顔に つる へま かれて 貰ひみつ
 冷やくと として 心能き 籠まぐら
 露の 聲は その 儘 夏の 山
 男とは したら 居たり 子や 初蟬
 手放せば 嵐の やとる 早苗かな
 底に 灯を 配りて ゆかし 夕涼み
 散る 竹の 葉や 掃目の 涙に 船
 一口は 味も おは へぬ 清水かな
 團扇 買ふ 間に 逃れたる 白雨かな

下駄提けて 渉る 小川や 雲の 峯
 汗ふいて ふと思ひ 出す 扇かな
 木の 枝に 杓を かけたる 潜水哉
 寝て から 戻る 覺悟や 夏の 月
 所望して 折る 手に 散る や 芥子の 花
 寝た 親の 側で 蚊を 追ふ 團扇かな
 一ト 思案して は 飛ひ 込 蛙かな
 乳貰も 仕事に かわる 田植哉
 風 蕪る 方を 上坐や 涼み 壺
 草の 葉に 風を 殘して 飛 壺
 野宿にも 榮花の 夢や 夏の 月
 ぼつと 音に 香を 吹く 蓮や 曉の 鐘
 迷ひ 子や 母は なみ たる 日六月
 衣は す 甲の 下や 百合の 花
 雨吐て かたふさ 直る 牡丹哉
 古寺に 一木 目立や 若 楓
 一聲を まつ 耳い くつ 郭公
 萬倍のみ どり 漂ふ 青田かな
 開いた 意見に 暑し 親の前
 夕立や 駒に 鞭うつ 村は つれ
 種せ、る 鴉 憎らし 苗代 時
 轉ひ 寐の 耳に 際なし ほど、さす
 時鳥 啼た とこ なし 朝の 山
 暑き 野に 涼しい 風を まつ の 影
 行夏を 惜むも 老の 一つ 哉
 御手洗や 神代の 儘の 昔の 花

時鳥愛は三じまか箱根山
釣ると来て父母に手をつく蚊帳哉
卵の花や鎌研く庭の夕明り
初釣りの紐色々の蚊帳哉
黄昏れる机を照らす螢かな
明けはのに青う移るや夏座敷
早乙女のたすきかくるや雨上り
宿引の口に涼しき座敷かな
月の出てきた暫くの涼み哉
青梅と開て乾燥のやみにけり
日は山に入て月踏む田植かな
書に書たやうな住居や釣忍
水は田に余りて無事な暑かな
是か其命の種よ種おろし
風りんの音も涼しや玉すたれ
一人寝の心の底を啼く蛙
二親のおしへをかぬ田植哉
山の端に月はいる處夕涼み
船にさへ隣りかてきて夏の月
蚊はしらの崩れて高し山の月
夕顔や並のかせきの捨て處
月影を両手に提る清水かな
井の底は蛙の世なり夏の月
田の水の泡たつ音や雲の峯
雨降れて平に月の若葉哉
茂る木に香もありそりや梅林

時鳥鳴てをむるかき白き花
折鶴をくつして包む螢かな
一寝入してかき釣るや初蚊帳
若竹や表表なき風の音
足音で散るかあふなけしの花
のほり鯉昇せて高しよめの舟
傘の中に客ある夕立かな
晝を夜と思に暮す螢かな
綜結ふ片手にはさむ額髪
ひやくと齒にしむ瓜の馳走哉
青梅や水氣うるをう日の内
草の名を問ひに答て思は草
莖草に力の儘や蟬の聲
沙干るや鳥居の高き巖島
時鳥一聲高し夏の月
鏗木のかくれ深き深樹哉
茂りかな眼に立つ梅の山
ふと聞し空耳なすや時鳥
心にも曇りなき日や不二詣
白壁の町を離れて青田哉
町を出て漸の加ぬる青田哉
汚ても田植の牛の光澤のよし
焼にけり螢は籠の尻へぬけ
川狩や友よ上座の遺傳へ
かけになる樹も響き汲む清水
身にあまる母の苦勞や更衣

母親の片手は寝さるうちは哉
啼く聲を月に残すや時鳥
入相の常を忘れて白牡丹
葉となりて隠み遠退く櫻哉
花ならて若葉も樹々の一と盛り
魚を飼ふ程は水なしかきつはた
子に團扇取られて廻す行燈哉
涼しさを船へ嘶のど、く家
汗ふいて知る恩親のやつれかな
陸しい中や三河のかきつはた
葉柳や茂り包みし小谷川
兒を寝せて又出る様や夏の月
蚤まけをいひひくにして朝寝かな
涼しさを橋わちつとも未ひ程
夕立や我郷もやと旅のそら
短夜に朝飯喫へぬ書生哉
借ひ春送返る宿や時鳥
夕月も鉢の中なり心太
暑めされはまた降るものか夏の雨
涼しさを原先に船の入かわり
見かゆれば海見る坂や青嵐
なき父母に花香手向ける新茶かな
朝からの暑さ束ねて雲の峯
亡き親の恩は山なり夏木立
五月雨に燃る計りを岩つ、し
川狩の良り急くも親に孝

川九郎に並ぶ處なき暑かな
鉢の木もいきはひまして昔の花
水音にちら付く草の螢かな
朝日さす窓のはこりや還るかけ
わかことは忘れて親の更衣
曆につく親に養應す團扇哉
はらわたも冷る思ひや心太
みのかさは民の賣や五月雨
恩愛をじつと釣り込蚊帳哉
五月雨や景色のかわる朝と晩
山雲や雨にもならぬ響作も
鳴た沙汰に更かしぬはど、さす
月さへていよく暗し木の茂り
四五軒の村や朝夜さはど、さす
日盛りのつらい嘶しや夕涼
月花の夢懐に晝寝かな
五月雨やけふも門田の泊鶴
望まれて返事ひま取る牡丹かな
竹の子や水吹かけて荷こしらへ
涼しさを人にもゆつる團扇かな
取りに往て貰ふて来けり余所の蚤
世を捨てつ世に捨られつ夏書哉
荷らかな幣の影汲む清水哉
隣から隣へ語る日永かな
涼しさを列た釣瓶の平く香
葉柳や風の筋から日の暮る

誰も好く月一歌一舟涼
麥秋や一間は夜具の難かし
卵の花や夏また寒き朝の月
夕立のあとうつくしき月夜哉
千町田の聲に涙ある蛙かな
日の句ひ残る草木や夏の月
下手なほど先きに成たる田植哉
生くさき砂原道の暑かな
雨にぬれ日には乾す田草取
汲む水も處替して煎茶かな
月す、し五位の茶を居る塔の上
花嫁も野に出るめけり夏の秋
したひけり今日の熱さ雪の日は
青雲に蚊遣火はし世の想や
名にし逢ふこの八ッ橋や杜若
おちつかぬ空の色なり枝蛙
走り込そふな白帆や夏座敷
月に聞く限りては無し郭公
往復やたよりたのしむ日の小影
蟬啼や暑は静に松の聲
行く水に心添して夕す、み
寝た親の脈を伺ふ暑さ哉
筆持て蚊帳から明くる行燈哉
葉かくれの花の姿よ日傘
漣る行有なし道や蟬の聲
暮の言の止む際もなし五月雨

夢にさへ見てよいものは初茄子
特別花散て春は行けども花王哉
炎天や夜のあつて社舂も仲
牡丹伐日はなし咲てちる日迄
是てさるぬけは氣輕し夏羽織
つとひ来る淀川の月やゆふす、み
はらくの雨はあふなし芥子の花
待明す辛抱をかしはど、さす
片屋根は雫も落ちす夏の雨
掃ちりのいにともなかる夏座敷
遣りも遣り伐も伐たる牡丹かな
月は暈めした儘なり鳴水鶏
時鳥なりや踏込水溜り
苗代に待つて鳥の笑けり
水に富む家の構へや夏木立
大針に闇を縫ひ行螢かな
をもだかの葉裏に晝の螢かな
飛び越して向から汲む清水かな
扇さす客へ上座を譲りけり
藤の葉の體からみや木下闇
打なびく稻氣味のよき青田原
何時の間に天は晴しか郭公
夕立やぬれれて喜ぶ作男
格仕開墾の場所も見ておけ不二詣
つかまへた手のことばゆし蟬の聲
髪結ふて大さう潜る蚊帳哉

指上げて行と日傘を人の中
極樂は愛らの事歎蚊帳の月
松の聲して後燭の暇さ哉
行幕の道標する螢かな
人聲の流る、川や夕納涼
初夜は雲井に届く響かな
其罪も晴れて鶴川の月夜かな
明け安き夜とは思へる草の露
一と聲に慕はれけり時鳥
早乙女や昇る旭を笠の内
若のまけ手見てあせにざる最負哉
涼しさや水の景色を端居から
誘われて其ま、で行く涼み哉
涼さや涙の敷に忍の琴
纏にまで心かかると、晝寐哉
咲みちて蝶に曳る、牡丹哉
六月もそ、るに暮し新枕
相談の要を鳴らす扇かな
散ふりの見へぬつよさや鬼
盆火に身は焦れけり宇治の里
ひすふ手の影の流る、清水哉
涼風や机からと衣袋る
水鳥の夢の真上や時鳥
其色に水もよどむや杜若
今も蚊の群に寝るや孝の端

高の巢の中は崩れて夏木立
留守は猫一疋や夕納涼み
苦るしげに犬の舌出す暑さかな
はど、さす鳴く音も涼し今朝の空
灯もつけず留守して居たり夏の月
かのが火を見て取らる、螢哉
雲の峯見ぬ花の白さ哉
笠を着て春なす女中の田植哉
涼風の誘ふ溪間に暑よけ
立我汗で建て涼しや夏座敷
風道の塞ぐやうなり雲の峯
夜どふけて燈火さびし扇扇
日の入るをまちて出でたる夜店哉
涼しさか指とらせたる掃除かな
汗入て暑さをたひひ扇かな
二羽米れば雀も重し今年竹
一と口はく、んで歩行清水かな
夢でなく誠なりけり初茄子
短夜や明残りけり夢半分
涼しさや月の上ごとく渡し船
須臾くは目を閉ちて聞し短刺哉
我庵の暑さもすてに木蔭かな
涼風や人吹き寄せて橋の上
聲に身をまかせて飛哉時鳥
暑さ日の余りや夜の人通り
雲深して猶草臥る、暑哉

戴ひて香ひ満りや昔の花
夕立に遇ふて木蔭の主人かな
牛叱る聲迄暑し鳥羽細手
早乙女や田歌まじりの戻り道
そつと来て乳母の覗くや枕燭
大平に文武云けり蚊帳の外
埒明ぬ牛の跡行暑かな
書齋會や富士を巻出す青すたれ
大空の色や彌れて蒸る風
暑き夜や更へ川原に人のこる
日の本は榮へも早き若葉かな
短夜に夜着を伸び出る小供哉
蚊遣火にかくまい君を涙哉
孝行の身のうち涼し古團扇
まさくと夢になりけり時鳥
見は乳ちに遊びて母は晝寝哉
若竹や孝子の家も此邊り
田植には神や佛の留守居かな
郵便も後る、里や時鳥
簾さしに邪魔な加勢や涼み舟
筆に似て苦むも道理杜若
永い程の避暑に官吏氣を延し
朝日影こほさぬ庭の若葉哉
陽もひゆる心地や夏の月
行燈は坐敷に眠る納涼哉
蚤一つ飛でさわかす客坐敷

雷代や踏み分けてある種替り
竹の葉の動き出しけり夏の月
大刀疵の鏡上坐や土用干
短夜や雪よりつらき乳貫ひ
涼しさや晝寝せし子の夢笑
家ありと知らる、島の野ばら哉
木の刀指して粽の使ひ哉
大平の夢もさめけり蚊の聲に
雨乞や哥を讀む人斬る人
後添の望み立るや初轍
狼りにけ散らて日を経る廿日脚
涼風や脊をふくらかす薄羽織
青梅や人の齒音の齒にこたへ
晝の苦は忘れてくらす夏の月
幾千里渡る燕の翼かな
觀音も深ふ包むや夏木立
大胆に蝸牛の道ふや蠅釣瓶
一滴は鹿が涙か今朝の雨
五月雨や雲は西ても東ても
山吹の富家に見へて小金色
風を取る工風仕懸て晝寝哉
大事かる根太を纏のせ、さけり
馬の耳すはめて向ふ清水哉
涼しさはひとへに籠る親の恩
舟鏡の五厘は安し夏の月
追付や夕立遅く論車は着さ

枯色の若葉に目立つる秋
漣浪や亂れて涼し橋の月
青梅や男の口に知らぬ味
一聲の跡も寐られず時鳥
鐘太鼓うつてはしかる夏の雨
青梅や人のかんでもつを生じ
欲悪を洗ふ清水や寺の門
帷子を着馴る人か襦下り
あせの出て手はこたへたり水賣
濁したる水頼母しき田植哉
立寄りて暫し涼ん松の月
留守守の間に骨休めする團扇哉
水底に道の付けり夏の川
初燈投げ込込てあり得意向
白雨や踏間進へし客の下駄
笠の端に狂ふて世話し道の繩
花嫁も今日の田植に土たるま
生捕て逐して又火取虫
裾ぬらす露に咎なき螢狩り
隣りには兒の夜鳴や時鳥
掛香や蚊遣りの果も又匂ふ
虫干や涙を絞る品もあり
晝顔や暑さは余所に捨て候き
親よりも四方の竹の子伸ぶ學校
洋樂を谷間に掛て藤の花
雨と見た陸はこたえて團月

五月雨や工合の悪しき敷蒲團
足にまでまくらさせけり夏蒲團
涼しさを棄せて歩行や帆掛船
筆捨て詠むる釋の螢かな
虫干の産着に知るや親の恩
山住居蚤飛はしけり雲の中
親の夢覚めて廣さや蠅の中
一譯は何處か初音哉時鳥
月さへて獨り涼しい運かな
氣短かに笠の紐解く清水哉
竹植も孝子の真似か藪と笠
洋服や柱にこする蚤退治
豊國の官居涼しき雄波哉
大きな口ありそうや蟬の聲
抱た子の抱て見たがる西瓜哉
鬼あさめ手折しにくひ珠敷の房
一と聲を聞から告げて時鳥
寝る迄は外とに更すや夏の月
散り仕舞まては掃かぬ牡丹哉
ちぎりそめなますの出来る木瓜哉
下座までゆるく言葉や青嵐
鎗の柄も今は矢旗の竿木かな
我が身をは喰せて母の蚊を拂ひ
我田にも照降あり夏の雨
ぬれて来た自慢咄や夏の雨
添ひ馴れて戀しさ増しぬ竹婦人

子と團扇 出しけり納涼臺
風筋へ廻してあるや瀧み垂
雲遠く霞の空や時鳥
ちり水の肌を涼しき涼見哉
風鈴の音さへ絶へて暑さ哉
語るにも邪魔な蚊や座禪堂
涼しさや琴の音かよふ松の下
夕袖より盃蒸る花袖かな
翻すなど言ふつ、こはす新茶哉
都から風を土産の團扇かな
母の衣しておと敷納涼哉
時鳥啼く嶺や明の月
青立の晴れて住よき庭かな
はる蛸や這へはあゆめと親心
岩に鼻すりつけてのむ清水哉
照り付て暑ひ断しや綿の花
川狩や大漁ゑたる孝の網
家桐にも能き植所や庭の竹
灯を消して近寄る蓋かな
合壁は偕合風呂なり夏の秋
遊ふ日と子はおもひけり初つ拾
放しやる恩を恨むか火取虫
敷道り焚く軒によされし暮の月
麥刈や子に留守させて無事な家
旅人も掃除して行く清水かな
雨中也暑ひはつなり水賣り

乞雨の誠届とや歌一首
くらがなて鏡かそあるや盛賣
常夏や澄は香初め潮の末
試みか常となりけり初拾
見競る花は世になし白牡丹
泣て居る兒に乳を見せて夏の秋
子を持つて親の思ひる暑かな
腰に風た、んてしまふ扇かな
勢ひも添て賣けりはつ松魚
胸の透くやうを蕪りや蓮の花
憎いとて捨るではなし火取虫
徳利を相手に一人あす、み哉
垣根から夜明の早き花卯の木
來ては來て團扇もあこる程
我國の氣色と、のよ田植かな
早乙女に吸付水蛙の思ひ哉
婿のよい男世帯や冷し汁
樽も手をよこして戻る田植哉
民の汗せ色付にけり夏の秋
后は我が杖と頼むや初轆
門と走る兒を呼ぶ母や日のさか
ひた、くか比上早苗の水かけん
水打た樹から風出る掛へかな
唄わねば糞子のよふな田うへ哉
峠から柳涼しう詠めけり
暑いと子は子にも言はぬ團扇

身をま、に持たせて蚊帳の廣さ哉
をれ聞けと待人に啼や時鳥
蟬鳴ひ妹は離す田植うた
天地の景色整ふ卯月哉
輻迫ふや親の寐顔を詠めては
霞しきをわひて釣けり母の蚊屋
此程な人になれとや帳の繪
麥秋や表坐敷は戸もあけ
葉櫻や我に戻りし我がこ、る
更けてから地を這ふ雨の盛哉
石切の火を飛せけり木下閣
あの世から此世へ出たり夕納涼
賣はて、また日は高し心太
絹蚊帳や佛のよふな兒の寝顔
五月雨や蘇鐵に傳ふ釘の鋪
絹蚊帳や洩る、研も品んの能
白蓮の雲からも夜の明にけり
子は團を握りて戻る蓋かな
夏羽織薄くも重し親の恩
よく寐ても母の覗くや蚊帳の中
糖雨の珠をまどまる浮葉かな
飾らねは浮世は安し團扇
雲を踏心の輕し不二詣
撰とけて葉さへ剪なりかさつばた
抱出してなく兒に見せる蓋かな
魁に子供の若たり初拾

夏の日盛りもしらす氷水
甘なける程うれしかる穂麥哉
三階も待つ身に低し時鳥
晝顔の咲間は臥る妾哉
任形じて睡さとい出す、み哉
谷一つ越せば火串の明り哉
古き世の光りを飾る兜かな
ちのみ子の糞熊や母のしのひ足
蚊帳釣りて親にす、める寢床哉
花鳥の醉を新茶にさましけり
初日大黒柱生れけり
遠い井の水を汲せて新茶哉
枝村の夜は成けりはと、さす
出来る田の畦しに更るす、み哉
かさな子も糞好みスル裕哉
快よし木綿なれ共更衣
寐かへれば夜わとく明けて初松魚
團扇等に石よみに元録とあり昔の花
むらわてた馬引止めてはと、さす
元日は花なら丁度替かな
麥秋や裏からも出る雇人
夢の人何處から來たそ蛸の中
はき出す間をこしにさす團扇哉
き、道をなめては摘むや藥草
短夜やふと耳に入明の鐘
水音にひきたつ夏の坐敷かな

笠のらぬうちに越へたし夏の山
子に着て早氣も輕し初拾
夕立や溜さて濟みし迎傘
庭草の上れ葉もとるや夏の月
窓明けて見れば露のみほど、さす
雪降りて立て芝居の暑かな
涼しさや珠簾月に掛く南山の露
さぬくの袖振りわけける柳かな
夕立や山のこなたは金の降
現ふし山も飛び越しそうな蜻蛉哉
はつ松魚墨のかわかぬ手紙かな
手にさわる物を枕に敷兼哉
蚊の事は忘れてつらき烟り哉
あける戸や心をそとに時鳥
戸口迄雲のつかへる五月かな
ちきりたしまはし置たし初茄子
海原も越へた姿や初玄鳥
此先もまた往て見たき青田かな
暑れある人の古跡や岩清水
病む親を思ひやらる、土用哉
夜は物の耳に澄みけりなく蛙
行く末も身の潤ひや玉の汗
虫干や老の自慢の切れあふみ
後生たから來るなよふんと今暫し
雲に寐て麗き天地のひとり旅
親あふく心美し 蓋團扇

夏瘦や花より無事は親の顔
捨てられし身も世に出て、扇哉
夏羽織にさる斗りに履みけり
牡丹見て貧しき心忘れけり
御つかれを厭ふ孝子や露中
降かわるたひ晴待や五月雨
涼しさや月をなかめて人も立つ
游瀧に 一入涼し蟬の聲
母の來てかわる咄しや門納涼
後るへも廻して遣ふ團扇かな
子の無事を問て手に取團扇哉
橋越せば草履路なり夏の雨
呼ぶ聲に眠氣のさめる松魚哉
涼しさや川に流る、山の月
節々に手の揃ひけり田植うた
蒼蠅や佛の顔を慈の場處
罪の數手操り重ねる鵜飼かな
住は都山は朝からほど、さす
無駄に鳴く蛙も小野を泣せけり
秋近うなるや水音松の聲
見へかくれ闇を籠行蓋哉
まら藤も波の風情や朝の風
雨晴て緑流る、若葉哉
奥庭に 一花ささぬ白はたに
遠くから植て仕舞の門田哉
眠たさを失ひにけり夏の月

榮かりに初音渡や時鳥
孫つれて杖で輪すや蟻の辭儀
蝶々の夢や崩れて芥子の散る
飛ひそれて益に手なし川向ひ
蚊遣火をこらしし跡の心地哉
身を立る子の名ひるめや初のはり
見るめには人のものなし青田面
我儘にならぬ宿直の暑かな
勿さうや料理掛てもはつ松魚
花散りて血に鳴く聲や杜鵑
月涼し水す、しまた風涼し
月の出に折りこそよけれ時鳥
往來する燈や闇を離ふように
花の夢またさめやらて卯月哉
いろうても涼しさうなり青すたれ
朝顔の 一りん咲て 秋隣
葉かくれの花はと覗く日傘哉
冬物を築めて出や質の蚊屋
切世を忍び裏て咲すや百合の花
人絶て鳥の來るなり櫻の實
男の手鳥渡かりにけり鮮の腰
餘所目にも嬉しきものは田植かな
摘みこはす平は白し紅の花
千代の暗み照らし益の光り哉
二つめに手さねはめるや雀ちまき
母呂嬭や覗けは乳子の夢笑ひ

肩て風切て往來やはつ拾
旅人の暑めて通りぬ岩清水
牛引て戻る山路や郭公
瓜ひとつ湖かりて冷しけり
風荷ひ汗をしほるや團扇賣
鯛一つ牛助かすや舟の上
倒木に斧の跡なし閉古鳥
寶買も奇麗なものよ初鯉
このはつ音誰も聞ひたか子規
招く手の風に巻込む螢かな
蚊やり火や軒端に巻る夏の月
店さきに削る氷の曇かな
追ふて行人の後から螢かな
淵鼓木魂も打つて若葉かな
麥飯を持出す縁や夏の月
巡る、を待つて涼むや月の雲
やかて來る縁あてにする田植かな
虫干や昔を誇るささひ刀
早乙女や昔同し笠同しうた
鶯の聲も古ひて秋近し
買ふてから錢のくめんや初鯉
子のかたき親の打けり尻の蚤
花賣の籠にはのちぬ牡丹哉
青梅や地につくはかり雨の枝
仰向た空にや月やはと、さす
四書五經飛騰するや土用干

涼さの盡ぬ片手の扇子かな
涼さは夏外より送る風
轉寐のうつ、に遣ふ團扇哉
月々瀬や梅は茂りに郭公
來もまた斑らくの田植かな
鯛の口は茨に蔭れて音高し
客に手を借るや蚊帳の釣初め
ぬれた葉の闇にひかるや時鳥
帯はまだもとのま、なり初拾
卵の花も咲てまつのはと、さす
五月乙女の行儀や笠の雁ならひ
た、かれて昔を憶る水鶏哉
蚊嫌ひの寝た親厭ふ袂哉
思ふ事有夜は益と明しけり
撫子や日陰育ちの色てなき
短夜の 更行空や月遠し
夢なから兒故に動く團扇哉
冬は梅夏は氷のむる聞き
風鈴の音はたえけり暑かな
寝るにして枕によれば時鳥
桃賣りや蚊には喰れぬ里の人
涼しさや富士を真向に一ツ家
奥深ふ隙見透くや竹婦人
親々の氣中も見ぬて師の降り
入梅はれをしかと知つたり川の澄
約束の新茶に起す 晝寝哉

朝顔の二葉なかめて新茶かな
拜んては見て廻りけり花御堂
風鈴の音を留めて見る色紙哉
露涼し芒にぬらす片鐘み
目の見へぬ親に自慢の青田かな
結ふ手に月かけこはし清水哉
暑き程なを動かす團扇かな
眞に落て脚の遠巻毛虫哉
咲といふ日か盛りなりけしの花
ものいへは唇太し夏の月
宗は蚊に取れて門の涼かな
た、空れた蚊は雷に轟り
音にのみ聞も涼しき氷店
宗々に桶の尻干五月晴
片町は裏を覗くや紙帳り
植濁る澄て田毎の月夜哉
降たかる空紙終晴れて暑かな
愛らしき姿の化けてけし坊主
涼風もなかる、四條川原かな
星飛んで咄し腰折る涼み哉
ちりしのも掃かて客まつ牡丹哉
代て遣る心も白き牡丹哉
晝顔や雨露よけて花盛り
問はれたる文字に絞るや汗の玉
青梅や盗んてはめる一ツ三ツ
見て來たと鹿頭もはめる青田かな

夕立や曇色のなき跡の空
曇る日も曇らぬ色や杜若
甲斐の山水室の脇の暑さかな
苗分けて秋待小田の服つ、み
手を押へ二階は客やはつ鯉
煙立つ 淺間は近し五月晴
蚊遣火を焚くやはらつ雨の音
育てかひあるなてしこの姿かな
豊年をはや賑はずや田植歌
海に足さけて船子の涼み哉
もつたりと朝日かたねて白牡丹
鳴かてこそ哀れに見ゆれ雨の鯉
澄切た水に味あり心太
森に入る朝三日月やはと、さす
熊た親にしらぬやふ釣る蚊帳かな
夏の夜の咄しをめるや鯉の聲
寝る連の出來て察られぬ晝寐かな
冷し過る程客待つや井戸の瓜
社士聞人のありとも知らて行々子
月澄て草の起立夏野哉
あふなきは見る人にあり蠅牛
裏門をか、くる拍子や蜀魂
涼しさや帆船に廻る橋の上
富士見ぬる方へ向けり納涼床
ゆふたちは何處か廣瀬の片にこり
四五軒に仕掛て分る 清水哉

月花に訪はれぬ里の水鶏かな
吹き崩す風のありたし雲の紫
足ぬらし手濡らし船の涼み哉
船着し涼しい月はありなから
うき草や流れなからも花盛り
快く不二見る梅雨の晴てより
白雲は高根に消てはと、さす
涼しさに寝るを忘れて眠りけり
卵の花やかのつと月の影くらく
青儼平する哉と思ひけり
蚊帳に換ふその身は末の手本かな
ふうりんの昔をうつ、に晝寝哉
蚊の 群や籠延す泊り船
裏波あるや夕日の雲の空
木のかげにあわひのこむや夏の月
乗掛の笠に若葉の平かな
灘中に帆一つもなし雲の峯
船人に水かしのるけり杜若
古郷の母の送りし裕かな
晝は風夜は月涼し磯の家
同じ橋二度通りけり夏の月
世の愛を離れて清し不二詣
海衣の單も重き雲の峯
一人呑む程つ、岩の清水哉
上下の古き匂ひや土用干
用拾ふりして出る猫や芥子畑け

買り袋を背負ふて渡る、夕立哉
月舍る程はは、あり若清水
身にまどふ厚もあもし夏の月
白雨の洗ふて清し松の軒
あさかをの世を笑ひ鹿底の松
五月雨もいとわす咲やかきつはた
岩叩く水の明るし木下閣
我が門としりつ過けり夏の月
子を寝せて蓋は仰に尻しけり
ゆゑ立や野牛の涎れ洗いあけ
葉櫻や心に春を懐きつ、
宮土まではまた屈かぬは梅の雨
高低を定め兼けり初蚊帳
我計来ると思ふや蚊のはしめ
塵取りの團扇も今は玉のこし
大名に生れぬ徳や腹汁
白雨に昏さ忘るひるね哉
縁の氣を問ふ持出す菖蒲の日
釣り外し蚊帳の大儀や二三日
敗柱や崩れて薄き今朝の月
水脚も水はしけなり雲の峯
はと、さす暗度聲の新しき
年々にされども絶へぬあやめ草
みのかさの用意は陸に田植哉
初旅や寝覺さひしき郭公
孫ゆゑには、も川邊に待り

内儀にも愛しられけり竹婦人
五月雨も降あくるれば待りけり
玉籠の内や床しき夏の月
瀧は裏見せし表にはと、さす
開きては戸さ、てはた子規
蚊に透て来たかど輪て閉れけり
鮮なれる間をさすけり母の足
取付た其氣はなさす蟬の殻
木かけ見て知らず進むや夏の旅
忍ぶ氣か葉うらに雨の蓋哉
里へ出て山の名問ふや閉古鳥
あつくともこれも季候のめぐり合
折角の客の寝入りてはと、さす
此坂を登る思案のどころてん
燈は邪魔にならぬと消して竹婦人
結ふ手に松も日も澄む清水哉
光り見てくらさにおつる蓋かり
蝶の糸で茶の手を休む牡丹哉
あつさをもしのひて居れや冬の内
水無月や一人におしき團扇井戸
鎌倉の青葉も澄ふてはつ松魚
城戸替へた工夫自慢や、納涼
聞てから尙さらば道人の損
船鉾や押分て行、人の涙
涼しさの月や、いづれ住事
涼しさを涼しうけにささけけり

昏にも有りそうな日や咲牡丹
静せたる子は女なり芥子の花
頭ふる角の浮雲なし牛の繩
子規開く夜は、竹の羽哉
四疊半行儀くすさぬ暑さ哉
はうふりや世に出る迄の浮き沈み
蝙蝠や弓、眼月の前後
夕立や箕に余るのさの瀧
釣た夜は早ふ寐て見る蚊帳哉
鵜遣ひの鶴に遣はる、餌買哉
蓮の香や物にませらぬ朝こ、ろ
夏瘦や糸を輪にして足九寸
涼しさや、いのつた雨の降り後
寝心を問、たし庵の涼かな
出語りに着る社村の暑さかな
照る日でも降る日でもなし白牡丹
夜は捨たる音のやさしき清水哉
橋へ来て露切る笛や夏の月
蟬はまた啼空明し夏の月
突出しの小杭浮雲し涼み塙所
眠なくや千脚に露の枯る時
二ツ目は嫁もうとふや田植うた
また替履るや芥子のうつむひて
厚ふ差る親の譲りや薄羽織
三ヶ月を啼落しけり時鳥
炎天は如何に鍛冶屋の向ふつち

あめたふりしてかへしけり扇の宇
鴉使も尻れは苦薩祈りけり
さ、涙となるや青田の餘り風
啼さうな松原過てはと、さす
吹く風に見るかけもなし羽抜鳥
身を焦す起りや宇治の螢狩
いなつまに追はれて走る白帆かな
貴昏の煙もちらぬ暑かな
朝起のこ、ろ糞ふ若葉かな
寐た親に涼風の戸を明にけり
空にはや瀬田の橋なり夕涼み
世はもの、流行かはれど牡丹哉
手の鳴るは奥か二階や背籠
牡丹見て鏡蓋みがく女かな
開くよりた、む音よき扇かな
苗代もさすかに廣し米處
前代や引さき紙の鳥おとし
子を寐せて出て涼みけり蚊屋の外
語らすと思へど語る暑哉
打水に誘引て出る嵐かな
板垣に小使てゑかく柳かな
笠とれば夕日の近し田植かな
灯を取た風はめて居る涼みかな
俥からす圃のどまるや釋迦如來
曙の三日月低くし蓮の花
玉垣も見へて興ある若葉かな

いた、いて影踏む月の若葉哉
はと、さす雙はひとり月を暑め
短夜と親に朝寝を過めけり
迷て来た蓋に親の寐顔哉
龍の根は雲に隠れて杜宇
影に添ふ親もあらふに鍋祭り
郭公封切りかけし母の文
蟬鳴や身につくよふな水の味
落ちそうな岩をか、きて藤の花
石を割る火の光りけり木下閣
釣上し魚の光りや夏の月
顔に日のさすて起す晝寝哉
呑かけて家の名を聞く清水哉
月の出て見失ひけり飛はたる
我手にて我身を打てかたき蚊
笑ふれば梅雨の香のする日和かな
涼むにも寝るにも誘ふ隣哉
早乙女や百萬石を指の先
客一人来れは一ト花へる牡丹
五月雨や結ひ上たる釣瓶繩
雨近き空を頼みや種あるし
山を今放る、月や時鳥
藍の香も思なり初拾
月景は圃に見へて時鳥
ちどの間も清水にはとく脚半哉
無造作にして奇麗なり夏座敷

今の事今忘れけりほど、さす
螢み苦は余處くし蓮の主
手から手にうつすに暗き蓋哉
若竹やさす月影もまた若き
手の平振て火を借る田植哉
開はつを旅の勢れや時鳥
卯の花を外れて暗の深さ哉
夕立の雲を見て巻むしろかな
今頃は猫の世の中夏季隨意
四五粒の雨にも云ふ暑かな
落たま、そし、ぬ貝や枝蛙
日に濡れて月に乾くや汗拭
人はなし蓋は同じ物なから
母衣蚊屋を覗く笑顔や旅歸り
鳥さへも遊て居れぬ集くみ哉
切る迄の木蔭を袖の晝寐哉
潮音も涼しき敷やうら二階
親の酒買ふてそれから蚊遣哉
一間ッ、涼しうしたり夕掃除
なく方へ行も旅なり關古鳥
樂しさや螢相手の文机
虫啼や油引たる戸のはしり
泉も啼や若葉の夕月夜
我汗も荷になる程の暑さ哉
よき花は水の深みや杜若
つまむ程鳥居の見ゆる茂り哉

葵そめの牡丹に詩や化粧砂
汲に行く素足のかるし清水哉
水乞へは隣の水水おしわけり
天竺は麓の方歎雲の峯
有たけの聲も盡てや蟬の聲
羽織脱うしるに妻の團扇かな
水鶏鳴夜のもてなしか草に月
實になりて主の知れたる野梅哉
呼聲も涼しそふなり水賣
一重も親の慈と七重八重
軒つかぬ身振りも安し夏衣
此外にはつす戸もなし暑さ哉
鳴て来た音より少し火取むし
寐ころんた儘に忘る、團扇哉
夕立や颯のかたまる馬の腹
蒸し暑しけふも雨にはならぬ雲
拾られて拾ふ命や火取虫
跡口に昔の香のする清水哉
夏菊や假寝に結ふ盡の
五月雨や門に出兼る夕煙り
口紅の喰ふて落たる西瓜哉
ほと、さす夜に陰れなき高音哉
鬼てふははんの名はかり百合の花
照映る影や遙かに飛ぶ益
高飛の過て吹る、益かな
雲透て又降雨や栗の花

那那の本を枕に登樓哉
颯追た孫にうたれてにか笑
傘の裏道ふ雨の益哉
ふところに見せた儘なり夏羽織
梅雨晴れや葉越しの月のぬれ色に
間に往て道音高し火取虫
いた、さの白さは富士の夜只鳥
馬出して咄す置座や夕涼み
夏計り影あるものと思ひけり
とらへも動かぬ雲や蟬時雨
雲影の走れば戦く青田哉
石菖や昔を讀みさして洗ふ顔
燒砂のまた夜にあるや夏の月
未だ風に馴れぬ戦さや今年竹
朝かはや今朝一輪は垣の外
口そ、く程の水あり夏木立
す、しさや木の間に動く月の影
瓜畑や影かゝ雲の低う行
なき聲であつさしらすや力輝
主恩のあつさをあふく團扇哉
佛には成るも思へぬ鶴匠哉
笠取りにもどの清水へ戻りけり
親の機嫌顔見て暑さ忘れけり
茂世経し檜皮の軒を昔の花
吞てから山を見上る清水哉
青冷す鉢や葱の動く影

寝覺とは能き里の名や時鳥
ちつた花組立て見る牡丹哉
夕顔や秋を隣りの一重垣
常に見ち垣根の外上花卯月
短夜や筆に含みし残り墨
まつた程空に置たき花火哉
山崎の噂してとく粽哉
なくさみの畑けにうれし初菰子
鳥たつて見付出しけり昔清水
戸口まで出て留守守や飛益
なく益光る蛙や夏の夜半
干梅や一渡見ぬ間に小しわか
日のめくみ知りつ、はやく暑さ哉
願かせた益は船●こられけり
文書寝する言譯は言ひ留守寐る日
炎天や火を吹きそらな鬼かわら
川狩の戻りや母へ送る鯉
日と雨を笠にいた、く田植哉
頼母しき色や早苗の夕けしき
灌佛や庫裡にも人の笑い聲
姫百合や夜露を花の朝化粧
汲水に雲影動く若葉哉
花と見し露や青田の朝はらけ
小社の水なき池や杜若
雲の峯露見ぬ花の盛り哉
夏草や健氣付たる馬の聲

煙り立つ無双の峯や夏の雪
夕顔や湯上りらしき束ね髪
髪かけて石の暖みや夕涼み
蚊の聲や床の蓐の活古し
暗れた空見せぬ雲やほと、さす
益追ふ子を追ひ行くや親心
雲顔や起た人無き昔請小家
僧い蚊もそつと押へる親の慈悲
親ならはこそ蚊にうた、ねを叱免
ふき送る風から濡る、夕立哉
白雲の動かす消ゆる暑哉
子に留守居させて氣になる牡丹哉
炎天や草に吹込む馬の息
明安き夜に似ぬ闇の深さ哉
木を植へる小庭もなくて初忍
塔一つ高し若葉の真中に
玉苗や投た儘なる朝景色
五月雨や置處なき盤俵
替かふて植殖しけり菊の苗
朝顔の花に見飽はなかりけり
朝顔に起て怠る用事かな
下駄さけて戻るや池の杜若
手を延し團扇に遠き添乳哉
赤一つわりたき處の清水哉
いつとなく身を持つつす暑哉
子子や世のすきはしも浮き沈み

借りた恩すくに忘る、夕立傘
礎となるや産子の初職
明けてある夜を夢にして郭公
灯の動く度に運の香残りけり
短夜の余りを運の枕かな
まげよとは言へぬ勢や初松魚
落ちてある橋は名のみか杜若
月に手を突く迄植る門田哉
朝貞や鏡にうつる咲處
底深ふ水の音聞く茂り哉
竹植て待たはや風と月の影
藤咲や眠り覺しの庭掃除
余所斗り降つて彌増暑さ哉
葉となりて風の嬉しき櫻哉
しつほりと濡色見せる若葉哉
鴨川や降りて湧たる納涼酒
す直さに風も音なし今年竹
一步つ、来る風す、し瀧の道
鯉突く男も蚤に翳りけり
花散りて身わあか裸暑さかな
庭戸や手酒の宴も半夏生
風より灯を見て涼し川の船
雲を吐く峯のあたりや時鳥
雲は蚊の住草刈て蚊遣哉
卯の花や垣根に犬のく、り穴
子賢は此頃見ゆる田植かな

雨の降る日も憎からず杜若
昔の花咲や名のある傳ひ石
見處は雨にあるなり杜若
尋さを深める宮の若葉哉
足元によき水音や藤の花
更渡る夜の静さや天の川
年々に知る人出来て菊の苗
珍らしや猫も川原で夕納涼
時鳥宿直の眠り覺しけり
夕立や落合川の片にこり
午時花や瀧へ往來の人計
益るかり心に聞はなさまものを
雪ふりの親思ふての綿作り
其二、に寐た夜もあるや門す、み
不二高ふなりし思ひや早月晴
孝行の遣はかしこき編匠哉
薬湯の門句ひけり五月雨
翌日京へ行く土産なり初螢
魁のうしろに見ゆる田植哉
文讀し名は輝けり飛ぶ益
摘あとの淋しき門どの茶の木哉
葉も花も雨まつふりや夏の菊
待つ風も手元に招く團扇哉
さす月の影も重たし今年竹
化粧する娘覗くや夏の月
湧出たる雲のさまなり雲の峯

深はいて小坂登るや藤の花
 鴨川や今日の暑を忘れけり
 涼しさや柳は風の生れ處
 また宵と思ふ納涼の夜明かな
 人聲の朝から暑し野菜市
 座敷迄て降たよふなり五月雨
 五月雨の降りし気色や四季の雨
 汚すなど幣立て、やる清水哉
 奢らねは心も涼ししふ團扇
 衣更て走りくらする小供哉
 傾けは富士も隠る、日傘かな
 大助御社のサビ奥深き茂り哉
 夕立や雲間に月の見へなから
 夜中も小暗く見わた若楓
 忍ふ夜の螢大さう思ひけり
 土用干や門に立たる金屏風
 宮涼し日は葉櫻の踊りかけ
 若下に置けはまた云ふ忍哉
 虫干や一人眼の書物よみ
 ちさき見は色に似合ぬ茄子の針
 夕立や降りて團扇も一休
 此の上の開きよをなき牡丹哉
 足る事を知る草の戸や蚊帳の月
 頃まつて嫁の咄しも牡丹哉
 乳もらさの起しかねたる晝寐かな
 朝貝の花に見とれて日の高し

晝の香を拂ふて涼し竹の月
 咲残る花や卯月のかくれ里
 時鳥聞くと夜道の一人旅
 鍋祭奇麗な貞の再れけり
 曲るましものは心そ今年竹
 置て行く聲は月なり時鳥
 紫陽花や人の止にも七小町
 呼にやるよりも行ふや夏の月
 短夜や親を思ひの立て徳
 末廣によくつかねたる標哉
 さてもまたしにくし夏の風邪かな
 母ありと先へ戻るや夕す、み
 もろて来て戸口にあまる牡丹哉
 さおとめや干々に心を染毒
 うつむいて居眠る姫や百合の花
 嫁に行く門はかたむく日傘哉
 夏瘦と言ふて母への答へかな
 六日にも賣れて戻りぬ花富浦
 帷子やひき出して行土産物
 海千里はてはあるなり雲の峯
 葉に覗く人や牡丹の花盛り
 待つ人のたよりに更す涼かな
 鵜遣や命と繋く罪の繩
 川邊りは草から暮る、盛哉
 飲水は増して不自由や五月雨
 葉櫻や鳥ので、る拾うし

夏の月寝るを苦くして別れけり
 麥秋や鼻もこさのむ茶碗酒
 聞く人も息をこらすや一ツ蚊屋
 傘に鐘の音聴ひ卯月かな
 孫の手で力を添たうちわ哉
 學はさる人は斯くもや晝盛
 なてしこや泣く子も笑ます親心
 夜は花のなから明ける速かな
 花の世を着かへて輕き拾かな
 立寄は太木の元に風涼し
 湯鏡を腰にさけ、りあやめ賣
 順風を荷ふて行やうちわ賣
 秋ふ寝て見心廣し麩の月
 賞乳の血に啼く母や不如歸
 夕立や今迄そこに水けんか
 男なら梅を押して見ん涼み船
 朝かけやひかさを杖に昇り坂
 裸てもまた脱足らぬ岩哉
 子の氣附聞も親なり蓋かり
 枕蚊屋ツツト掛けたる母の愛
 さのはりや田植せぬ子も据る膳
 親の無事文に知る夜時鳥
 床下の掃除もあつさ君の保護
 葉櫻や出茶屋の跡にくつれ曲突
 花嫁に植させて見る棚出かな
 遠慮する言葉にぬるむ氷水

見る度に思ふ娘や五月花
 田も山もこの子の物よ初帳
 我儘の育ちは見へす今年竹
 漁舟も聞まされけり郭公
 涼しさを掛けて見せけり青簾
 夕立や傘借る人にかへす人
 琴ややはこりに暮れて月明り
 水もて涼しさをよふ小庭かな
 月落て松靜かなり時鳥
 五月雨に片端をすます岩しみす
 涼さや浮根の松に旅まくら
 親の徳か、やく門や土用干
 居寝やや言われて亦も紐の音
 寝るには頼むへき世なり飛はたる
 留守へ来た留守を訪ひけり夏の月
 時鳥聞そこなうて寐たり危
 月落せば雲も動かぬ雲の峯
 草の戸やたしなま月に鴨水鶏
 かたけてもさけても長し藤の花
 孫に杖持せて母の田植哉
 天も地も我が者として涼みけり
 母の出て子に指南する初田植
 寝もする入梅に入口やうさの音
 寝むたさを匂ひや嫁の初ちまき
 探切の枕にさめる晝寝かな
 夏露もはしるやうなり夏氷

夕立は隣村なり薫る風
 余所の子を借て娘の顔涼み
 水うちて月待庭の夕す、み
 歪にこぼれて涼し夏の月
 須原風をもふけけけふも沖暗
 箱入りの娘を見たり夕す、み
 宿とれば早なき出す蛙哉
 夕納涼月からせまき遊かな
 母に禮いうて若初める拾哉
 寝る事を苦にして戻る涼かな
 悪氣ある人とは見へすうな釣
 火は虫に取れた儘に寐入りけり
 踏て行人はまれなり蟻の道
 青空をつさぬく蟬の高音哉
 孝行の道一ト筋や夏からす
 寐まき着や旭手にどり美仁草
 朝にしを帯とする賀のふしの山
 こんな日かなければならぬ暑哉
 新竹や親にもまさる丈高さ
 米飯の虫はさ出すや五月晴
 いかつちの音に崩れつ雲の峯
 極樂の余り風なり湯揚りに
 早しとて竿上げさせぬ釣の見人
 三摩目は儲かや夜半の時鳥
 姫百合や二こ、ろなき花姿
 風筋の見へて音なき青田哉

夏よりもひときはあつし親の思
 嬉しさを紙に包むや初盛
 夕立や蜘蛛の道込む獅子の口
 器られし方が重たき日傘
 涼びにも親のわんまや風のちん
 白牡丹蛾も日暮をはすれけり
 青梅や呵た子にも取て遊る
 ひやめしに茶をかけたから盛哉
 青梅をもくや兒供は皆からす
 様先へ咄し持出す蚊遣り哉
 珍らしやはつ花よりも遅さくら
 橋落て道かわりたる夏野哉
 春過ぎて蟬の鳴音のあつさかな
 若竹にもれて見へけり隣の火
 しふ團扇六分は客を扇きけり
 初蟬や壁土匂ふ雨あかり
 憂き小袖笑ふ小袖や土用干
 今朝からの暑をわする、夕立哉
 月も日も届かぬ色や昔の花
 荒磯の浪もたるむや雲の峯
 持て行下り迎の拾かな
 花に杖つかせて掃くはたに哉
 月一とつ鳴たはたししか時鳥
 のみ二つ両手でもなし押へけり
 帷子や客は二階と座の替る
 夕立や親の言葉にむらの傘

富士に名の濡れ残りけり鹿か雨
去年より何も足したる田植哉
た、まれる風は風のつはみ哉
子のゆめをそつと釣込蚊帳哉
取みたし置くも馳走のうちは哉
一竿は四季混雑や土用干
草取や歌てせい出す丁官同士
涼しさやかそへても見る御神燈
夢もさそ小さかるうそ枕蚊帳
家客にあつさ忘れの團扇哉
栗柳や月から戻る樹の姿
峯半分降り残したる夕立かな
水鳥の小首ひねるや浪の飲
雲裏に月の照る夜や時鳥
賤の女か狂やり立て益かり
雀子や追わるはつみに舞初る
短か夜にふくれぬ月の歩行かな
寐通して起れた時から暑さ哉
米安と夕立ふれる在所かな
別に打つ蚊屋のつりてや蜘蛛の宿
敷の出来は繩は陣引日暮哉
さ、波や月かけはよし風涼し
水無月や水際遠きはね釣瓶
五月雨や處々に瀧おつる
土用干や今の主も道具好
花野にもなるへさ處を御清水

涼しさや海一はいに昇る月
沖つ波あらふて消し富士の色
雲の峯をよく草から崩れけり
降り晴てをけふ見へけり夏の月
晴切て月に冷つし土用かな
さして来し野邊も冷しや夏の月
一つ来て船のかた向蟹哉
眞清水や雪以来の口障り
初つ男子説て門の鯉登り
立島に眼の行空や松の花
猿曳はさるも一所に衣かへ
小流れにどちよのおよぐ暑さ哉
尻早に替るしよさや水店
汲内に暑さわする、清水哉
蝙蝠や入り残りたる二日月
さくからにこゝろも涼し波の音
五月女かそつと股げし残る月
不斷見る峯にはあらず雲の峯
田を見ては不足はいへぬ暑さ哉
田に水を引て戻りてひる寐哉
まこに手を引かれて老の笠狩
はれ際の見へて降り来る夏の雨
寐返れば旭の差してある蚊帳かな
雲に手の届く山路や時鳥
曙つけ立ち開けてはつかし窓の月
夕立や峯降り分て片月夜

三日月の影見て嬉し草月哉
麻の葉は老の差圖や鮮の味
石山に何を根にして開くつ、さ
提灯もいらの夜道や夏の月
刺灯や暗間を待ちて夫婦連れ
待ち詔てこかる、袖の笠哉
又た行て見ても暑さや綱の宿
蚤擲き出した座敷の廣さかな
松風と音のかわりし帳り哉
置て退くやうに手早き田植哉
静けさや谷底く、る水の音
一聲になりしつめ免時鳥
野の闇を静にしたる螢かな
それ程に逃て啼かすに郭公
雷りのなかつたちするも蚊屋内
くさる魚提て水のむあつさかな
廣き葉に二つは見ぬす連の露
神請て忘れて居や吞時
かたびらや親も子もきて神参り
豊年の始成けり苗代田
曲り江の橋かけかひて夕靄涼
たれ込て瀧の腰折る新樹哉
月落て咄の見ぬ納涼かな
寐轉ひて見たり起たり蚊屋の月
友達と勝にして行 益狩
こはしたる水はもとらす筑摩鍋

笠となる親の心や土用入
泥中の遊見て直る心かな
暑き日や少しは狂ふ歌の節
散るのみに咲たやうなりけしの花
拂ふ手に却てとまる蜘蛛の智慧
園を揺ふいとあわれなり飛 益
清水井や誰か施しの竹つるへ
突あたるよふに來て飛ぶつはめ哉
白雲にはなつき合す清水哉
別れても又見かひすや百合花
時鳥鳴や庭木はかしけや木
神音に涼ふ向ふ瓢 哉
子を寝せて家は留主なり夏の月
雀子や肌にはひやくく蟬時雨
せ、なきの泥には染まし蓮の花
添寝した浮名は立す竹婦人
荒浪も涼しき者よ夏座敷
青梅や投れは笑ふはたの上
牛の脊に懸着せけり雲の峯
五月雨や茶に汲水も上濁り
ま、親の汗を吹取る扇哉
燈し火に店をまかして涼み益
雲井まで耳聴かす時鳥
口にまで這入るやうなり入梅の雲
草むらに火打出しけり益かな
二階から手た、ひて見る日傘哉

岡手に清水を酌みて親の前
藤の花流つさせの團田川
松の庭環浴かけし藤の花
涼しさや須摩も晴石も皆一ト限
動かせは風の生る、團扇哉
涼しさや枕に近き波の音
清水ある木陰に高し捨わらし
孫の留主貯へおけぬ夏の餅
後の世の暗らさはしらす鶴の符
夏瘦の片手に帯の残り
師の恩の硯に淨ふ雲の峯
子を寝せてひまやる籠の益哉
涼しさを疊みこめたる扇哉
さしかけて門まで送る日傘かな
夕立や庭はく程の能さしめり
す、しさを橋の上行下駄の音
不自由な里は寐て聞く時鳥
不二の山日傘一つに陰れけり
傘月時かわく間もなし旅衣
時鳥船はひと棹なかれけり
手を出していた、く程や夏の雨
短夜や赤と咄しに明けやすさ
雪陰の屋根かせうふのふさ仕舞
轉寐の夢破りけり郭公
祖父祖母の咄しをわく團扇かな
葛水や御輿へ投るひねり錢

夏羽織紺屋の名まで問れけり
苦と樂の葉は蚊帳の一重かな
摘み残す葉の葉や蝸牛
益火の光り増けり雨上り
晝寐起さする親に汲み水
風表親を廻して涼みけり
六月や水も一つの料理種
深切な枕らにさめる晝寐哉
髪の毛も牡丹も白き長者哉
價よりよき風の出るし團扇
寐た象を動かす益の力かな
夕立やつふやいて吸ひ濁り井戸
夕立やあら葉文はけふの晴
親の團扇拂て拂ふ晝寐かな
寄る皆響さ断しの涼み哉
蚤一つ言われぬ處で押へけり
暑き日もす、り吞けり茶の出花
奇麗さに進む人なし夏座敷
夕涼しあける四會に人のよる
雪消ねて白衣にしるし御嶽山
口々を明けて入れけり夏の風
寐た親へ涼風つけて戻りけり
短夜に困る断しの長さ哉
葉さくらや遊ふ月日の立易き
火を消せば月も這入ぬ蚊帳の中
親の汗並へて嬉し土用干

眞心の底もぬる、哉虎か雨
千金の雨降る里や綿の花
取次をまつ間に遣ふ扇かな
湯上りや青葉すたれに洩る、月
牛の耳動かす鯛の力哉
鯛を追ふ手をうこかして野哉
寐た人を見て寝なをすや雲の峯
水音を連に待けり郭公
往かぬ氣て見てる暑上榊山
葉柳の蔭にくらひや眼鏡橋
親に苦を重て重し筑摩鍋
入梅や一ト間は白湯のたきるおと
家の蚊に逃けて出て蚊に喰れけり
入梅時や出して遣りたき籠の鳥
御内義も氣遣ふ風俗や初裕
針に氣のつかぬ欲目やはらの花
寝心や背田の雨を聞なから
夢てなし二聲迄もほと、さす
蟬鳴や眞晝は濁る最合井戸
葛水や吉野のちりを指の先さ
脊延して見るや汐干の賑やかさ
たま／＼の空に座もなし土用干
膝引けて一度に揃う扇かな
光り出て月に陰る、螢かな
野良りの親の汗干 團扇哉
しはらくは柳もゆれす雲の器

追かけて團扇渡すや母の籠
明安き夜も黒棚のはこりかな
手を打は鹿兒出て来る社かな
温泉一日止て見に行沙干哉
岸傳わおしの走るや青嵐し
口さりと皇國の花を香に走る
蠅打ちて罪無き孫を起しけり
卯の花や軽うなつたる旅衣
松の間も竹の間もあり夏座敷
心ある人や清水に捨柄杓
夜水汲女の輝やなつの月
其所此所の木立に暮て飛笠
蚤に目の覺て朝茶となりけり
遠く降る雨に追る、夏野かな
清水井に寄て醒けり旅の醉
膝節のかく付坂や蟬時雨
掃た上はかせる夏の座敷かな
若竹に百年隔る小鳥哉
見らる、もしらぬ娘や夕涼
朝貞に又手間取るや水貨ひ
見たよりも手の備さの茶摘哉
清水井に誰か忘れし竹の杖
消やすう見ぬ根太や雲の峯
運喚や手なれぬ船の神遣ひ
植揚てよい月のさす門出かな
明易き夜やまた高し朝の月

掴まして取た顔する益哉
船からも揚る勝手や夏座敷
白いのは尤らしき扇かな
汗の手を引た跡ある柱かな
六月のひろみ物なり雨一夜
梅入時や蝶に成り行垣の虫
外様も出て涼しかる給仕哉
水を見るような心地や若葉山
五月雨や子を持つて親のをん
隣から寐るを誘ふや夕涼み
煽かせてくらせと夏を瘦にけり
乳貸ひに起て又焚く蚊遣哉
涼しさに後ろ向きたる机かな
湖からも湧出るやうそ梅の雲
葉を打音の惜さよほと、さす
濡色はもの言そらと燕子花
初嫁の手さわ見せけり初田植
抱ぬ夜は懐る淋し竹婦人
とよ見ても借着のよふそ初裕
燈を消して文讀て見る螢かな
柚か子や木を引親へ遊園扇
散るものと兼てしれども芥子の花
五月雨やみの若た儘の客扱
泥に出た物とは見へす白蓮
出さらいは濡ても戻りぬ夏の雨
寝後れて一人開けり時鳥

我里は隠して蓮の盛りかな
薄くともはしたき月の雨涼船
涼しさや富士と三保とも右左り
鳥居まで懐にして夏羽織
一屏に幾夜待たせて子規
往けは先戻れば跡や湖右鳥
はつたいや窓から呼びぬ母の聲
竹の子や伸してをけぬ生處
借て来た扱ひふりや夏羽織
帆を揚て船も動かす雲の峯
八幡時や主人は何時か
舟除したような心地や夏の雨
濡て来て夕立統る軒端哉
一間つ、思ひ／＼に晝寐かな
更るとも断しは長し納涼臺
寝櫻只の木にして茂りかな
みしか夜や朝迄か、る若一番
花の後なき曙や蓮見船
一ト筋に待夜は鳴す時鳥
捨も涼し三保と富士とも扇哉
其處までは笠の代りを團扇かな
一輪に庭の静まる牡丹かな
困難の地震咄しや門涼み
庭巻や寒より冷へる井戸の水
語らすと思ひと語る暑哉
船すしも漬おく家や初盤

牡丹提て風流に渡り、歩みかな
木の戸や水鴨人見てひと走り
木の湖曲る月影涼し夕涼み
五月雨や客は若の連西の友
御簾捲れて扇白ふ今宵かな
我よりも脊の影高し夏の月
草臥て宿かゝ頭や藤の花
ねた人を起せば啼かす時鳥
花分て見れば日のさす牡丹哉
水打て涼しき様なる夜かな
濡れぬ出たやうな月なり若葉山
夕顔に養ふ水の眼 覺哉
晴る、とて降るとてうたふ田植哉
米櫃の底はた、けと初盤魚
水に月動けは蓮の匂けり
親の手を借りて着初る給哉
譲り合ふて真中寝る蚊帳哉
花に葉の行装備わる牡丹哉
けさからの袴はつして納涼けり
流れよし茶よし名所は宇治と淀
葉を潜り匂ひ潜りて蓮見船
ふんどしは掻く事にして裸麥
白蓮の露も白き月夜哉
詣らひを其脇限りの牡丹かな
賭の若に勝口見えて團扇哉
基にまけてあくひしに立つ暑かな

健問へは奴を答へる暑さ哉
五月雨や一年中の雨が降る
啼に来たた鷺追ふて夏書哉
くもの巢にかゝると見ぬす蟬の聲
馬洗ふうしに髪か蚊遣かな
筈はねて月も入れけり郭公
濁しても底から澄むや湧清水
葉のすれる音に蓮の香届さけり
角落ておさなき鹿と見へにけり
夕立の傘に客あり渡し船
夕立の中はさ、さすは足哉
初轍り老ひの揃ひや九十九髪
待人の廻りて寒し初裕
見た事もなくて馴染や富士の山
夏瘦やいさめられたの薄化粧
海鳴の松に届くや青嵐
五月雨やしめり勝なる貸蒲團
覗かれて寝癖恥かし蚊屋の月
酔て寝た親に向けたる蚊遣哉
不足なき住居や門トに金銀花
忠孝は萬里の端の石碑哉
鶴龜も延る齡や初轍り
附て来た鯛は別なり送り膳
夏山や心やしなう水の音
若竹に月の流る、夜明哉
白露にともしひ移る青田哉

野に見ぬし風の屈かぬ唇かな
拵へた水音涼し月の庭
次食住不足なき身も蚊遣り哉
なの花や只一面の別世界
六月や日本に白き山ひとつ
葉櫻やなつかし顔か眼にかゝる
船の酔滞水運来て忘れけり
孫の手を借りて遊ふや洗脚扇
一口は水とも呑めぬ清水哉
水底に花の姿見る蓮かな
大夏をたゝみ込たる扇哉
なにとなく後ろ向かれず竹婦人
戻り羽もわすれた鳥や和歌の浦
聲はかり聞きしは空か時鳥
時鳥聲折り返す風もかな
見心のよき朝風や蓮の花
郭公あたり山は見へねども
重荷負ふ人のもて来る暑哉
踏込のは足に味ある清水哉
おもそうにゆれて威のある牡丹哉
淋しさをしらせにたゝく團扇哉
水賣りの来て起しけり晝寝哉
折り入た咄の枝に扇かな
玉たれをくゝりし文やはとゝさす
一ト夜出た夜から辭付涼かな
人の来て時計のそくや五月雨

寝せて置く子の顔向ひて蚊遣哉
取巻て居るや唇さの氷店
畑の芥子盗て蝶に追われけり
咄し人の殖へて場せく涼み哉
親の手を引いてもとすや夕す、み
涼風の吹て咄に来たりけり
菅笠に花を添へたき田植かな
君ならて待夜の御や時鳥
五月雨や船も出そらな庭の面
夏の月見るや氣やすき門の客
夕月の村明りして暗く水鶏
池水もかる、心地や蟬の聲
盛夏月にかくれて歩行さけり
涼風や雲間を横に走る月
川ふねやよみ茶よ酒よ月夜
竹の子やわたりはつれて薄の中
ほと、さす灯にさわる客の袖
早乙女や唄の上手は植上手
あゝ、樂や蓮に夏を知らぬ鹿
蚊遣火に聲を登らぬ咄し哉
目を閉て心に聞くや郭公
暮られて二度来る孫や初拾
芥子切や贈り使いの人撰み
脚鳴や風の根包む山の雲
けふも又和歌の浦邊にかゝり船
一降もまたふるめかすはとゝ、さす

霞撫る柳を翳てす、みかな
細う出て人にあかれぬ清水哉
兒は膝に乳を含ませてす、み哉
兒の寝顔覗てはつす蚊帳哉
卵の花や蚊を小庭の別座敷
ほと、さすさくらには袖に代れけり
結ふ時松に風ある清水哉
戴て着るや裕も母の恩
青梅と聞て乾きの止みにけり
麥秋や親を拜する開き畑
掛香や衣箱にさわる風の文
二の聲は枕はなれて時鳥
葉に添ふ下替延けり杜若
追れても打れても又飯の鯛
夏まつりまはり燈籠に夜を明し
袖みに夜も更行て蕨狩り
逆もなら花に來て啼け郭公
牡丹見に行や加瀬にも願ひ事
椽先に夏は來にけり一重芥子
家に添ふ地所をひろめて田植哉
粟時きの畑け支度や時鳥
アノ聞けと云れて床し郭公
晝顔や砂は焼ても花の艶
珍客の置處なき暑哉
園基の友来て打起す晝寝哉
井蓋や底にもそれと影一つ

青麥や雨を待乳の夕曇り
舞ゆるも崩つるも早し雲の峯
さなほりやもんでやりたし親の腰
伯梁の家と見る哉粟の花
扇見て座敷は京の咄哉
候は早過る盛りや芥子の花
涼しさの此上もなし塵脚し
水入れて筒の居りし牡丹かな
八景を寢覺に三井の遠目鏡
風誘ふ蒲子の空や飛騨
水つる、風やとりたし夕涼み
餘の色もなく見まかふ杜若
飯焚けは蚊遣りにもなる山家哉
帷子や敷無き耻々眼に立す
座に付ぬ先きに眼の行牡丹哉
山を巻く雲より出たり不如歸
下戸獨り別座に退て扇かな
十日程海見ぬ旅や閑古鳥
涼しさをよき基に勝て肱枕
水草に生れた花飛登哉
若竹やこぼる、程の露を盛る
母の夢見たて笑ふか晝寝の子
夕立に水の喧嘩も流れけり
雨の日も立たき孫の機かな
手にさわる物を晝寝の枕かな
招き合ふ川を境のす、みかな

大御代は長き根さしの舊藩哉
朝寝して朝から暑し蟬の聲
ちと借てかふりて見たし田植笠
待雨は山斗なる暑かな
夕立や茶山子の笠を借て行
老てきて黄鳥なくや神し山
寂た親をあをひては焚く蚊遣り哉
親寐せて枕をあふく暑かな
涼風にのみ打渡る青田哉
七轉ひ八起に太る水瓜かな
鯛鮓や軒の燈籠もつけはしめ
五月雨や水有なから貫ひ水
月の門隙てなくや郭公
た、む風片袖通す日傘哉
待まつて夢とはなりぬ郭公
撫子や照る日のかけに花の艶
寐て、ろや風に折々動く蚊屋
池に來て二つととなりし螢かな
降らぬ日も平持ちけり今年竹
天津日の御教八瀬の田植哉
笑若れば起くる鵜や籠の中
船へ出て急流すや隅田川
星もなき闇にあやあり螢哉
灯取虫追ふ手に卵はなかりけり
蟬啼やそれ聞て寝てそれ覚
月晴せ、聲も涼しや時鳥

川狩や孝行な子の早良り
癖止めてはれかまじさに寝ぬ夜哉
池に出た樹に大胆や蠅牛
卵の花や櫻のあとの朝はらけり
打掃へた鯛に來て鯛たかりけり
夕立や洗ひ出したる松の月
す、しさを身にしみくゝと親の恩
雲の峯不二を低めて聳へけり
負て來て親涼ませる河邊哉
ち、めたりのへたり浪の月涼し
見かけより勇怯なりけり蠅牛
刈草の中を出て來る螢哉
口の汗を月に干たる涼み哉
さみたれの下に開ある柳かな
船へ出て暑さ流すや隅田川
傘月開入けいもたゝ鐘はかり
年積て錦重ねた親の恩
寐る迄にして更しけり納涼たい
撃する槐の月や明易し
糸柳に花と亂る、蓋かな
符や無理やりに仲岩はさみ
一降に風情盡すや郭公
時鳥鳴く一聲や明けのそら
添乳してあはく團扇や親の慈悲
元の座に直りて響る牡丹かな
一里來て脚の重さや蟬の聲

野に見ゆし風の届かぬ暑かな
 拵へた水音涼し月の庭
 次食住不足なき身も飲遣り哉
 なの花や只一面の別世界
 六月や日本に白き山ひとつ
 葉櫻やなつかし顔か眼にかゝる
 船の酔清水迄来て忘れけり
 孫の手を借りて遣ふや酒盃扇
 一口は水とも呑めぬ清水哉
 水底に花の裏見る遠かな
 大夏をた、み込たる扇哉
 なにとなく後ろ向かれす竹婦人
 尻り羽もわすれた鳥や和歌の浦
 聲はかり聞さしは空か時鳥
 時鳥聲折り返す風もかな
 見心のよき朝風や蓮の花
 郭公あたり山は見へねども
 重荷負ふ人のもて来る暑哉
 踏込のは足に味ある清水哉
 おもそうにゆれて威のある牡丹哉
 淋しさをしらせにた、く扇扇哉
 水賣りの来て起しけり雲霞哉
 折り入た咄の枝に扇かな
 玉たれをく、りし文やはと、さす
 一ト夜出た夜から辨付涼かな
 人の来て時計のそくや五月雨

寝せて置く子の顔向ひて蚊遣哉
 取巻て居るや暑さの氷店
 如の芥子盗て蟻に追われけり
 咄し人の殖へて揚のせし涼み哉
 親の手を引いてもとすや夕す、み
 涼風の吹て咄に來たりけり
 菅笠に花を添へたき田植かな
 君ならて待夜の御や時鳥
 五月雨や船も此そらな庭の面
 夏の月見るや氣やすき門の客
 夕月の村明りして嘯く水鶏
 池水もかる、心地や蟬の聲
 菘賣月にかくれて歩行さけり
 涼風や雲間を横に走る月
 川ふねやよみ茶よい酒よい月夜
 竹の子やわたりはつれて溝の中
 はと、さす灯にさわる容の袖
 早乙女や唄の上手は植上手
 あ、樂や蓮に夏を知らぬ庵
 蚊遣火に降わ登らぬ咄し哉
 目を閉て心に聞くと郭公
 尋られて二度来る孫や初拾
 芥子切や贈り使いの人撰み
 脚鳴や風の根包む山の雲
 けふも又和歌の浦邊にかゝり船
 一降もまたふるめかすはと、さす

續撫る柳を器てす、みかな
 細ら出て人にあかれぬ清水哉
 見は膝に乳を含ませてす、み哉
 兒の寝顔覗てはつす蚊帳哉
 卵の花や蚊を小庭の別座敷
 はと、さすさくらには袖に代れけり
 結ふ時松に風ある清水哉
 戴て着るや袴も母の恩
 背梅と聞て乾きの止みにけり
 麥秋や親を拜する開き期
 掛香や衣桁にさわる風の文
 二の聲は枕はなれて時鳥
 葉に添ふ下替延けり杜若
 追れても、打れても又飯の鯛
 夏まつりまはり燈籠に夜を明し
 袖みは夜も更行て螢狩り
 述もなら花に來て啼け郭公
 牡丹見に行や加瀬にも願ひ事
 椽先に夏は來にけり一重芥子
 家に添ふ地所をひろめて田植哉
 粟時きの畑け支度や時鳥
 アノ聞くと云れて床し郭公
 畫顔や砂は焼ても花の艶
 珍客の置處なき暑哉
 園若の友來て打起す畫寐哉
 井蓋や底にもそれと影一つ

青麥や雨を待乳の夕曇り
 舞ゆるも崩つるも早し雲の峯
 さなほりやもんでやりたし親の腰
 伯樂の家と見る哉栗の花
 扇見て座敷は京の咄哉
 咲は早過る盛りや芥子の花
 涼しさの此上もなし塵御し
 水入れて筒の居りし牡丹かな
 八景を寢覺に三井の遠目鏡
 風誘ふ満干の空や飛蝶
 水つる、風やとりたし夕涼み
 餘の色もなくて見まかふ杜若
 飯焚けは飲遣りにもなる山家哉
 帷子や敷無き耻々眼に立す
 座に付ぬ先きに眼の行牡丹哉
 山を巻く雲より出たり不如歸
 下戸獨り別座に退て扇かな
 十日程海見ぬ旅や閑古鳥
 涼しさやよき基に勝て肱枕
 水草に生れた花飛螢哉
 若竹やこぼる、程の露を盛る
 母の夢見たて笑ふか畫寢の子
 夕立に水の噴嘩も流れけり
 雨の日も立たき孫の轍かな
 手にさわる物を畫寢の枕かな
 招き合ふ川を挽のす、みかな

大御代は長き根さしの書齋哉
 朝寝して朝から暑し蟬の聲
 ちよと借てかふりて見たし山植笠
 待雨は山斗なる暑かな
 夕立や案山子の笠を借て行
 老てきて黄鳥なくや神し山
 症た親ををひては焚く蚊遣り哉
 親寐せて枕をあふく暑かな
 涼風になみ打渡る青田哉
 七轉ひ八起に太る水瓜かな
 蟬鳴や軒の燈籠もつけはしめ
 五月雨や水有なから貫ひ水
 月の門隙てなくや郭公
 た、む風片袖通す日傘哉
 待まつて夢とはなりぬ郭公
 撫子や照る日のかけに花の艶
 寐こ、るや風に折々動く蚊屋
 池に來て二つととなりし螢かな
 降らぬ日も平持ちけり今年竹
 天津日の御教八瀬の田植哉
 笑若れは起くる編や籠の中
 船へ出て居流すや隅田川
 星もなき間にあやあり螢哉
 灯取虫追ふ手に卵はなかりけり
 蟬啼やそれ聞て寝てそれに見
 月晴て聲も涼しや時鳥

用符や孝行な子の早良り
 癖止めてはれかましさに寝ぬ夜哉
 池に出た樹に大胆や蝸牛
 卵の花や櫻のあとの朝霞けり
 打居へた鯛に來て鯛たかりけり
 夕立や洗ひ出したる松の月
 す、しさを身にしみくと親の恩
 雲の峯不二を低めて聳へけり
 負て來て親涼ませる河邊哉
 ち、めたりのへたり浪の月涼し
 見かけより昇法なりけり蝸牛
 刈草の中を出て來る螢哉
 口の汗を月に干たる涼み哉
 さみたれの下に開ある柳かな
 船へ出て暑さ流すや隅田川
 傘月開入けいもた、鏡はかり
 年積て錦重ねた親の恩
 寐る迄にして更しけり納涼たい
 叩する槐の月や明易し
 糸柳に花と亂る、蓋かな
 符や無理やりに仲岩はさみ
 一降に風情盡すや郭公
 時鳥鳴く一聲や明けのそら
 添乳してあはく扇扇や親の慈悲
 元の座に直りて器る牡丹かな
 一里來て脚の重さや蟬の聲

蚊を叩きく身の上叫しけり
杓つける人の情の清水かな
戸を明てそのま、寐たし夏の月
今朝からの暑さ掃上す垣根かな
吾身より仰け團扇や親の恩
雨の夜を軒に蓋の知らせけり
水に影動いて咲くや杜若
水無月もさすがは夜なり草の露
日盛りや鳥のかくる、影もなし
かくれたる人を追越す清水哉
蝶の來て共にちりけりふかみ脚
誰思ひ身を焦すらん野の蓋
乳貸ひの視て歸る晝寐哉
浴て出た鳥からしるや岩清水
蝶の來て豊に遊ぶ牡丹かな
蚊や釣て呉れと寝酒を仕舞けり
帆柱にはしき杉ありはと、さす
水に燈のこはれて清し御後川
花に出ぬ座頭の世也杜若
紫陽花や挽の戻る雨の晴
す、しさをましけり水のあふる音
災陽や助かの富士をゆるかせり
二日の苦をは離れて夏の月
亡き母の音身にしむや更衣
鬪牛の太る風情や二月雨
家毎に巻く心のある綿かな

廣澤や浮鳥管ひ鳥の聲
手から手へ風商ふや扇子市
跡へ這ふ葉のおかしき田植哉
打水や親の晝寐の枕先き
世のちりをさきこはしたる牡丹哉
何處らから出るや團扇の風涼し
若竹や雀一羽も重きふり
孝の身は蚊に喰る、や父の爲
雨た親のうた、寝に焚蚊遣かな
眠くにも男めくなり初輪
帆柱になる木の多し開古鳥
涼しさや月を凝して走る雲
照り返す軒の夕日や若樹
風響めて汗ふく土手哉松の陰
家富す人のほまれや汗の玉
徹くさき老の着物や五月晴
風産て親の氣をなく團扇哉
刺立のあたまや踵になふるる、
早乙女や日は隠れても暮ぬ
入替りさすや清水に笠の影
月と子に引かれて行や樹す、み
朝きよめして落附や驚る蓮
手の届くところからへる實梅哉
淋しいと云ふ友もなし開古鳥
蚊屋釣て寝た子受取る戸口哉
雨乞や月の出ぬ間を花こゝる

白蓮やまた葉の陰は明きたらぬ
指し上げて行く人中や芥子の花
白雨や瓜人、建る晝蚊戸
轉寐を釣込む雪の蚊張かな
其味は賣人も知らす初茄子
捨船の中に水ありなくかわす
卯の花の月夜にまかふ垣根かな
夏の月門て断は濟しけり
濁らぬは神の誓ひや岩清水
もる乳に午時知る雨の田植かな
卯の花やしまりとならぬ柴戸口
耻かしき口元隠す扇哉
出る月を力に涼む二階哉
夕立や俄かに太とる瀧の糸
石切の火花ちらすや木下閣
月の出た所てとめるす、み船
聲かけて人にもくる、初茄子
一輪の花に客する牡丹哉
いらぬ水汲や暑の氣姿ひ
添乳して手真似て乞ふや枕蚊帳
來た蝶もちいさく見ゆる牡丹かな
水の恩思へは深き青田かな
しての戸をしはく、叩く水鶏哉
真似をした儘て子供の晝寝かな
過ぎ去りし文のしらへや五月雨
真心の一足つ、や富士詣

観あれば着せてもらわん衣かへ
夏の日と親の御恩は夕涼み
こゝろなき雨に散りけり辻の花
涼しさに翌日の門掃く月夜かな
てうあいに途て骨折 團扇哉
月かけの晴て鳴出す水鶏かな
負て來て橋から捨る 晝哉
寝むる子のためとから出る晝哉
すうくと暗を縫ひ行 晝哉
帯解けは松葉こぼる、清水哉
五月雨に障子の糊のもどりけり
夕立に急ぐを笑ふ蛙かな
炎天や釘の飛出る板ひさし
可笑さを扇子に隠す女かな
天乞に鳥もなかな日なり鳥
口花の咲く水あけや涼み晝
葉柳になつてすみよしさしの家
肩を張る人に見せたや葉柳を
せわしない程樂しみの田植かな
明安き夜とも見へぬや松の月
額土も亦白蓮の香に淨土哉
先はどり拂ふて居はる團扇哉
くもりなき身を涼しき月夜かな
をつかけて足もとくらき晝哉
山て見て戻れば同じ若葉かな
葉柳や腰をか、めて高ふらす

山寺へ無心に行くや岩清水
君か徳めつる葉振りの青田かな
竹は夜る百華哉夏の月
湯殿から匂ひの洩る晝寐哉
傾城の墓無縁なり苔の花
降たしのやはらかにして虎か雨
杖置いて落穂拾はん麥の秋
郭公聲と姿と別れけり
罪障の消滅せぬか蟬の聲
灯のど、く草の光りや五月雨
皆明る 障子や夏の夕涼み
夕立や月になる夜の木の平
卯の花の盛りや團もよせつけぬ
若竹や垣たて續に出るちから
長午寐そつとのそくや親の顔
松風の落て青田を走りけり
葉むれは千代をも照らす晝かな
飛ひのいた聲は下女なり菖
鳥の來た木から吹けり青嵐
一人にて一同ふさける蚊帳かな
夕立を外から告げて大さわが
辻禮義歩みながらに田植かな
魚はねる水輪にのるや夏の月
風を賣る身も又こまる團扇賣り
國々の嘶涼しき松のかけ
白蓮や佛間舞く花の色

いつとなく日傘かたむく木蔭かな
麻刈た夜は間ちかし隣の灯
夕立や我傘下にちらぬ人
月涼し田へ流れ行く水の音
みしか夜を補なう秋や明の雨
置あるやなしやす、きの風傳ひ
見て居れば寐る際もなし夏の月
親方に女郎屋で逢た晝さ哉
浮上る龜の背に散る遊かな
極樂と云ひつ、はいる蚊帳哉
川狩の戻るや猫の襦もつれ
野も山もたいらに見へて飛登る
清水から杖忘れけり下り板
親の汲ひなさに甘き暑氣拂ひ
若葉は名しみに顔なり初輪
板の間をふく間も馴上柱すし
起されて夢もほいなし籠枕
寺へ來てよき死に場所や火とり虫
蚊や釣りて母に寐酒をす、めけり
二つかど見るや晝の水鏡
生玉の名のみに迷ふ山時鳥
きこんまけして殺しけり火取虫
開かねは扇は風のつはみかな
月よりは上に啼しかな時鳥
汲さして井筒に下女の涼み哉
満月を見て指折るや五月晴

涼しきや船のたぐ火のゆりこ、ろ
月影の跡かぬ庭や白牡丹
啼く鳥まゝ、ある中に時鳥
關取のまけた嘶や宿の蚤
一輝は捨て山越す時鳥
有たけの力見せけり菖蒲太刀
雨乞も雨降り出せは笠をさる
孝の名は千代もにこらす瀧清水
栗隈やまた瀧面も薄化粧
明旅の座敷に見へつ青嵐
梅漬の鹽のたるみや夏の雨
届く手を消して逃る、蚤かな
先づ暫し夏を忘る、清水かな
故郷まで譽れか響くはと、さす
母の手にやる手に螢外しけり
よく寝入る子を蚊帳こしに覗き見
水にまて締つかいやかきつはた
墨すれば動く枝ある牡丹かな
走る人呼留て貸す白雨哉
珍客も様に連れ出す夕納涼
月の輪を飛込んでけす蛙哉
子心も月にかくしぬ蓋かこ
放された籠の蓋も後や先き
闇に出て月に戻るや蓋狩り
寝た親を起して香す煎茶哉
遣一重飛 羽根重し羽鱗幹

白へいに雨具着せけり五月晴
とらの耳動かす睡の力かな
橋引たよふに通るや青嵐
花明りして日の暮る、牡丹哉
留守らしき庵の主や軒菖蒲
薄雲の残る朝たや桐の花
白雨の先觸れにけり蛙かな
まけと見る若に汗握る扇哉
口汲に蝶の出来にけり菜種かな
蚊一つかた、かれもせす子の寢顔
神の井や扇くはへて一と釣瓶
名とり草葉もかくさすや花姿
さんふりと綱かふせけり夏の月
大暑や故郷の父母に見舞状
目をすりて將差見とる、蚊遣哉
来た道のあつさかたるや涼
寐心のよきもわすれて時鳥
我影の我身に涼し夏の月
美くしう日を孕みけり雲の峯
ふる雨をつかねこんたる菖蒲哉
風の尾の切れ間も見へつ青田哉
寝た親にそつとふつたる團扇哉
島の戸にゆれる小船や夏の月
水に色戻して落ちるかさつはた
暑き香の眞砂子に積る夕入哉
晝顔や土の香の来る午時下が

建問へは一度に動く田植かな
経たたらぬ戀に交合す日傘哉
今わらに父おはすやら花御堂
罪のない手をもれて飛ぶ蓋かな
顛の墨おとして着せる 袷哉
また来たか初音は今朝を時鳥
蚤に寐ぬ門の咄しや又ひとり
湯揚りの母は氣の付く團扇哉
陸まじき家も蚊遣りの涙かな
孫抱て星の睨れや涼
鶴龜も出て舞ふ御世の牡丹哉
明安の夜を心なき水鶏かな
寝へた子の手から出て飛ぶ蓋哉
暑はまけにして呼込むや初松魚
暑き日や禮云人あり時鳥の松
はと、さす初音を聞きて夢半分
暑き夜や遣ふ扇を親の傍
花に夜の明る色あり水の遠
風の香の届く日和や夏座敷
青梅の落ちて音あり池の水
家明けて出るも目出度し田植哉
川筋は圍みの際立つ蓋かな
夕立てふと目覚めせは窓の蟬
親の寐るひと所涼し草の家
短夜や寶の夢もあとやさき
五月雨に降り隠されて富士の山

見はしめて見ふさめならぬ美人草
坐敷より庭の目に付く牡丹哉
竹の子や過る月日の眼に見ゆる
午借つた禮に嫁貸す田植哉
涼しきやかさす手に入る不二の山
看病や操の届く蚊屋の伽
脊なの子の手風は舞ふや初蓋
かのか聞しらぬ船船のか、りかな
鳥も地に下りて苔ふむ四月かな
賤か家のあるしゆかしき牡丹哉
短夜も重ねて見たり夢にゆめ
呑みためて起したや谷の清水哉
みしか夜をまた人の来てへらし境
そよいては寐顔こそくる蚊帳哉
人の来て一隅はつす蚊帳哉
夏の夜や月に持出す糸車
小流れに床机わたり夕納涼
水打ては樹から立けり暮の蟬
月の戸も本尋かけたか時鳥
寝にして戸を閉惜しむ夏の月
宗た人を寐よと起すや納涼蓋
蚊を追ふや親の軒を守りつ、
白雨や片瀬も澄て流れけり
留扇うしろへ差すや女連れ
狭いほど子供廣める蚊帳哉
月も蚊もさす縁はなや小手枕

花の酔若葉の風にさまじけり
陽炎やきのふよつたる漢
聞ふとて待夜は鳴かす郭公
冷々と音空移る清水哉
夢を見て抱き直しけり竹婦人
一ト口に夏を忘る、清水かな
暗りに探る柄杓やなめくしり
まけぬ直を買ふも氣生や初松魚
世に出んと子子くねりくけり
夏川の花とも見へて乱の灯
打水や籠の契は琴の音
後先は暑き野中の清水かな
短夜と知りつ、更す咄し哉
短夜や夢突破る明の鐘
恥かしき顔かくし行く日傘哉
水と空髪一筋や夏の月
忠孝の文字は暗なし花卵の木
開きなは不二もかくる、扇哉
天地を洗い流すや五月雨
涼しさを拾ひに行くや磯傳
瀬戸落す船の眞上や時鳥
麥秋やふりのひよしのよき揃て
来た人に小言盡しの蚊遣かな
手を添へてやりたき障の衣更
晝寝した其身ハしらす顔の汗
口あけて啼かぬ鳥の暑かな

蟬の来てこそは隠す乳房かな
蚊の聲の中へ投込む初織かな
葉になりて男めきたる櫻かな
入梅晴やまたらに見へし不二の山
川岸や家もたてたき夏景色
時鳥聞く度聲の断し、
日最中は砂も燃へたつ暑さ哉
豊年や穂くら揃ふて麥の涙
蚊遣して我もしりそく烟り哉
梅梅や賣人のささる乳の黒み
一ツにもかたむく船や初蓋
段けられたよふな角力の蓋哉
甘酒やわまい言葉の寶上手
人寄の中や扇のもらひ風
もう暮る月いと涼し五月雨
歸りにはさかかもすきて芥子の花
鮎もまた味格別な沖なます
夢見て聞直しけりはと、さす
生き歸る軒のしのふや五月雨
蓋寝して共に休みし團扇かな
登る日を巻いて落けり竹の皮
橋あるもわさにはいるや夏の川
夏座敷冬の住居を問はれけり
車路で聞も御代なり問古鳥
もてなしにいよ／＼暑き坐敷かな
露見した橋に氣の付く涼み哉

松風の蕪り氣高し夕涼み
 螢見に火を摺んたる小兒哉
 雨乞に祈り出しけり雷の音
 大川の陰て小船の納涼かな
 涼しさを忘れてかきす扇かな
 見かへせは富士より高し露の露
 暑き日や身を持つ智恵は今日出す
 短いを悦ぶ親やはつ 裕
 薬玉やそつとする程よいすめ
 山た汗を洗 鱧 や夕 錦
 須彌山を間近ふ見るや花御堂
 馳走した清水の禮に茶代哉
 魂磨く机を照らす螢かな
 猿も来て蟹の子なる清水かな
 葉櫻やまたせて置た人も居す
 遠くても涼しき道を尋ねけり
 めおしへや契れと實なき牡丹哉
 人の癖去年にまざる 暑哉
 角力取の来てからせまし納涼盛
 照り付ける夢見て啼か夜の蟬
 五月雨にはこる夕アや若みどり
 時鳥なくや出船を留て聞
 よみかけた手紙枕の甚痒哉
 月にさへ星にまざる、螢かな
 灯は虫に坐敷は月に取られけり
 明安き夜なりひた〜戻り潮

杜若米搗いで来て、水
 眠る子の手から生る、螢かな
 たきこ、る能て寐られず竹婦人
 裏小路素通りするや初松魚
 三日月のさしこみにけり蚊帳の襦
 暑き日や廻りて戻る 橋の上
 卯の花や庭に廿日の 團扇無
 蚊屋の裾疊めぬ形りに螢みけり
 桐咲や幹の太りも暮らる、
 夕立の咽と越す如し冷し汁
 やつと越す時抱へて登 渡 哉
 郭公啼つる方へ雲の脚
 水草にあまる螢の光りかな
 一人来て神風涼し宮位哉
 子子や浮世の業を浮沈み
 冷いのかうまいのてあり砂糖水
 樂寝した親あはさつ、涼けり
 浮葉からうき習はせて鳩の雛
 此奥に氷りもあるか昔清水
 野遊ひに興もますなり青嵐
 見晴して心も勇む青田かな
 夕立の晴れて涼しき夏の月
 地極から来たか蚤蚊のいやにさき
 夏菊や秋を待つ間の一ながめ
 涼風を見せる柳や椋の先
 飛込て水音高き 蛙 哉

筆先の力ぬけ、り郭公
 暑てのむ峰に集る清水かな
 重なりて見へすく蚊や夏羽織
 習ふより馴れて鶴の捌き哉
 郭公鳴や時 月の月と松
 思ひ出す用塵み込む扇哉
 汗かいてもどりて涼し露所
 扇の思の厚きにあはく扇哉
 親は子に唄ふし附て田植哉
 帆に風をうけて涼しや船の月
 夕立や今暫くと松の陰
 露夜をみかきて出たり夏の月
 雨漏にひと隅はつす蚊帳哉
 富士程の九かねを呼ふや初茄子
 新造の木香一しはや涼み船
 世の中の人も勉上時鳥
 競勝つ馬に氣遣ふ新樹かな
 月二つ中の一は江涼舟
 秋ならは月も暑めんに螢かな
 心にはに汲たき清水かな
 夕立や笠きた人も松の下
 類のによつと顔出す花藻かな
 蝸牛やふらりと下る 處まで
 笛の音に笑顔をつくる牡丹哉
 割箸の遣ひ心や初松魚
 炎天や母の手紙に添ふ薬

早乙女のころひてひとり戻りけり
 夏寝て裸にならぬ角力哉
 魚賣りの休む木影や心太
 砂道に踏込むあしの 暑さ哉
 夕暮や袖しはるはと五月雨
 おにの名の付しあさめも花御堂
 人の袖ぬらすも幾世虎か雨
 ねむい眼も耳から覺めて時鳥
 機断ちし人さへあるに筑摩編
 扉も夜の引わかれけり時鳥
 むむらび 中津川 津波 津波 津波
 涼しさを夕立晴れの夕日影
 あとしさる程か上手の田植哉
 今といふ内に過けり郭公
 月影を荷ふて戻る 清水哉
 雲さして國の名問ふや富士詣
 夏草や障れはた、る 塚の上
 明捨て寐た氣も安し夏の月
 ふわ〜と月の端居や紅團扇
 扇のかはり吹ぬく 籠かな
 涼しさや月と水とを前うしろ
 寐た家を船から呼や夏の月
 月涼し涼し松風水の音
 さつはりとしたり御稔の戻り道
 しわかみのよふな男の暑さ哉
 百草に名こりは 呼か別霜

駒形は昼夜の明と暮
 待つ心花にむとらす時鳥
 費眼房驚入ちかきふた毛虫
 年々にまざる田植や日の七つ
 春の香の残る袂や佛生會
 暮れて行く跡も樂しき 螢 哉
 夕冷み親の手を引き腰おして
 夕立や釣竿走る川 向ひ
 月影と共にゆるる、浮葉かな
 膝に來て青鬼灯の顔ひかな
 生捕た手のやさしきや益行り
 炎天や暮ても残る日の句ひ
 往來をかたより歩む 暑 哉
 淋しさや清水現けは鳥のたつ
 宵の雨夜中は月と時鳥
 友達をさそふて行くや益行り
 青む丈見て嬉しきや無蛙
 建久の昔語りや五月雨
 手に汗を握る行司のから團扇
 涼しさや富士も夜なし田子の浦
 親元は嫁に送ふお初 經
 はめられて初秋葉隠す團扇かな
 ひとつつ、日をくらし行く 螢 哉
 馬に飼ふ程は溜らぬ清水かな
 可愛夜を敷にくつさる、涼み哉

群鶴す松の力や若 清水
 品合の人にありけり初 拾
 若竹の露打冠る雀かな
 二階から呼はれて疊む日傘哉
 筆なりに指の回みし 夏書 哉
 涼さや脊戸にすれ合ふ 音 哉
 寝おしみて戸さ、ぬ夏の月夜哉
 夏の月雲ふんぬいて丸はたか
 夕顔の花のしほむや朝月夜
 船と船押合ふ 田の納涼哉
 葉柳や家なき屋敷はめせ 行
 水無月や小樽て運ふ水の音
 こと國も日本のふうを扇かな
 人聲も流れて清し 門の川
 小高みやわかはその中から一宇
 牛の尾の繩にと、かぬ暑さ哉
 三日月は山に残りて時鳥
 手に團扇水はしそふな人の顔
 涼しさや月のこぼれてにはふ 蓮
 汚れ手の酌も目出度 田植 哉
 呼ぶ聲に情實のあり岩清水
 仕合や月待山の郭公
 蚤一つ袂にひねる茶の間 哉
 嘶や馬も勝ては嬉ひ 哉
 動かねは水草も暑さ 眞 哉
 涼しさや月も流る、隅田川

一輪に乳子のかゝる、牡丹かな
誰に肌ふれても消し竹婦人
笑しき雲寝なりけり嫁姑
ねなそくは水にも在かあけやすき
あり明の月また低し時鳥
後ろ陰見に出る母や初拾
手拍子を打て扇を開けり
涼風や口紅直す松の影
腹よつて水かけ合を仕舞
古池の跡か一株かきつはた
水無月や氷の味も御代の恩
岩すれて味ひ丸き清水かな
浮草はゆられなからも並かな
腰を弓竹の児重う見へにけり
橋に來てむひ人や夏の月
旅人もくむ茶かた手に燕子花
涼み船月の浮島廻りけり
朝顔や心奥迄明障子
海よりも深き恵みや苗代田
苔から待てる、庭の牡丹哉
露の露や、しひまりて鳴瀬かな
涼しさを配る身あつし氷賣
手にさわる物を枕に盡寝哉
不二にめを覺すやいなや初松魚
月に聲發して行くや時鳥
親の恩數へて見るや土用干

蚊屋釣て待けり母の風呂上り
地に跡の付や牡丹の雨傘
名の高き義士の石碑や昔の花
田をうらめてまつや嬉しきけふの雨
手にとつて見れば角なし鶴牛
川かりや連れになる子も魚と水
孝行は見よき團扇の丸さかな
峯作る雲や足なく成る井水
富士の根にはのか明け行益かな
短夜のもうけ物なり不二の夢
一人り寝て孕む小風や竹婦人
短夜の業には美し脚の糸
涼しさを風にかまはせランプの灯
古郷の空なつかし、時鳥
雨氣持空や取麻飛ぶ蓋
笠ぬいてむひ影や時雨
國會や皆勤揃ひの初拾
持替る手に未だ重き牡丹かな
眞赤イナウソ云々賣レスイクワ哉
涼しさを散つて來そよな三階の火
雨乞や神なき團扇しらぬ沙汰
文明の御代や涼しき神心
金盃のちいさく見ゆる牡丹かな
櫻木にすかかてなくや藤の聲
よの風の吹に行ても扇かな
後援の先は取出す扇子哉

紙帳より親へ涼しの蚊帳哉
見立るや空にも月の紅團扇
淀川の月見て扇た、みけり
たか、と富士の山程賣茄子
通り雨掛らぬ森や卵の聲
牡丹花や荷ふて這入る御所の内
注連張て汲さぬ井戸や昔の花
青堀や魚市濟て明た籠
明はなす戸口に余る暑さかな
蚊くすへやもへて裸かの人みへる
店引は橋の上飛ぶ螢哉
願濟して出る軒や風驚る
夕立やぬれてもどれば門に人
雨も日も不自由はなかれ用東風
入湯の孕婦土産やはつ粽
啼くからは血を吐くまでや郭公
煙草盆なりと持せて遠見哉
夏覆の暑さ納りて太りけり
涼しさを之れよりそなし眞はたか
雲間漏る月を栗りや郭公
暑き日も厭はぬ蜂の冬掃へ
五月晴れ太鼓の音も違ひ鳥
植物のひた花摘まん夏の月
置座も風の都合や夕蚊遊り
かへに耳板振に目あり銅鑼り
我國の寶の種や蘭の出奔

三日月を脊負ふて植る田植哉
寒い程涼しき風や夜の馬車
若直せば心も軽し初拾
けし提て風に吹まわされにけり
夏せにきて手のひらかれぬ蓋かな
二ツ親にたんのふさし暑氣見舞
月に雲退けはけしきや郭公
見所の無き中にある早苗哉
にはどりの座敷へ上る寝寝哉
豊さを念して願ひ田植哉
親か子か梢に卵の身や二ツ
留主番は猫斗なり田草取
野の光り京て見せけり益賢
若るころは夜の明て有夏蒲團
師の聲のたらく長し並木道
孫に籠もたせて茄子の初ちきり
母の肩揉てやりけり夕涼み
蟬啼やてりち、めたる川の巾
一ツ般に開らけた聲や時鳥
奥山の深き流れや田植水
涼風を手に携へる扇子哉
正一つおさへて崩す行儀かな
夢氣をば一目で晴らす青田哉
はつと上向けは月也時鳥
除た口の横にさしこむ寝寝かな
日に濡れて身に付汗やたかむじろ

ある帆の見ゆる場や青鷺
夕月の入り際早し時鳥
しほる程柳は濡れて夏の月
虫干の籠に母の涙か
月は秋月夜は夏とおもひけり
山彦と初音あはすや時鳥
疊み込む日柄晒しや白扇
ふりかめる草のあらしや飛蓋
月の出て寝るも借上納涼蓋
吹けして蓋入れるや小提灯
千金の味はい持や夏の風
よき風に笠の紐とく田植かな
うつかりとうづふさななり時鳥
意願や露の情はしらぬ振
取兼て母の手傳ふ蓋かな
月涼し這ふ子のつかひ松の陰
空寺のま、に柳や開古鳥
若竹や雨程落る露や平
長かれと祝ふて配る千巻かな
世の中へ満ちて御恩の暑さ哉
石に根のをろす神あり五月雨
椅子一つはしき野澤の蓮哉
寝顔や河原流る、よその雨
青熊乳母から先へ覗きけり
扇子やも開けて日増しひらさけり
鳴神の音にもおちま鳩牛

皆露になりて夜明のはたる哉
入相の鐘か鳴すやかんと鳥
おたまたけむいともやはり暑哉
新らしう來た人の汲む清水かな
恥しき人に片ふく日傘かな
朝の氣の一日はしき夏野かな
谷川の聞へて高し夏籠り
行夏にいつも盛や辻かはな
一寸吹た風も波立つ青田かな
寝る樂も苦になる蚤の四月哉
借た風聲で返す扇子哉
方と成る親の手下や雷の音
思たよりわり涼しや涼車の中
月涼しあゆめは濡る、鳴傳ひ
句ふ湯に入て帷子着初けり
寐る人をゆりおこしけり涼蓋
借り傘を又貸しするや五月雨
啼蟬の移れは干るやたまりな
打水の後て風りんなりにけり
脚の憂十分延ひて秋近し
提けて行く心は重し蓮の花
重着を思ひ出しけり五月雨
あせ水に成てかせくや氷賣り
炎天や鳥井の額の沙うつり
突鐘の音にもちるかけしの花
春に寝る兒も仕辨なり麥の秋

霞いふも只一口や旅の水
押えてもいづも煙や蚤の跡
水漿歌うたうもうたう田植かな
言ふ事のはて、汗ふく使かな
花ものを言ぬ類ひや竹婦人
驅付て松に宿借る俄雨
とりあけて打かゝるし見るうちわ哉
千吟も一聲よりや時鳥
時鳥鳴や寝ぬ眼のさめ心
鮎追ふて跡説きけり子の寝顔
火の花を咲せて涼し水の上
輝なくやまた道遠き奥の院
大山のふもとて小き清水かな
炎天に何事有るそ蟻の道
隔つれと心へ涼し瀧の音
抵行雲重りて、鳴蛙
はつ蚊帳に思はずしらす朝寝かな
月一つ目に埋もれて時鳥
鳴渡る月をちとりに時鳥
頓て伐る木蔭に柳の葉蔭かな
戀文や筆に花あるあやめ哉
夜半の月寝耳に告ぐや杜鵑
春を皆洗ひ流して衣更
相植の拍子はつすやはと、さす
母なてに起て聞けり時鳥
朝の間に道を急ぐや夏の旅

来る涼車を待ち合はず問の暑さ哉
一聲に曉ちかし不如歸
蚊の鳴ぬ内に仕舞や夕化、粧
立されぬ操にせまし蚊屋の内
折りかけてこゝろ見らる、牡丹哉
涼しさや木の下蔭に甘酒や
寝る事もわすれて遊人納涼かな
日の斜む程に露産青田かな
青梅や咄しにも湧く口の水
後の世の闇は照さす編の篝
蝙蝠や夕立に合ひ日にも合ひ
石山よ月見ぬ先や不如歸
尻の火に頭敷ふる蓋かな
着たはるの間からさすや蚊と此と
夏の井を蛇に借られて貰ひ水
寝をしむも世のならわしや夏の月
春らねば身をも破らま遊園扇
汗背積りて今日の納涼哉
うた、寝に明す夜もあや時鳥
ゆつたりと旭うけ、り白牡丹
見る人も行義くすす牡丹かな
見し夢の出た跡らしや蚊帳の穴
版ふ雨蚊もすくなしとほめにけり
家にきて盛りの上忍すへりけり
雨後の月若葉の上忍すへりけり
井戸水のひやし味やとびるてん

氣平のあと追て青田の波けしき
短夜やわづかな炭のたち残り
下り登り世話しや風の猿轡
破れたる傘の借りてやある夕立
ア、今日も嬉ふ日なり水屋の上
一たんは人も追出す蚊遣かな
溝の月扇にうけて跨け、り
孫に肩うたせて涼む盆の月
かどく、に蚊の群さわく日暮かな
淀川やさしはおはさか螢狩り
母も子に引れて出たり蓋狩り
短夜も人になる子の机かな
風の蟬鐘つく袖へち、込ぬ
盗み寝や巡る蚊蚊に見付けられ
暮る、日を名の夜程待暑かな
世は花の酔覺頃や郭公
昏て行咄しを歌に田植かな
齒に酔のしたへも来る水り賣
狂ひ舞ふ蝶氣遣はしけしの花
そ、をして主人の傍の暑さかな
愛さ業の多き中にも編匠かな
あたらしき水にも見ゆる夏の虫
徳光やつ、みも混る、蓋の灯
速ふしの堅田に余る田植歌
虫干や刀は錆ひて光る御代

追んとして脚にも痛し腕の骨
考の思深し鶴川の口案内
初にもちる半ありはと、さす
みちか夜や我とふとんど十文字
行燈を消せば夜のなし時鳥
竹の子やしめてもゆるむ荷箱ひ
能き友は得たし逢も麻の中
寝た親を起すも孝や時鳥
細ぬきて蠶も蝶となりし朝
誘そはれて出る日を拾せ初め哉
登り蚊帳つるよ小暗さ敷の家
行跡の留主へも門の涼納哉
瓜冷るまでと持る、柱かな
登りかけ一息つきの夏木立
名に耻ぬ花こゝろなりか、み草
時鳥啼や雲間に夜半の月
帳子もこれにはしかし丸舞
あの夢は宜なり新くそ蚤の跡
若竹や親に勝るも親の思
聞ふとは思はぬをりよはと、さす
よれといふ人も外なり門涼み
若竹や伸ひても親によりか、る
とてもなら川の近間やもふ涼み
誰か見ても眞直はよき田植かな
雲よりも清きこゝろや富士詣うて
蚊屋そつと出て見返るや子の寐貞

暮て又明けぬ夜はなし被の花
枝昔の又生きかへる若葉かな
湧立てちりよせ付けぬ清水かな
とつどきた雨のあとなり時鳥
喰ふ物を鼻て味見る暑さ哉
茜さす淀の川邊やかさつはた
鶏さてか相休する田植翁
今の代は飾るばかりの兜哉
明る戸の輕ふ走るや初拾
意りのならぬ浮世そ氷り賣
夜はたとへ明るにもせよ納涼船
川風に柳をすへるはたるかな
來た道の暑さ見て居る木下かな
はる蚊帳や親子の中を忍ぶ足
親の名の書類はふます土用干
氣勞れのひる寐や筆を持し儘
夏瘦や寝るたひ撫てみるからた
五月雨や流れの色も大和川
助ヶ頼のむ小性の腕や牡丹鉢
家中のす、しき姿かどすたれ
髭刺た日から初初める拾哉
暮の思案ながら蚊遣りの消へた儘
はいつめた梢あふなしかたつひり
皆人の命の親は田植かな
畫顔や汲む手の冷る水の味
一輪の牡丹にせまき小庭哉

草木より人を濡すや虎か雨
よい速れの揃うて出たり今年竹
湯上りのぬれ手て還ふ團扇かな
乳貫ひの覗ひて歸るひる寐かな
身の榮は寝たに上なし蚊屋の月
落ち口を踏みこたへけり水馬
暑さ日や風さへ物の蔭に居る
十分な實入や麥の片なたれ
夕立の有さう雲や風涼し
散らかれば出合へぬ連や螢狩
月をみてすさむ水鶏の夕涼み
一人ッ、靜まる蠶の嘶し哉
一皿は夢心地なり心太
暮から花の正しき牡丹かな
我植た竹の陰なり夏の月
蚊帳一手はすして明る篋筒哉
夕立やさらりと晴れて峯に月
乳香子の足もよこれる田植かな
五月雨や是か雪ならどの位
泉水の澄みつ濁りつ五月雨
母の恩厚し拾の手織編
休みにも並んで居るや田植笠
打水やけに衛生とおもはる、
雨乞や降り出す山も拜さる、
か、はらぬ身にもあはれば火串哉
親よりも子の悦ふや柏もち

生き佛他生の縁や竹露人
ふゆさなり飲をちらすやふるみ草
子に際乳しなから戻る田植かな
蚊蚋の外まはれば遠き一間哉
客立て宮へも参る初軒り
米になれ糲になれとの田草取
犬の兒くはへて来るや粽から
招く程團扇に遠き螢かな
夏瘦や男とみへぬ帯の禮
四方山の断にせまし涼み蓋
今どれた皮のかたあり今年竹
打かけた其盤つりこむ蚊屋の中
浮んたる一葉器居る新茶かな
かけの水旅人の禮か二三銭
下手らしふ焚くを蚊遣の上手哉
荷をおふた人思ひ遣る暑さ哉
新らしき風の通はぬ青簾
若竹の取さも見へつ青簾
風捌く音勇しき幟かな
水打ては涼さ戻る夕かな
朝に引く湖の匂ふやふのり干
親の恩いた、ひて着る袴哉
黄昏て知れよき門や花卵ッ木
朝顔や矢竹にすかる取敷
水かれや渡しの舟の土用干
ちよと隋世も若し今年竹

夏瘦やうたかいかいもなき水鏡
夏の月留主を答へる向ふ店
は一ッ不足なき夜や時鳥
蟬啼や水にと、かぬ釣瓶なわ
初浦風にちるか蚊のなき菰の宿
呼ぶ聲も涼しそふなり水茶屋
我跡を慕ふて寄らす團古馬
兒心の見せに二度来る日傘かな
若竹に斗り風あり朝月夜
一本て市の願きや初松魚
手替りに物喰船の日傘哉
寝た親の枕にあをく蚊遣かな
憎くさ蚊も打たぬ姑の寐顔哉
御法聞く身にも世すきの鶴細かな
持若た料理人ありはつ松魚
夕立や釣竿携けて地獄堂
白雨や青天染に星つけり
聲聞てさいも涼しき水り製
能へ水の基手になるや心太
中の能き隣も遠き茂り哉
くわんせなき子は御免なり牡丹哉
五月雨や窓よりはいる草の憂
木のかげやこ、は影の捨ころ
植る手に年の花咲く田植かな
海山を巻くは身も鉢の鮮
思ひされぬ身も鉢なる若かな

初蟬呼んでさわいて通しけり
茨の花佛の知らぬ匂ひかな
朝月のやせて清水に残りけり
立聞は戀の奴か葱の戸
菘狩る人か菘に狩られけり
雲をさる月に帯さす時鳥
蟬啼や地もぬらさつに晴る雨
孝行な子に起されて朝涼し
挨拶を輕ふ濟せし團扇かな
拾着て急度居並ふ寺子哉
手を打ては親も出添ふ鹿の子哉
蟬啼や大事に水を遣ふ家
不二白し山を出かけた土用雲
古い物はかり新茶の道具哉
扱もれて香る牡丹の盛りかな
うつかりと行けば川あり夏の月
寐て眠すに寐子は氣遣れり母が盤
賤か家も涼し親子の向ひ盤
うつくと寐る手の動く團扇哉
電や床しき戀の蝶ちす
乙鳥の巢をくふ家や咲牡丹
遠の葉へ飛んた蛙か露と落つ
夜涼が月の戻を惜む哉
あつと温泉に来て暑き日を渡さぬ
一人寐の蚊帳の上飛菘哉
己か荷を枕に茶屋の菘寢哉

今日の日をたかへに咄す涼哉
掃出して見ても梅雨けき一ト團哉
汗水を流して行や水 賣
せまくとも名は世に廣き清水哉
涼しさや白帆真向きの下り坂
販達の簾屏風立て晝寐哉
涼しさや夕立上り水の音
昔撫て偉績を慕ふ石碑かな
蚊の中もひまなき孝の機かな
丹誠を見せし麥穂の重みかな
藤つるをちからに風る清水かな
汲む人の絶ぬ井戸あり夏の月
鶴つかひや鶴にも劣らぬ目の配り
越方の苦勞太りて夏瘦女
夕立に断り兼ねし傘の連
身を忍ぶたよりにもなる日傘哉
一昨日の雨までほめる涼哉
川筋ややみをはなる、菘哉
今日よりは未だのもしやはつ田植
さつのない駄自慢の相撲哉
吹風も勇み添けり初軒
昨日より持ちやすくなる扇かな
はかのゆく小笠細工や五月雨
野はやみをはなれて明き菘哉
しのかれぬ身をた、ひ日傘哉
をしまる、花の袂や衣更

一枝は戦士の首なり墓地の橋
墓は勝と見止めて暮る苗の伸ひ
汲てのく跡に人あり清水かな
二ッ三ッ好きなき佛へ初茄子
橋にふね三味川船に夏の月
持歩行蚊遣りや風に運わる、
見る人の心も高き牡丹哉
小供らか暑さ洗う海のさし
重箱や若葉の香り柏餅
曳く足もさす手も糊ふ田植哉
はるくと機嫌にはとく粽かな
人の汗見て我良を拭ひけり
雨の駕下りて袷に移りけり
たをやめの小すま輕けや衣更
郭公鳴や此頃晝の夢
世の中は富貴浮雲や遊團扇
昇る日を勝から拜む田植かな
よき程に潤ふ雨の青田かな
日さかりも厭はて行や水曬ひ
唐人の倅うつす菘哉
手代まで皆上さ家や更衣
今寐たる親に一聲はと、さす
鐘一ツ聞て蚊帳に疊む夢
磯の香のするや卯月の日和風
加茂川に菘寢の夢を流しけり
十六夜の團扇と縁の晝寢かな

笑ふ子をかりて来にけり涼哉
かう持てと教へて芥子を呉れに宛
何おもハしはれて鳴や閑子鳥
一隅は松にやつらんいはのかや
秋實のる戦さ摸様の青田かな
朝起の福忽ちや郭公
五月雨や詠めは四季のはれくもり
尻はかりうこくやうなり田圃と
水はめて桶はらひけり金魚賣
文の書く種の開たり時鳥
風の夜はたもとにとさる螢哉
沖島や風のほたるのひと光り
聞に行あたまのうへや時鳥
人こみの中や團扇のもらへかせ
親あふく團扇持つ手にすかる孫
上手程風に追はる、田植哉
川風のかるふ道入るや夏座敷
萍や流れて戻る廻り風
來し人に譲る夏野の木影かな
孝行の手に輕るそふな團扇哉
蚊屋つらてつら伏家の蚊やり哉
卯の花やうやくしき五月雨
是からは腰かけ茶やの柳かな
夕顔も酒の相手や田舎ひと
露よりも朝は涼しき土用かな
米の直の次第にさける青田かな

水汲の戻りまたる、暑さかな
秋きはと風のす、しき庵かな
門た、く人やくひなの裏表
竹の子も増る時勢や撰擧園
苗取やうたう少女の形みたし
喪寝した柳も風に夕涼み
休ませし牛も寝て居る暑さ哉
起ぬけに出た鳥うつる田植かな
土用干親の遺書を見る日かな
試に着ても身かるし初袷
夕貞やふらりと暮る、曲み柳
風の輪にあるやうに撰る團扇哉
足る事を日毎に知れよ百合の花
巳か田をおのれか譽て田圃取
ちらかした團扇も馳走夏座敷
初田植てきり見事や花の嫁
子福者の膳立いそぐ蚊遣り哉
若葉見て花のうつり香消へにけり
裏通りするや若葉に引小袖
昏て見る人もうつくし白牡丹
短夜や夢に名残の鐘の音
柚か家をのそへて戻る鹿の子哉
庭易を蚊遣りに翻す涙かな
手をぬけて團を掴みし蓋かな
うかくと腰にふくさや燕子花
智者振の断や人のす、み蓋

海見ゆる峠の奥や関子鳥
親ありと丸てさけ、り初經
水無月に養老龍も朝かけり
虫干に目のつく親の衣紅哉
河骨や水に動かぬ花の振り
活潑を案事る母や印地打
親子して植た親子や田草取
うしろからあふくも孝の蚊遣哉
弓取も座に濟てなし、鐘
宵の間は月とも寝るか竹婦人
月に竿さしてのはるやす、み船
青田見てついに都へ入りけり
いけかへる花盤へて衣更
雲はみな引て明けり夏山の山
我も斯う生れて見たし花御堂
産月の尻餅かかし田植かな
荷も笠も先へやりけり夏の月
角力に庭掃せらる富貴紳
足の蚊をあして拂ふ夕かしき
夕立にとられて名吉買れけり
夕取に出るや牡丹の咲加減
夕立や序におかむ地藏堂
ふうと来てちまき手つとふ手哉
蚊やり火の跡ものたらん思ひかな
夕立や相に暗て日の平
雲の行影の重たし芥子の花

川筋を畫にして飛蓋かな
日當りを合老になくや蟬の聲
夕立や日傘をさしてまに合せ
川風に押されてた、む扇かな
咲く花もつゆと見られ夏のあせ
大鼓聞くさした日傘の輕み哉
夕立に傘さす隙をうたれけり
夏瘦や箆の重み身にしみる
迷兒の在所問ひけり夏祭
雨の手に汲て吞みけり野の清水
朔日の祝もす●んで脱袷
酪にひせて獨り坐のあく涼臺
春雨や是は芒になる草か
雨に顔なせて眞顔て鳴蛙
青柳の力士に折れぬ姿かな
笹浪は魚の機嫌やかきつはた
翻られて入齒して呼蓋かな
引張て添い振悪し茨の花
弓となら力らは見へす今年竹
人呼へは驚の顔出す青田かな
見返せば陸をつき夜の卵の木哉
口ゆへに蛙は蛇に吞まれけり
冠ふせたき男もあるや筑摩瑞
峯に寝ぬ果報なりけり時鳥
鷄の羽をかむ音や五月雨
美しくしい程恐ろしき毛虫かな

鏡九 八千代も光る 盤哉
市中をぬけて見上げるのはりかな
貧妃はなし何に競へん白牡丹
味は色と香にある新茶かな
大針に團を縫行蓋かな
今水をかけた田に鳴水鶏かな
蓋も露忘れぬ色や今年竹
夏瘦と思へど佗し親の顔
涼しさをくらへに行くや人の門
行先にすり火突出す日永哉
お嫁は日の内なり田植りた
抱た兒に涙こぼすや佛生會
涼しさを青た、みなる大廣間
夕立や跡さつはりと住た事よ
そふとはへかよりなごきひのに
眼に借りかあると言いつ、涼哉
逃げ廻る子を追ひ歩行く日傘かな
書麻した親へかけるや薄布團
雲山を吐か香かや五月雨
見心の花のつかさや白牡丹
塵の世を避くる橋あり杜若
聲聞けばとらぬ人なし川す、み
口の孫に貰のうまし時鳥
悠か身を果たす浮世か火取虫
夏座敷水行から配りけり
蓋も浮て廻るや舟涼み

親と子の畫麻わけ、り團扇風
佛にもそなえて見たき初松魚
中よしの咄して居る蚊屋の中
四角ても丸き咄しや蟬の中
見苦しや下女の畫麻の座塵とん邪
速喚くや是も昔しは寺の池
蝶の輪の團扇の風の輕さかな
竹の子や日に日に延る皮の音
梅櫻桃から待し牡丹かな
更衣たもとに風のかるみかな
團取をふるはす蚤の力かな
蓋寶都て暑さ凌さけり
鷲一羽殊に眼に立青田哉
言葉にもたの間のなき暑さ哉
さて人も斯く散らまほし芥子の花
流ねは水からも来る暑かな
海からの風も眞向や鐘
足る事を知れば寐安き紙帳哉
風筋は親に譲りて納涼哉
座敷にもまわり道する土用干
寝むたかる子の手に重し蓋籠
世は夢の浮橋越すやけしの花
木の影を親程したふあつさ哉
門口へ傘あて、蓋寝かな
金玉のたらしと下る暑さかな
涼しいと跡の人呼高見かな

母の居る國は夏かや不二詣
簀笠のかわり間もなし五月雨
蚤に渡間どられて假の寢處哉
父母に見せる青田の戦きふり
人にする子を連れ行くや暑中旅
木か、れて見へぬと涼し瀧の音
丹誠隠すかけなき青田かな
國の色國の燕や富貴紳
親のせたまて荷ひぬす、み蓋
水の味ためして見たる暑さ哉
よい風を夜な、産むや竹婦人
散らさぬは手柄●に芥子の使哉
夕立やはるか向ふは蟬の聲
印籠の富士も霞むや薄羽織
提灯を貸して影ある日傘かな
涼しいと出て来て暑る柳哉
乗石のくらくととする清水哉
客て哉あるふ團扇のてんこ書
眼をすへて蚤をさへけり畫麻起
不二の雪夢なればこそ蚊屋の中
火と見へてすむ辻や初はたる
筆に汗まわりてもしの崩かな
母にへは善きはと與ふ團扇哉
蓋狩歩行かぬ孫の指圖かな
雪こ、ちして吞直す清水かな
野に見へた風の届かぬ唇かな

雨たれの落場かわるや軒當浦
涼しさや露は其くせ暑ひ處
透し見る昨日の春や青藤
際満ちて散る、牡丹の名残哉
連は先ひと足御免五月山
母に榮與へて恩を蚊で送る
教子追苗に文字よむ娘撰みけり
松風の幾代す、しき神の浦
はらついた雨まで光る螢哉
卵の花や朝日曇りは日和し
名の方へ勝をとられな美人脚
誰か置いて行きし茶代そ涼み登
親の親其親もあり初轆
土地の名も世にあらはる、新茶哉
母の顔な加めて夜蚊に喚れけり
じき母を戀し思ふや土用干
竹の子のちよ着扱さけり皮の音
とふ向て寝ても涼しや竹生局
母の恩清水に酬ふ手向哉
鯛打つ手孫の寢息になまりけり
拍手の音たへまなき大御神
炎天や蟻のゆき、もいとかしき
道巾もせまき祭りの往來かな
年からも世からも頃ふ田うへかな
水無月や雨に落付く人心
水無月や蟻の道つく砂河原

娘には見せて置たし祭鍋
今年来た嫁や青梅忍ひ喰ひ
川狩や水にしみこむ火の平
棹さ、す流る、盛や涼み舟
生し置く釣の得物や杜若
昨日より今日の暑さや屋根の草
時鳥待夜や清しきるんの月
事足らぬ里は夜毎や時鳥
大山や斯て涼しき蟬の聲
涼しさの憎や柳のそよきより
只ならぬたそかれ時そ時鳥
向直す老の差圖や涼み盛
度返りに敷た團扇を尋ねけり
重りて七重も八重も雲の峯
田の色や昨日と今日の植境ひ
池に咲く花も馳走や夏坐敷
乞つめし雨や田畑に葉りはと
夏瘦や男の中の女の子
風道の別れては立つ青田かな
子を持つて親の思しる暑かな
葉は苦みにあり田草取
若竹や曲るも敷の生へ所
風吹や軒の柳も青すたれ
渡し待木影もありて蟬の聲
居なからに月見て涼し掛り船
持かへて月の出涼しうちねかな

灌佛や盃も来て掃く法の庭
露から匂ひ運ふや白牡丹
流れ行水の中なり鳴雛
川向同しの嘶や夏の月
時鳥あたり人の聲もなし
叱られて親のかを見る子供哉
いらぬ葉もかさり物なり初蒲子
短か夜も長ふ思ふや船泊り
着る心着せる心や辻ヶ花
近道を開へは清水も蚊へけり
白雨や音して乾く雨障子
嫁姑丸きはなしや紫結
雷の忍ひ所か雲の峯
家筋は銀の疵や土用干
植込た夜からまねくや竹の月
五月雨や盛も晴て中休み
掃除したのみに涼さ遊ひけり
涼しさを我物貞に氷賣り
持た手に匂の残る當浦かな
卵の花に押さる、閨や垣の外
竹の子やあるしもしらぬ垣の外
月入れば蚊の音やふへる木質宿
暑さをはしらぬふりして森の鹿
いつ見ても涼しき瀧の流れかな
涼しさにうかくふける涼哉
雨降た日から日永く思ひけり

初さや風なく涼し夏の月
風荷さ空のしまりや時鳥
人の寄る處はなれて夕涼み
若竹や殿よき出したる三日の月
母は子に添乳しなから追蚊かな
懸ならて水鶏のた、く妻戸哉
寝せたり添へてあり鳥籠籠
八つ橋の夢見し朝や五月晴
手紙より先つ受取るや杜若
風さしへ母をゆつりて月涼し
夕立やさわく港の掛り船
雲晴て月に一●時鳥
葉かくれを見出してうれし初茄子
竹うへて涼しさの増下坐敷
琴の爪借りて摘まはや紅の花
待たよりあらす夜更けて啼水鶏
卵の花や垣根は雪の朝はらけ
蚊帳へ蚊を入れる娘の髪の出來
孝行の更て音聞團扇哉
壺み込む今日の暑さを日傘かな
白牡丹活る娘の美しさ
茶の水を舟から好む蟬の聲
涼しさや岩をく、りて走る水
つりはりて蚊帳へ入れたき風の雲
白雨に懸かき出したる暑さ哉
閨なから聞知る聲や益かり

余處になきこの涼しみや惟か本
夕立の晴れてした、る軒の月
憎む蚊も逃すや親の寐入顔
願らる、方に日傘のたをれけり
籠のぎす暗やひるねの眞盛り
涼む夜や誰か木かけてしのひ聲
葉廻る山は跡なり閉古鳥
夕立やはいりて頼む傘の内
都より田舎自慢や田植うた
風の薫や窓に机を向直し
一筋は入梅の出水や海の色
澄昇る月を燈しや沖船
門の田は月に廻して麥の秋
千團子や元は一ツの願より
蚊帳に食れ待しとらみ聞夜かな
風鈴の静かさにある暑さ哉
勢ひは買人にもあり初松魚
烏羽玉の團を拂ふや益笹
負た子の差圖まかせや益持り
簾笠にあれか民なり早苗取
一日は我家も床かし青藤
人の寝た姿を笑ふ暑さ哉
麥の粉や笑せられて吹こはし
座敷から鮎釣る客や杜若
似面繪の團扇見つめる娘かな
閨の世を照らす益の苦學かな

青梅や子の手におろす口の錠
稻妻や只一ト打ちに庭の松
卵の花や近道しても元の閨
牡丹花や長者ともなる庭持
貸本の什替めぐりや更衣
さどらる、座禪の窓に益哉
五月雨や川に支ひし繫馬
起ふしの冷み忘る、卵月哉
貴ひ子に貴ひ添へたる轎哉
やせる子に心は付かて鶴飼かな
月涼し晝寝を戻す輪大工
水音は別に聞へて清水哉
橋の香を引く軒の蚊道りかな
また雪の重みは知らす今年竹
晝顔や此廣き野に風もなし
背圖を籠よふに飛ぶ螢かな
黒雲をたすきに掛て時鳥
平せぬ斗りや月の青藤
白雨のやしなふ野面田面かな
八雲たつ社に蟬の時雨哉
夕顔やはこりにそまぬ花の色
咲色よおもいおもいをよるひ草
世は、なれ坐敷やとんた蚤一ツ
居場かへて跡もにこさす水馬
羨さましや汗にもならぬ馳走ふり
かき残すたのしみ種や首の蓋

水入れぬ所し消しけり灯取虫
 蚊の多い家や前は田裏は藪
 遣ふ影闇にも見ゆる扇扇かな
 田に能いと聞けば暑さも何の其
 竹の子の竹になる夜や啼水鶏
 石菖や眠りを覺す庭歩行き
 近道を習ふた上へに清水かな
 蚤の世を放れて安し船世帯
 千年経し石の祠や苔の花
 流れ出る鮫の味や苔清水
 柳から立や江越しの青嵐
 落て来る龍に算や冷し麥
 乳つまひ手から這出る蓋かな
 突まては思案ふりなりけし首
 みしか夜の明て氣のつく舛落し
 牡丹花の向直りけり日和雲
 つかう度富士もやらつく扇かな
 月鉾や我もまはゆき祇園會
 一本の柳を位置に心太
 五月雨の中の日和や演庇し
 乙鳥の高く飛びけり半夏生
 明なんとしてくらむ時郭公
 わつさりと月の前降る白雨哉
 若竹や露の光りを闇に引く
 聞てさへ涼しき名なり須广明石
 男にも負けぬ出立や袖乙女

居眠りの中に動かず扇扇かな
 難波江や若の戦きに秋近し
 帷子や風に向ふてぬき捨る
 文なれみすはれてよればすみれ
 月のうめ人色協はなかりけり
 不如歸鳴里になき聞人かな
 蟻蟻やもの事か氣にかゝるふり
 獨身となりても止す河豚汁
 蟬の聲聞けば悲しき暑さかな
 晴る、夜の星か河邊の蓋かな
 さしなから木蔭を通る日傘哉
 夕立や取られて暑さ忘れけり
 捨てられて又新しい團扇かな
 うた、ねの耳に残るや蟬の聲
 さそわれて涼みの暑さ座敷哉
 夏に冬わすれぬ蟻の持さ哉
 蚊一ツに蚊帳釣る親のこゝろ哉
 はと、さす約束もせず待ッ夜哉
 寝た關を動かす蚤のちからかな
 舟人の振袖見たり土用干
 竹原をももる月かけや時鳥
 うこかして見れば石なり昔の花
 駒下駄ではるく來たる杜若
 袖捨し山田は青しかんこ鳥
 提灯のきへてたつとさ蓋哉
 池に手の届く座敷や夏の月

硯借せ庭の景色をかきつはた
 汗は今呑んた水なり上り坂
 空に月川に煙火や涼舟
 噓する子ゆへに戻る涼み哉
 聞ふとて宿は取らねどはと、さす
 腰かけて扇の底ぬく涼みかな
 山しみつ麓のくるま廻しけり
 僧の舌鵜飼の母を泣せけり
 蚤ひとつ貞女の帯を解しけり
 長持へ春かくれけりこゝろもかへ
 忘れたる文字を押へて書寝哉
 子の夢をそつと釣り込む蚊帳哉
 安き世や青田なかくて臂枕
 賤か家の清水も君か召されけり
 一ト雨に心の安し夏の菊
 君賀筆染て戯く扇かな
 積善の餘慶は左團扇かな
 人の氣を汲や清水の貰い言と
 客の來て扇た、ひや納涼蓋
 ふねからも燃る煙や雲の峯
 す、しさをわする、まてに涼み覺
 片蓋は暮す横りや夏の月
 手をついて向ふ見あける蛙かな
 一思案して又飛ふやひさかへる
 大膽な男も蛇に追はれけり
 騒かせた蓋は川を取られけり

短夜のたらしを老の對影昔
 夕立して叩きのけたる暑さ哉
 下りる程高ふ見上くや富士詣て
 聲に乗る眠りかかしや金魚賣
 錦拾て今は裸そ置婦
 されはとて蓋は抱かれす竹婦人
 覆さへ一重は清し筑摩鐺
 葉隠れに蝶の居眠る眞紫かな
 花嫁のおちつき見へて初轎
 向て居る方か故郷か通し鴨
 膝に子の夢をか、へて門涼み
 めおどなら通すも安し鴨二ツつ
 呼水の支掛詠ゆて簾
 親戀に備へて清し遊の花
 東風四風と持たれ居や涼み舟
 花菖蒲手をかけなから取おしみ
 氣の付た父の仰せと氷水
 かんにんの袋着て寐る紙帳かな
 雨の日の越深しさがつはた
 扉はかり扱たよふなり輝のから
 二人多して釣そこないし蚊帳哉
 て、ひじや須摩も明石も角の先
 蚤二ツ押へて飛す一つかな
 かや釣れば潮く去るや咄し野
 花の戸も葉と寂切で水鶏哉
 馬洗ふ湯氣に蚊柱腫れけり

鏡裏のよく目を長衣射やの深乳顔
 腹立る供の寐言やほど、さす
 果報ても寝ては待れす時鳥
 提て行けしに際なき心かな
 我焚て我も出て行蚊退哉
 雷に亡き母もふ墓詣て
 身を下けて尙は仰がる、藤の花
 父母の言葉にあたは茄子の花
 雷と聞て豆燃る嫁の孝
 た、く手に色ありそふな西瓜哉
 蚊遣火の絶へて間もなし朝煙
 鷓も人も進むや雨の夕あらし
 一ツ太、舞ふて來る蚊や窓の月
 炎天や人もまはらな橋の上
 こけに水かけて戻りて更衣
 麥がつて里の見へ出す機哉
 雲厚し薄しと待やほど、さす
 水無月と言けしきなし淀の川
 門の明迄待合す遊見かな
 萌つ、る麥の落穂や五月雨
 泄る音の聞てへてさか清水哉
 香にくき岩間の奥の清水かな
 推量の通り路ある茂かな
 花が穂か出そふに見ゆる粉かな
 身こしらへ出來て灯を消田植哉
 寐道具の敷に並ぶる團扇かな

鰯釣に逢ふたはかりの夏野
 涼しさをくらへに行や門涼
 垣せねと誰もさわらすけしの北
 夕立や漏りをわすれてはめて居
 唄歌にはあらて松風蟬の
 夏來てもつめたき儘や石のはわ
 散る程は咲き足すけしの盛かな
 わつらるて焚かせて困る蚊退哉
 涼しさを酒の肴も水仕立
 涼しさを二階に入れる海の風
 短夜や乾きもやらの残り
 青簾青き鉢桶うつり
 蚊の世話も忘れて橋の納涼詩
 ようくと忙かしそらに出來田植
 木の下で咄しするかの富士の山
 傷けど鯛の來て呼ぶ蒼寐かな
 誰も居ぬ二階に夏の月夜かな
 朝風や起きおしみせしかやの中
 一りんにまわりみらす牡丹かな
 思ひねの夢をあはすや郭公
 浮くさに思ひみたる、ほたるかな
 菊込の足代のほる毛むしかな
 流れて柳にのほるはたるかな
 老幼の遊ひも同じ蓋狩
 日和には輕ふ裝ふ田植笠
 夕立や知らぬ人とももやい傘

去年のけふ逢ひし咄しや宮清水
 夕立やあの松山のうら
 夏月も又一入のななめ哉
 雲の空見て氣を晴らす極暑哉
 豐年の歌も植込ひ田植かな
 裁式れも笠たけは被る田植かな
 はこ入の短手傳ふ粽かな
 はと、さす雲間の鳥か麻はか
 時鳥聞いてにわか旅したく
 五月雨に喜ぶうらの若もた
 五月雨のお蔭で散んだ大團圓
 聞き馴れて降らぬ似たり五月雨
 草の葉の露と見まこふ蓋かな
 ともし灯にかへし蓋の光りかな
 刺す蚊でも打たれぬ親の慈悲の願
 氷屋の賣り聲聞て暑さ増し
 閑古鳥鳴けは都を聞へけり
 手にうちわたせかれころの涼み哉
 夕立の舞てもと追ふ蟬の聲
 夕立やいといてしまふ土用はし
 呷むらに鳴く聲うらむ龍のむし
 旅人の氣つかふこねや杜鵑
 子枕に蟬の聲さ、木蔭哉
 音ひとは誰か言ひ草を氷室守
 舞ひ出る清水の音や岩の奥
 工夫して風薫らす夏座敷

切せ遣る心美し牡丹
 雨晴て存外に此暑哉
 はと、さす雲上りもらす今の聲
 卵の花や降りこむ瀧の右左り
 新宅や疊の匂ふ青藤
 木の蔭を見かけて行く夏の旅
 夕立や寄合ひ傘も旅の人
 膝たけは山を越ても時鳥
 窓の月一輝鳴けや時鳥
 夕立にわかれつおひつ瀧田の橋
 備の舌輪銅の母を泣せけり
 輕そうて着て見て重し夏羽織
 山を出る水音のよき卵月哉
 乗て来た馬見てつかふ扇かな
 氣つかふた手に火は消へて火取虫
 岩よりも水におんあつりしのみ
 暑さ日や人をひやかす水みせ
 寝姿や映せて見たき杜ヶ花
 我隙となりて涼しさ覺へけり
 十五夜も月影ふまぬ五月哉
 炎天や行儀亂せばはともなし
 おもはずもそりかへるなり時鳥
 有馬路に思はず聞や郭公
 初益藤の鼓ふ宇治の橋
 水に葉のまつりて流し瀧田かな
 生魂は一寸強かや夕立哉

卵の花の咲やそこらはかた明り
 へは鴉なせ落したか夏の月
 夕立や冠れと濡らす日笠哉
 水さへも添へてくれけり茶の走
 私しのなくて涼しさ断し哉
 蝶来てもとまる甲斐なし芥子の花
 短夜や雀の起す竹の窓
 水に影見てさへ暑し雲の茶
 涼しさに廻るやうなり水車
 おこたらす夏蚕飼育も國の爲め
 降る雨に手先追はる、田植かな
 寐も居れすされは待とて時鳥
 月涼し松の雫を膝のうへ
 田邊もわく暑の葉し田毎哉
 涼しさや出直して来る橋の上
 さみたれやとなりへつとふ茶の煙
 まつ親に着せて嬉しや初裕
 月二つ眺めて橋の納涼かな
 木の空に席やかかれて見へぬ蟬
 片よりて人とはしけり橋す、み
 氣の長ひ客には困る夏の月
 夏の夜や浮名はかりのあた枕
 學ひ得し道は同じせ盛る蓋
 乳黄ひの覗いて戻る晝寝哉
 持なりには筆もいねむる短夜かな
 襟先に百合と練ある小家説

卵の花や間に水くひ人の影
 兼たのかと思へは團扇つかひ鹿
 白雨や流合川のかたにこり
 聞く迄は耳にひまなし香手鳥
 毒見した鳥のあと汲み清水哉
 す、しさや竹にゆる、蚊の月
 團栗の其儘にある清水哉
 口呑の水は冷たし蟬の聲
 夏の夜や見すてぬ夢にとりの聲
 蝶までも来て手をするや花御堂
 卵の花や月を欺く姿かな
 稻の葉を詠め今宵の涼みかな
 群れ合ふて蜻蛉も送る夏の旅
 上手はと却退りして田植かな
 川狩や待て居のは香中居
 をふた子の手を打笑ふ蓋かり
 糸垂れて人の見上る藤の花
 ならへては夜の短かさ枕哉
 菰張つて夏はとなりとなりけり
 刈込し草を這出る蓋かな
 涙先へ瀧のしよや心太
 暇乞してからも又遠見哉
 燕子や露のふもりに寐せつけて
 富士を下り須戸にも瀬車や月旅
 栗柳の風を傳て青藤
 旅のつれ扇手はいらぬ木曾の道

秋をまつ手入さかりや田草どり
 人を見て徳利をわけし田植かな
 却退る田植や圃の一進歩
 らく寐して尻は火の付蓋かな
 寐ひへした見に思いたす母の慈悲
 入梅晴て瀧清し富士高し
 枝蛙風か啼かどおもひけり
 眼くはりもさかぬ廣野や飛ぶ蓋
 雷や落ても見せよ親の傍
 五月雨も苦にせぬ顔や石佛
 打水に誘引て出る嵐かな
 動く度剃刀を置く晝寝哉
 日盛を余所に岩屋の雪かな
 白雨や親の言葉か笠となる
 いささよく風に翻るや初のほり
 黄昏に泣く子をすかすはたる言
 木蔭のやみをぬひ行蓋哉
 雲行を眺て聞や蟬の聲
 朝霧に唄ふ田植や神代言
 目にたつや青田の中の一つ松
 五月雨を聲でぬふ氣か時鳥
 大海を枕屏風に晝寐かな
 夕煙りたぬまなき野や麥の秋
 入梅や風やわらさし草の上
 秀言の螢をなかなす君の手柄哉
 奏効の葉をかふりて使く夕立哉

日の出て見失ひけり飛はたる
 届く手も足のちからや杜若
 枝川に孫彦出来ぬ五月雨
 雨はこふ雲のされまや時鳥
 涼しさや月影もる、竹の窓
 忘れたる文字を押へて晝寝哉
 水無月や夕のたのし庭納涼
 五月雨や野邊のけしきもかはり鳥
 川狩や網もちあます戻り道
 夏の家は人を羨むうちにはかな
 旅立の子にすつるなと暑氣はらい
 蚊遣して親涼ませる晝の先
 隣へも配るやうなる蚊やり哉
 麥秋や隣へ頼む牛のひる
 雷やおそろしくなき親の傍
 笠取の山ははつして夕立かな
 追過て人の手に入る蓋かな
 蚊の聲の戸口にあまる日暮哉
 袴着て庭掃人や朝牡丹
 招く程川邊へそる、螢哉
 月添ふて聲の長よき郭公
 山中ちつた樹は杉ばかり也閑古鳥
 脱すのも髪應ふりや夏羽織
 一本を四軒に分ける初松魚
 折節さむに逢て田植の咄しかな
 玉碎くよふに思ふやちる牡丹

夏やしや身仕舞おそし化粧の間
かけ香や人の斗りかはなにいる
短か夜の五月雨いつや蟬のこへ
早乙女のふんはつた股への字形
衣更してかるくし下駄の音
扇の火の届いて清き若葉哉
露目のうへに影おく牡丹かな
山玉のあせ溜て洗や國のおか
我れこそといふ咲ふりや花あやめ
雨の夜はもうへにおそし時鳥
川海老の藻にすかる日や雲の峯
藤咲い算の音もはどりけり
蚊遣火の煙りにうつむ小里哉
旧換難静か乗る夜や夏の月
修善 温泉上や人のも揚り見て涼む
夏籠りや余所に見て居る世の埃り
降りなから傘に音なき五月哉
虫に灯を取られてさすや雷小針
苦は樂の種と唄ふて田植哉
はたかみも孝故にこそ蚊のさす
甲冑はひかし咄しや土用干
蚤飛んで船かたむける力かな
風の來る方を枕に寝寐かな
天地の匂ひ静めて夏の月
團ぐつと逐ひやる親のひる寐哉
白蓮や手向心に叶ふ色

見て居れば雲も動くや夏の月
涼しさを有丈孕び白帆かな
寝心の籠き朝風やかきつはた
蓑笠に離れて嬉し田植哉
團扇まで譲りて退くや涼哉
夜も早ふあけてはけす田植かな
とめられて煙されて居ぬ入梅の客
鳴聲につれて鳴けりさきりくす
暑さ日や風さへ物の影を吹く
一輪も買らぬはなし蓮の花
月高くなるまへ薄き蚊やり哉
一輪も買らぬはなし蓮の花
装に香を賣残したる菖蒲かな
若竹や雪を知らすにのひ上り
筒火の消き流れや夏まつり
水賣のこぼして行や汗の玉
新緑こかね色の菖蒲に寄や夏の花
散ることはしらさ顔なり若竹の花
刺へ坂にかゝるや日の盛り
浪音も黒し五月の雨もよい
岩槍葉を生やして行や夏の雨
星飛と見るや菖蒲の舞遊ひ
借りふれた夜は暖らぬ付婦人
雪と寝た肌は冷たむ竹婦人
人柄は習ふて出来す白扇
夏なくは四時河原もやみ夜かな

日さかりの暑さに盛る鏡み哉
雨の夜はともしの瘦る釜かな
七化花や見らる、度に色かわる
なせ歎手を握りて出すはたる哉
夕立や嬉しさをうなる池の鳥
思厚ふ思うて涼し親のかけ
拭はれて二度出る汗や子の厚さ
ふどころに這入る釜を放ちけり
みのも着す菊苗さすや親のため
百合の花思案にくれし姿かな
飛蓋間に艶ある夜なりけり
手枕や月をそい寐に蚊屋の中
氣の引けるよふに落ちけり柿の花
もてなしの客座に直る暑さ哉
賣切れぬ片荷重たさ暑哉
都にもふりつ、さけり五月雨
提燈は軒の花なり夕祭り
涼しさを月泉水にふわりく
寶舟浮た露や花菖蒲
子を寐じて草に螢を寫しけり
しら籠にうたれて涼し月の影
蚊に喰れなからふさくや蚊屋の穴
蟬鳴や山へ行野に草いされ
六部への旅の馳走や遊園扇
休む間も腰の骨折る扇かな
取一つはねて縁のめひさくつし

色んでもあらわれて見ゆ盛哉
透ひ子に夜を寝さるける水鶏哉
なてしこはころひなからも咲に覺
切かけて切惜みけり杜若
卿啼や今日も降らすに消る雲
言ひ聞す母の言葉や初拾
はと、さすないても知るや親の恩
人の着て居るのは涼し夏羽織
結ひたての髪に菖蒲の匂哉
雪らしく卵の花降たし夜明け際
雨笠の雨は晴れ行はぬかな
目覺まして露へ寐直る蓑寐哉
紫の木に此上もなき蟬の聲
寄く手さいあるにもたれつ遊園扇
卵の花が鳴たやうなりはと、さす
出来初を親にくんたる新茶かな
蠅牛君子は形愚のこことし
庭下も冷して置きぬ瓜の傍
もふ來など言ふて逃すや火取虫
笠や吹雪に道は絶へなから
寐せて出た子の顔覗く蚊帳哉
雪一重不士も脱きけり更衣
夏座敷裏も表も田と田と田
谷に色をのませる宇治の新茶哉
雨に色風に香のよし百合の花
茶を立て親の蓑寐を起しけり

涼さや谷間の風に一休み
裸か身や露の野を舞目形
三郎か土産に出すやまじり瓜
花の香の付てありけり初茄子
親の目のさめぬ間や播なつの庭
存戸を取る覚昔時や雲の峯
ひと世界さけて歩行や笠籠
釣り上た月に釣らる、忍哉
やすみ寄る木に涼風の葉音哉
茶筵の乾く匂ひや蟬の聲
共越の乾く匂ひや蟬の聲
短夜や断しの残る旅かへり
不二か夢中ふん蚤に喰れけり
町中やふいと涼しさをかり角
夕立や片袖濡る、もやい傘
母人の手織橋なり土用干
昔もせぬ様に降りけり五月雨
晝寐して居ても世帯の苦勞哉
断し迄一抱へある牡丹哉
夢に見て涙のたねやはつ茄子
涼しさを暑てかいてもふしの山
三保涼し松の上もくしら帆哉
花に透價のある哉はつ胡瓜
鳩に煮へ込むよふや蟬の聲
勝た若のよい返さしをそ一納涼
若竹の機嫌盈る、平哉

かわせみや浮世離れたとまり處
落ちてから蚊の目に立つ牡丹哉
手元から風の生る、田植哉
儘にして置れぬ門の毛虫哉
蟬の出た穴で啼く子をたましけり
畔越しにうたを最合の田植かな
水音を添てかきけり夏座敷
つんぼさくさいて涙の唐からし
顔かくす日傘に愛の纏れけり
盛すへし半の親子は見てもよし
舟のはらつ、みうつ浪音流し
若竹やとまりの家の蟬らす
地鏡にも轉けぬ浮葉の柱哉
厂渡るやうに日傘の往來哉
駒さやむ團扇に研押わけり
宵月て母は戻るや夕涼み
親の手を引て出けり夕す、み
四方山は皆しすまりて夏の月
喰つて見たとうりの物や夏水
打れても無事て居る子や水鏡
憑香や間にも人の行ちかひ
持ちかへて風新しき扇かな
八ッ橋の名に残りたり燕子花
水無月やたしな雨を海に降
氷賣の手拭白し夏の月
まどめては崩す機嫌の暑かな

運さくや世はしら無垢の厄か庵
夏瘦や鏡に向ひ苦矣ひ
若る事は親の恩なり單もの
寝沈し親の蚊を追ふ破れ團扇
寐た孫に氣遣ふ老の團扇哉
藥玉や命の糸の繋きよふ
脱き替ゆる噴着に汗の通りけり
氣兼して蝶のとまるや白牡丹
寐たらしを蚊の一ツ来て動かしぬ
夏月や四方の山見る善光寺
長き日や茶を呼ひたるす松作り
捨られて命拾ふや灯取虫
夏しらぬ家や水音木の茂り
蚤一つ主ある帯は解せけり
涼しさや竹は露の物なから
呼戻し乳母にさ、せる日傘哉
赤らくくと伸て青田のそよ哉
口盛りや助かぬ水の寂安き
寢た親に御恩を仰く團扇かな
雲間より漏れて一聲はと、さす
ねた親の汗みてそつと明る脊戸
陰曆や蠅追ふて待夫の旅
厩程玉に位や飛はなる
十里寝る間を明け易き夜舟哉
上手程笠の軽る舞ふ田植かな
野に落は勝れけり時鳥

家起す人や朝から鉄に汗
吞て来て人に鉄る清水哉
乞遂けし雨に一日まくら哉
渡し橋の見へて砂ふむ暑かな
蚊遣火を焚かて假寝や親の側
花の露よせて佛の産湯かな
ひるの蚊をうしろへ陰す佛哉
結ふ神あ都ての縁や筑廣なへ
抱た子に別れを告て時鳥
基にまけて蠅さら蚤にまけにけり
汗の跡不士に目の立つ暑かな
乳呑子の這出て進ふ晝寢哉
雪の日を思ひ出したる暑かな
色々に行儀崩して納涼哉
鶏も出て踏む氣哉棄降た朝
石となる人もあるのか重ね鍋
降り兼て消行く雲や蟬時雨
留守せよと猫撫て出る田植かな
外風呂の客の咄しや夏の月
うらやまし蚤に寐ぬ夜の水の鳥
麥打や親の蚊へを聞なから
夕顔の露こはれけり麥のうす
世を捨た親の纏たる柿若葉
水賣のまけて添るや月一つ
泥を出て佛を纏運の糸
益にも源氏平家の入まじり

蚊に喰れくても打下手落かな
手に取りて母に聞けりひき蕪
朝顔や子の眼さましに庭掃除
露や附子に見せぬ氣草臥
我形りを改めて見る牡丹哉
差掛て来るは日傘を戸口迄
見のかしにならぬ毛虫や蕪先
若竹や直に育ては老の杖
石古く水は新らし昔の花
佛の見ゆるやうなり虎か雨
開古鳥鳴くや一羽を二た所
火にあて、爪彈三味や五月雨
蚊遣り火に見送る人や貸へ乳
今年出た竹とも見へぬ長さ哉
水打ては寝てゐる犬も逃にけり
撰甲斐のある筈や親の膳
根本のみ日はくれにけり蓮の花
すけ笠の廣く居並ふ田植哉
雨乞や曇れは晴る、人こゝろ
白蓮の跡けは闇も動きけり
孝行の夜伽の徳か郭公
阿られて出た子氣遣ふ暑かな
涼しさや船にさし込む山の月
越して来た山見て寝く扇かな
歩行なから口笛鳴らす暑哉
貸さぬのは結みこゝろ哉竹掃人

手拭に遠慮を包ひ雨かな
川符や親の氣遣ふ男の子
涼風を煽き見せけり團扇賣り
蚊帳を出て又見直すや子の寝顔
涼風を枕に舟の晝寢哉
木綿着た人か主や白扇
心から角はなけれど蝸牛
心太からしに泣て笑ひけり
ぬきん出て親より高し今年竹
爾待ちし甲斐はなけれど夜の月
雲の落これそ暑さの酢哉

	<p data-bbox="1456 237 1921 819">[Faint, illegible text]</p> <p data-bbox="2504 1552 2562 1724">100</p>
--	---

